SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成28年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書

第5年次

── 令和3年3月 ──

学校法人 創価学園

創価高等学校

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成２８年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書・第５年次

令和３年３月

学校法人　創価学園

創価高等学校

内容

1．総論　4

A) はじめに....................4

B) 研究開発報告書....................5

C) 研究開発完了報告書....................10

2．グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)　29

A) 概要....................29

B) ドキュメンタリー映画視聴サービス「cinemo.edu」....................30

C) ドキュメンタリー映画を見よう(全学年)....................33

D) レイテ決戦から戦争とは何かを知る(2年生)....................35

E) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)....................37

F) SDGs カードゲーム(1 年生)....................40

G) 模擬国連「国連ランチ」(3 年生)....................43

H) 人権すごろく(2年生)....................46

I) 人権ディベート(2年生)....................49

J) ファイナル・プロジェクト(3年生)....................53

3．グローバル・リーダース・プログラム(GLP)　55

A) 概要....................55

B) クリティカル・イシューズ・フォーラム(CIF)オンライン....................55

C) フィールドワーク　広島　オンライン交流会....................57

D) 小平市へのアクションプラン提案....................58

E) 評価と分析....................61

4．言語技術　65

A) 概要....................65

B) 学習・トレーニング内容....................67

C) 評価....................86

D) 成果および今後の課題....................90

5．フィールドワーク　92

A) 概要....................92

B) オンラインスタディツアー....................92

C) 沖縄オンラインフィールドワーク....................94

6．グローバルセミナー　97

7．世界市民探究(GCIS)　100

A) 概要....................100

B) あいまいな日本語探究....................101

C) 食品ロス探究....................109

D) 評価と分析....................115

8．時間管理手帳　119
9．評価と分析 120
A) アンケートと分析 120
B) 外部業者による資質の分析 122
C) 英検受験者数と合格者数の分析 124
D) 教員の意識の変革と教育力向上の分析 124
E) 保護者アンケートより分析 126
F) 運営指導委員会 126
10．カリキュラム表　138

1. 総論

A） はじめに

創価高等学校　校長　塩田誠一郎

これまで、SGH アソシエイト校として1年、また SGH 校として5年間研究開発を行わせていただきました。この6年間で、先生方は変化を恐れず前向きに改革を進めてくださるようになりました。そして、なによりも生徒の学習意欲が増し、生徒に人間力、対話力、知力、社会力などの育てたい資質・能力を育むことができるようになったと実感しております。

創価学園は「日本の未来を担い、世界の文化に貢献する有為の人材を輩出すること」を目的として、池田大作先生により創立されました。「健康な英才主義」「人間性豊かな実力主義」の教育方針のもと、生命尊厳の理念に立脚しながら、生徒一人ひとりに内在している優れた能力を引き出し、限りなく豊かな人間性の開発を行い、生徒たちが自信を持って社会の指導者に成長していけるように教育活動をおこなってきました。

そこで、本校では SGH の活動を始めるにあたり、グローバル人材像を「創価の精神の根本である『生命尊厳の思想』をもって、世界平和に貢献する『地球規模課題の解決』に寄与できる人材」と定めました。またSGH研究開発構想を「言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム」と掲げて活動してきました。

言語技術の授業では、日本語と英語でのコミュニケーション能力、文章や情報を正確に読み解き対話する力、論理的な文章を書く力など探究学習の土台を作りました。その上に、二つの学習プログラムを実施いたしました。一つは、全校生徒を対象にした探究学習プログラム「GCP」（Global Citizenship Project）であり、もう一つは、希望者から選抜した数十名を対象とする探究学習プログラムで、全校に展開する学習のパイロットケースとなる「GLP」（Global Leaders Program）です。

こうした取り組みにより学校全体のカリキュラム・マネジメントが進み、3年の3学期には探究学習の成果を小論文にまとめ、日本語と英語によるポスターセッションを行うまでになり、内容も年々向上させることができました。何よりも生徒が積極的になり、社会で起きていることや世界の出来事を知り「自分ごと」として積極的に係わろうとするようになってきたことを嬉しく思います。大きな国際会議に自ら参加するようになったり、海外語学研修のプログラムに応募する生徒が増えたり、留学ジャパンに挑戦する生徒も増えてきました。

こうしたこれまでの SGH の取り組みの内容は、今年度から「総合的な探究の時間」としてカリキュラムに組み込んで引き継いで発展的に実施しております。また、言語技術については小学校から中学校まで一貫して行うカリキュラムとして組み上げることに挑戦しております。

これからも、創価高校は創立精神に則り「誰も置き去りにしない」社会を建設する世界市民を育成し続けるとともに、理想のカリキュラム開発をすすめながら、さらには、ユネスコスクールや SGH ネットワークでも中心的な役割を果たしてまいりたいと願っております。

最後になりますが、これまでご指導いただいた運営指導委員の無藤隆先生（白梅学園大学名誉教授、元文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会部会長）、遠藤誠治先生（成蹊大学教授、元日本平和学会会長・現理事）、村上清先生（岩手大学大学院客員教授・元学長特別補佐、立教大学・東北大学客員教授、陸前高田市参与）、また私どもの取り組みにアドバイスしてくださった佐藤悟様（元中南米局長・外務省参与）、飯田順三先生（創価大学法学部教授）に深く感謝申し上げます。さらに、カリフォルニア大学アーバイン校、アメリカ創価大学をはじめとする国内外の大学、国際連合大学、ミドルベリー国際大学院モントレー校、Dr オルガ・モハン高校、ジェームズ マーティン不拡散研究所などの国際機関、研究機関や各企業、さらに交流させていただいた那覇国際高等学校、広島女学院高等学校、長崎・活水高等学校、関西創価高等学校などの SGH 校や各学校の皆様のご厚情に感謝申し上げます。引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます

B） 研 究 開 発 報 告 書

（別紙様式１）

令和２年１月２９日

研究開発実施計画書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　　　東京都小平市たかの台２番１号
管理機関名　学校法人　創価学園

代表者名　　理事長　原田　光治　　印

１　実施種別
　□　幹事校
　■　幹事校以外　創価高等学校

２　研究開発名
　言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

３　研究開発の概要
1. 日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成
2. 全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成
3. 選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

４　事業の実施期間
　契約日～２０２１年３月３１日

５　令和２年度の研究開発実施計画

（１）「言語技術」
○１・２年生において、年間１単位を「言語技術」（学校設定科目）の授業として実施する。特に１年生の授業では、国語科教員と英語科教員のティームティーチングで行い、日本語と英語による「言語技術」の往還トレーニングを実施する。
○コミュニケーション能力、論理的思考力・表現力、及び批判的思考力を育てることを目的に、１年生は「対話」「作文」「情報伝達」のトレーニングを、２年生は「情報分析」「認知」「議論」のトレーニングを行う。
○毎回の授業プリントを生徒自身でファイリングさせ、ポートフォリオを作成させる。学んだ「言語技術」や、活用できる場面等を記録させ、実生活に活かせるポートフォリオの作成を推進する。授業内容をプリントに書き写す時間が少なくて済むよう、プリントの構成を練り、生徒がトレーニングする時間をできる限り増やす。
○後に記述のある、３年生 GCP・ファイナル・プロジェクトの実施にあたり、小論文作成やプレゼンテーションの仕方について指導を行う。

○クラス担任は「言語技術」の授業を生徒と一緒に受け、「言語技術」をトレーニングし、自身の教科の授業で活用・応用する。
○放課後にクリティカル・ライティング・センター（CWC）を開設し、作文・小論文のきめこまやかな個別添削指導を行う。
○ホームページで授業実践を公開し、外部に研究成果を発信する。
○創価中学校、東京創価小学校と定期的に「言語技術」推進会議を開催し、小中高１２年間を通して「言語技術」を学ぶ教育課程を策定した。各校の連動性を図りながら、創価中学校、東京創価小学校においても「言語技術」の授業を開始した。具体的には、今まで高校で行っていた言語技術の内容の大半を中学校の課程に移動し、高校では更に高度な能力の育成を目指す。小学校では国語の授業の中で、６年間のカリキュラムを組み、小学校でも出来る内容を昨年より開始している。本年は年次進行により進級してくる生徒を見ながら、より適切な内容構築を行う。これにより、SGH 後の継続も可能とし、一貫教育として発達段階に応じたプログラムも検討する。

（２）協調的探究学習グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）

○全校生徒を対象に総合学習の一環として行う。国連が提示する地球規模課題(Global Challenges)を中心にテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れ課題探究に取り組む。
○１年生は SDGs・環境・貧困を、２年生は戦争・冷戦後の紛争・人権を、３年生は国際パートナーシップ（模擬国連）をテーマに設定する。
○実施にあたっては、生徒で構成する GCP リーダーズが運営を担い、生徒が主体的に運営することで、リーダーシップと行動力を育む。
○２年間の言語技術と GCP の集大成として、３年生は「ファイナル・プロジェクト」を実施する。ファイナル・プロジェクトでは、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の 17 のゴール（SDGs）からテーマを設定し、地歴公民科と国語科、英語科の教科横断で課題研究に取り組み、日本語・英語でのポスターセッションと、2,000 字以上の日本語論文と、英語による要旨の作成を行う。
○２０２０年度から年次進行で実施する「総合的な探究の時間」の策定のため、学校として「探究科」を昨年度策定した。このメンバーは SGH 教員でなされ、今まで行って来た SGH の GCP 企画を「総合的な探究の時間」で引き継げるように計画する。更にパイオニアケースとなる取り組みも実験的に行う。SGH 最終年となる今年、GCP として得て来た多くの手法や知見を自走可能なカリキュラムの中に取り組む。
○３年間の GCP 企画を通しての、ワークシートやレポート・論文等をまとめて、ポートフォリオを作成させる。
○国内外の識者を招聘し、グローバルセミナーを昨年と同様の規模で開催する。

（主な昨年度実績）

５月	マカオ大学国際部・シンディ氏 米国パデュー大学・ヌニェス教育学科長
６月	タイ·チュラロンコン大学一行 アメリカ創価大学首脳 フィリピン・イースト大学看護学部長、 中国・首都師範大学、南開大学、北京教育学院教授、大学院生一行
７月	米国 ICPEL
１０月	ウズベキスタン国立大学総長、日本外務省職員
１１月	英国ケント大学ヒュー・マイアル国際関係学部名誉教授、 元ブラジル大使・外務省参与 中国・首都師範大学初等教育研究所教職員一行 カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部マリアン客員教員
１月	フィリピン・国立中央ミンダナオ大学ヘスス学長

○GCP で探究した内容を英語で発表する場として、東京グローバルゲートウェイを活用し、英語で SDGs を学習させる。
○UNHCR WILL2LIVE 映画祭の学校パートナーズとなり、校内にて上映会を実施し、一般に公開する。昨年度は「シリアに生まれて」を上映し一般公開した。

（３）グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）
○高校２・３年生の希望者から２０名を選抜し行う。
○「核廃絶」を中心に、より高度な課題研究に取り組み、GCP でも取り扱っている SDGs の内容と絡ませながら、研究成果と手法を学校全体へと還元していく。
○毎週金曜日の 18 時から 19 時 30 分に開講し、土日や長期休暇にも活動する。また、３年生は学校設定科目「世界市民探究」で扱い単位とする。これにより SGH 終了後も実施が可能とする。
○「知の理論」を中心としたＩＢ教材もテキストとして参考にし、論理的・批判的思考力を涵養する。核問題に関わる国内の施設や資料館を訪問する。また Zoom などを用いたオンラインでの講義も行う。
○資質能力の変容の測定方法を業者テストにて昨年度より行った。引き続き有効な測定方法の採用と研究を行う。
○教授法の基本を学び、地球規模課題のテーマに沿った内容で小中学校・地域に出前授業を行う。
○３年生学校設定科目では、２０２１年度より開始される総合的な探究（２年生）を意識した、課題発見力と課題解決力を養う、外部機関と連携する探究学習を実施する。
○初年度は、課外授業であったものが、昨年度４年目より学校設定科目単位となったが、本年度も引き続き学校設定科目として単位を認める。
○GLP 卒業生のネットワークを作成。GLP 卒業生全員が海外大学進学か海外留学をおこなっている。今後の相互の支え合いと留学による知見を現役生にもたらすために、GLP 卒業生のネットワークを確たるものとする。これは SGH 終了後も継続する。

（４）国内外でのフィールドワークの実施
※東京オリンピックの影響のため、夏のフィールドワークは時期を検討中。
○アメリカ・カリフォルニア（１１月実施・参加者１４名）
SDGs のテーマに関して、３ヶ月にわたり探究型学習を行う。現地高校生とともにプレゼンテーションやディスカッションを実施しテーマに応じて現地での調査を行う。
○広島・長崎（実施時期検討中・参加者各１０名、合計２０名）
被爆体験のインタビューや、現地での調査を行い、核問題への理解を深める。
○アメリカ・カリフォルニア（３月実施・参加者２名）
高校生による核廃絶問題に関する会議であるクリティカル・イシューズ・フォーラム（CIF）に発表者として出席。
○沖縄（１１月実施・参加者１１名）
第２次世界大戦の国内激戦地・沖縄にて、戦争体験のインタビューや沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館での研修を行う。
○岩手（７月実施予定・参加者１２名）
岩手県葛巻町にて環境への自治体の先進的な取り組みを体験的に学ぶとともに、陸前高田市では被災体験を伺い、震災復興に向けての様子を学ぶ。
○首都圏（参加者各２０名、合計６０名）
各学年の GCP 企画を通して学んだ内容の理解を深める。１年生：JICA 地球ひろば（市ヶ谷・８月実施予定）、２年生：国立ハンセン病資料館（東村山・２月実施）、３年生：国連大学（渋谷・１２月実施）

以上の取り組みに加え、次の取り組みの実施に向け準備を開始する。

○中国（上海）、アメリカ（カリフォルニア）、ブラジル（サンパウロ）、インド（ムンバイ）をはじめとした、海外高校生との平和・文化の意見交換会
○昨年度より開始された、東京外国語大学の世界展開力強化事業(ロシア)との連携と、学生同士の交流を引き続き行う。
○サステナブル･ブランド国際会議 2020 に参加し課題論文等の提出をする。2019 年度より招待を受け、生徒が自発的にも参加し、課題等の提出を行っている。
○タイム･マネジメント指導法開発として、毎年出場・入賞している手帳甲子園を視野に入れて本年も同様の取組みを行う。

（５）研究開発成果の普及に関する取組
○学期２回の GCP 一般公開授業と、中間報告会(11 月)と年度実践報告会(2 月)の開催。
○取り組みや開発した教材を、学校ホームページに特設サイトを設置し随時発信する。
○地球規模課題のテーマに沿った内容で、小中学校・地域に生徒が出前授業を行う。
○環境分野において、継続してきた玉川上水の研究を日本ユネスコ協会連盟のもと、小平市公民館他にて展示・プレゼンテーションを行う。
○UNHCR WILL2LIVE 映画祭の学校パートナーズとして、校内にて上映会を実施し、一般公開すると共に SGH 成果発表の場も設ける。
○ユネスコスクール加盟申請を終了。チャレンジ期間を取組み一年後にユネスコスクールに加盟を目指す。SGH 終了後の継続する取組みや公開授業をユネスコスクールとして行っていく。

（６）高大接続について
○スーパーグローバル大学グローバル化牽引型に採択されている創価大学と、定期的に「高大接続ワーキング」を実施。SGH の間は、毎回の公開授業・中間発表会・活動報告会に教授に参加をいただき助言をいただいてきた。最終年度は、より自走できるカリキュラム作成のための会議としていく。
○学校設定科目で、大学教授の派遣を昨年度と同じ規模で引き続き行う。現在は高校のみの単位認定であるが、大学での単位認定化に向けての協議を行う。
(主な昨年度実績)
学校設定科目「平和学入門」
１学期　全１６コマのうち、８コマが大学教授の授業、４コマが留学生交流
２学期　全２０コマのうち、１０コマが大学教授の授業、４コマが留学生交流
３学期　全８コマのうち、２コマが大学教授の授業、２コマが留学生交流
他、学校設定科目「国語演習」でも大学教授の授業も昨年と同様に行う。
○来年度から開始する総合的な探究の授業で、年次進行の２年生で展開する「貧困・飢餓・教育・環境・水問題・経済格差」の問題についてのアプローチで、大学での受け入れ体制を検討し、高校生が大学へ行って探究活動を行うシステムを構築する。SGH 終了年度より開始できる協議を行う。
○ユネスコスクールの ASPUnivNET 大学である、玉川大学、創価大学と連携し、SDGs の取組みを SGH 校からユネスコスクールの取組みとして継続させ、高大接続の学習の機会の創成と発表の機会の場を設ける。

＜添付資料＞
・令和２年度教育課程表

6　事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
言語技術	校内	永嶋　敏明
Global Citizenship Project	校内、岩手、沖縄、海外、首都圏	江添　正城
Global Leaders Program	校内、広島、長崎、首都圏	石野　正好

7　課題項目別実施期間　　　　△オリンピックのため実施月検討中

業務項目	実施期間（契約日　～２０２１年３月３１日）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
言語技術	←	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
ＧＣＰ		←	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
ＧＬＰ			←	―	―	―	―	―	―	―	―	→
フィールドワーク				△	△			○	○		○	○
グローバルセミナー		○		○		○		○			○	
UNHCR 映画祭											○	
国内外高校との交流	←	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
ポートフォリオの開発	←	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
オンライン英会話	←	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→
タイム･マネジメント指導	←	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	→

※計画は事業計画書提出時のものであり、実際の事業着手は契約締結後とする。

8　所要経費

別添のとおり

担当課	経理募金課	ＴＥＬ	042-342-2611（代）
氏　名	山下　英一	ＦＡＸ	042-342-2617
職　名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp

C）　研究開発完了報告書

（別紙様式３）

令和３年３月２８日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　　　東京都小平市たかの台２番１号
管理機関名　　学校法人　創価学園
代表者名　　　理事長　　谷川　佳樹　　　印

令和２年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

令和２年　４月　１日（契約締結日）～令和３年　３月　３１日

２　指定校名

学校名　　創価高等学校
学校長名　塩田　誠一郎

３　研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

４　研究開発概要

・「自走」を課題とし、総合的な探究の時間に移行を開始した。１年生では「世界市民探究（ＧＣＩＳ）」を実施、２、３年生は現行のＳＧＨプログラムを実施した。
・フィールドワークはオンラインで国内・国外とも一部実施した。
・課題であった「普及」は、報告会等をオンラインとリアル公開のハイブリッドで行い、オーディエンス、アンケート回収とも１０倍以上に増えた。
・課題であった「評価」はオンラインで測定できる業者に変更し継続した。
・「言語技術」は小中高キャンパス言語技術委員会が継続。今年度から、中学校で言語技術のワークブックを購入した。
・「世界市民探究」の一貫性を目指し、小中高キャンパス探究委員会を発足した。
・中間・最終報告会に関西創価高校も参加・発表し、コンソーシアムとしての基盤を作った。
・ＳＧＨ終了後の発表はユネスコスクールとして行うことを目指し、ユネスコスクール・チャレンジ期間としても活動した。

5　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ⅰ、SGH 報告会・運営指導員会								○			○	
Ⅱ、高大接続ワーキング	○			○	○		○					
Ⅲ、世界市民育成ワーキング	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○			○
Ⅳ、GCIS 公開発表会											○	

（2）実績の説明

Ⅰ、ＳＧＨ報告会・運営指導員会

①中間報告会　2020 年 11 月 21 日　13:30～15:00　・オンライン(ZOOM)とリアで実施

【対象】運営指導員、関係者、地域学校、ＳＧＨ校、保護者

【人数】オンライン参加者を含め１３８名が参加

【取組・支援】

・中間報告会で初めて兄弟校の関西創価高校も発表。（関西創価高は昨年度ＳＧＨを終了）成果としては、今後を見据えたコンソーシアムの一歩を踏み出せた。

・ユネスコスクール・チャレンジ期間の ASPUnivNet 支援大学である玉川大学教育学部の小林亮教授にも来校いただき、講評と今後の活動のアドバイスをいただいた。

②2020 年度　第１回運営指導員会

＜運営指導員＞村上 清 岩手大学学長特別補佐／遠藤 誠治　成蹊大学法学部教授

＜アドバイザー＞小林 亮　玉川大学教育学部教授

＜管理機関＞狩野 俊一　創価学園法人本部

＜ＳＧＨ委員＞中川学園長、塩田校長、久保副校長、谷教頭、佐々木教頭、井上、石野、江添、今野教諭

・今回の発表内容について、達成度について

・探究科への移行についての指導

・今後継続（探究活動）していくテーマについて

・オンラインでの普及の効果と今後の公開について、大きな発展があった
従来は参加者１０名程度→１００名を超える参加
アンケートも１０名程度→６０名を超えるアンケート回収となった
関係者や保護者から、初めて参加できたとの声が多かった。今後の継続も検討した。

・ユネスコスクールへ活動を継続する場合の留意点。来年度からユネスコスクールになった場合の、現在の活動の継続の方向性や普及などについても協議した。

③最終報告会　2021 年 2 月 20 日　13:30～15:00　・オンライン(ZOOM)とリアで実施
【対象】運営指導員、関係者、地域学校、ＳＧＨ校、保護者
【人数】オンライン参加者を含め１２０名が参加
【取組・支援】
・兄弟校の関西創価高校も継続して発表。前回はＯＧによる参加（ＳＧＨ時代のものの発表）であったが、今回は現役生徒による継続して行っているＳＧＨプログラムの発表を行うことができた。
・高大接続の観点から、創価大学の鈴木将史副学長に参加いただき、講評と今後の「総合的な探究の活動（ＧＣＩＳ）」の受け皿としての大学の準備について討議ができた。

④2020 年度　第２回運営指導員会
＜運営指導員＞村上 清 岩手大学学長特別補佐／遠藤 誠治　成蹊大学法学部教授
＜アドバイザー＞佐藤 悟　元ブラジル大使／飯田 順三 創価大学法学部教授
鈴木 将史　創価大学教育学部教授
＜管理機関＞狩野 俊一、太田 総二郎　創価学園法人本部
＜ＳＧＨ委員＞中川学園長、塩田校長、久保副校長、谷、佐々木教頭、井上、石野、永嶋、江添、今野教諭
・今回の発表内容について、達成度について
・５年間ずっと見て来て、毎年進化していたことが素晴らしいとの評価をいただいた
・評価についての課題、探究をいかに評価していくか大学でも課題。
・生徒による授業評価アンケート結果分析報告書(代々木ゼミナール教育総合研究所)の評価について分析
・ＳＧＨネットワーク校に申請。今後の活動について

Ⅱ、高大接続ワーキング
＜構成員＞
・学園法人本部　太田センター長、中西副センター長、狩野参事、林
・創価大学　関田、鈴木副学長、渡辺アドミッションセンター長、中山、池ヶ谷、山口、小田
・創価高校　久保副校長、谷教頭
・関西創価高校　大月副校長、本房教頭
＜開催日＞　４月２１日（ＴＶ会議）、７月２４日（ＴＶ会議)、８月７日（集中討議）、１０月１３日（ＴＶ会議）
＜主な議案＞
・ＳＧＵである創価大学の取り組みと、ＳＧＨの連携、JAPAN e-Portfolio の利用
・ＳＧＨの言語技術の授業教師の大学からの継続派遣、未来構想
・WWＬ申請も見据え、高大接続・東西接続のコンソーシアムの確立
・ＡＰの検討、他校の事例など検討
・現在行っている学校設定科目の大学教授による授業の更なる発展
・高校の「総合的な探究の時間」の大学への展開について、受け皿の検討

Ⅲ、世界市民育成プロジェクトワーキング

＜構成員＞

・学園法人本部　太田センター長、中西、角内副センター長、橋口

・創価高校　久保副校長、佐々木教頭、松本卓、吉澤教諭

・関西創価高校　大月副校長、山岸、福田教諭

＜開催日＞　４月２１日、５月１４日、５月２８日、６月１１日、７月２日、８月６日、９月３日、９月１８日、１０月９日、１１月１３日、１２月１８日、３月５日（すべてＴＶ会議）

＜主な議案＞

・ＷＷＬ申請も見据え、東西の共同、ＳＧＨ終了後の創価のコンソーシアムの確立の検討

・アメリカ創価大学、ブラジル創価学園の海外姉妹校との連携と教育コンテンツの普及

・ユネスコスクールとしての活動、フォーラムへの参加、発表による普及

・創価高校のＳＧＨ発表会での、関西創価高校の事例発表による内外普及

・東西のＳＧＨで行ってきたコンテンツの共通認識と普及

Ⅳ、GCIS 公開発表会

・食品ロスの専門家で、公益財団法人日本フードバンク連盟理事の田中入馬氏とつなぎ、オンラインで最優秀評価であった４本の発表を見てもらい、講評をいただいた。この発想は田中氏を通して実用の検討がなされることになった。

6　研究開発の実績

（１）実施日程

※コロナ禍のため、企画し準備しながら結果として実施できなかったものは【中止】とした。フィールドワーク、グローバルセミナーはオンラインに変更して実施した。

業務項目	実施期間											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ⅰ、言語技術	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	
Ⅱ、ＧＣＰ	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	
Ⅲ、ＧＬＰ		⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	
Ⅳ、ＧＣＩＳ			⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	
Ⅴ、フィールドワーク（オンライン）								◎		○	○	
Ⅵ、グローバルセミナー（オンライン）			○				○	◎				
Ⅶ、オンライン英会話	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	
【中止】英字新聞作成												
【中止】イングリッシュ・キャンプ												

Ⅷ、海外高校生との交流								○	○	◎	◎	
Ⅸ、国内高校生との交流								○			○	
Ⅹ、タイムマネジメント指導	←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→	

（２）実績の説明

Ⅰ　言語技術

ＳＧＨＡのとき、選抜された生徒（ＧＬＰの前身）により実施されてより、その効果が期待され、全校生徒対象の本校のＳＧＨの根幹をなすものとして実施してきた。つくば言語教育研究センターの指導を受け、本校独自のものとして「日本語と英語の往還作業」を行うことで、日本語、英語のプレゼンテーション能力の向上を目指した。全校生徒を対象に行うために以下の項目で実施してきた。本年度もコロナ禍であったがオンラインで縮小して実施した。

①高１、高２に１単位としてカリキュラム化した。

②１単位の授業に、国語科と英語科の教員がＴＴでつき、担任もつけるようにした。

③つくば言語教育研究センターの講習に、小中高の各教員が毎年参加するようにした。

④創価小学校、中学校、高校で「小中高キャンパス言語技術委員会」を開設し、情報を共有した。新カリキュラムからは高校では行わないが、総合的な探究の時間に発展させて行う。

⑤ＣＷＣ（クリティカル・ライティング・センター）を放課後開設した。エッセイや論文指導にあたる教員を、創価大学より専門教員を紹介していただき人的資源も増強した。

５年間を振り返り、生徒のプレゼン能力は格段に向上したのみならず、全教員でこの技術を共有することを努め、学校全体として論理的思考の基礎とすることができたといえる。

Ⅱ　ＧＣＰ（グローバル・シチズンシップ・プロジェクト）

全校生徒対象のプログラムであるが、今年度はコロナ禍で一番打撃を受けた。生徒主導の運営を行うことで主体性も磨くことを目指してきたが、主導する「ＧＣＰリーダーズ」を募集することに苦慮した。今年度は登校できた日に実施できるものを集中して行った。また、ＧＣＰが主体となって展開していた実際の国内のフィールドワークは実施できなかった。(オンラインフィールドワークは別掲)

①２０２０年５月２２日～　オンラインで UNHCR WILL2LIVE（旧難民映画祭）を配信

在宅期間、生徒は全員、各自の端末で難民に関するドキュメンタリー映画を鑑賞することが可能とした。配信したのは「難民キャンプで暮らしてみたら」「アレッポ 最後の男たち」「それでも僕は帰る ～シリア 若者たちが求め続けたふるさと～」など１７のコンテンツで、ＳＤＧｓの１７のゴールが極力均等になるように揃えた。

②２０２０年６月３０日（火）、７月１日（水）第１回ＧＣＰ企画（２，３年、１年ＧＣＩＳ企画）　上記、UNHCR の WILL2LIVE（旧難民映画祭）のドキュメンタリー映画の予告編のうち、「児童労働」「環境問題」「内戦」「異文化多様性」の４つの分野のものを鑑賞。生徒は１つの映画を選び、各自が予告編から予想した結末を持ち寄って班で話し合い、

「私たちが期待する結末」を発表。単なる鑑賞にとどまらず、主体的に考え意識を高く持つよう工夫をして行った。

③２０２０年１０月１４日（水）第２回ＧＣＰ企画（２年生）
フィリピン・レイテ島の地上戦の戦争証言を通して「戦争」の実像を知るという企画で実施。例年行っているものを実施した。

④２０２０年１０月３１日（土）第２回ＧＣＰ企画（３年生）
模擬国連：「国連ランチ」を考える。担当国、グループ作業
国連ランチのメニューを考えるというディスカッションを行った。世界各国の食料事情、経済状況、宗教上の特色などを加味した上で世界の人々が喜んで食べられる「国連ランチ」を考案しようという企画で、この後数回の協議を続けた。

⑤２０２０年１１月２１日（土）第３回ＧＣＰ企画（３年生）
模擬国連：第２回の国連ランチの討議継続　作戦会議・交渉

⑥２０２０年１１月２８日（土）第３回ＧＣＰ企画（２年生）
現代紛争の実態と原因を探る
ルワンダ内戦・大量虐殺(ジェノサイド)について国内政治・植民地支配・民族の違い・マスメディア・人権思想・国際社会等について着目をしながら原因を整理し、二度とジェノサイドを起こさないために必要なことは何かを考えた。

⑦２０２０年１２月３日（木）第４回ＧＣＰ企画（３年生）
模擬国連：第２回の国連ランチの継続　作戦会議・交渉・決議

⑧２０２１年１月２３日（土）第４回ＧＣＰ企画（２年生）
「世界人権宣言」を学ぶ
「人権」とは何かを知り、人権が人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解する。また、『世界人権宣言』を通して、世界の人権問題を考える。

⑨２０２１年１月２３日（土）第５回ＧＣＰ企画（３年生）
オンライン・ファイナルプロジェクト配信開始
体育館で行っていたファイナルプロジェクトを生徒が自宅より映像を配信する形で実施。ポスターセッションを自撮り行ったものであるが、オンラインの特性でオーディエンスの分担もやりやすく、多くの感想が寄せられる「次世代型全生徒ポスターセッション」となった。

⑩２０２１年２月２０日（土）第５回ＧＣＰ企画（２年生）
人権ディベート　身近な人権・創立者の人権闘争を学ぶ
ディベートを通して身近な人権について考え、創立者の人権闘争を学ぶ中で、生活の中で他の人権を尊重するための方途を探る。

Ⅲ、ＧＬＰ（グローバル・リーダーズ・プログラム）

コロナ感染症により選抜型のプログラムも様々な点で大きく変更を余儀なくされた。はじめに選抜方法である。３年学校設定(２年目)は、１２月に順調に実施されたが、２年生選抜の二次試験が緊急事態宣言と重なった。今後、オンラインでの実施が前提となることを踏まえ、１次試験通過者全員を選抜対象とした。その結果、当初の予定人数から大幅に増やし、２８人(３年９人、２年１９人)で６期目のＧＬＰをスタートした。フィールドワークやリアルでの出前授業の開催等を前提としないで、オンラインフォーラムを開催することをゴールに設定

した。

次に開始時期が大きく後ろにずれ込んだ。例年は３月末よりスタートするものを５月よりオンラインで開始した。以降オンラインベースで授業を展開した。ＧＬＰのフィールドワークは最も大きな変化を伴った。当初広島・長崎での実施を予定していたが、これを広島女学院とのオンラインピースフォーラムに変更した。また海外との意識調査を及びプレゼンテーションをウェブリオ株式会社の協力を受けて、カンボジアの高生とオンラインでの交流を行う、オンラインスタディーツアーに内容を変更した。また、これまでフィールドワークで行っていた大学研究機関の担当者の方による講演、被爆体験談などは、移動時間のないオンラインでの、各廃絶の専門家の方にインタビューを行うことができた。このオンラインを活用する試みは、来年度のＧＣＩＳでの探究活動においても活用されている。

評価においてはgoogle slideやgoogle formを活用して､それぞれがポートフォリオを継続し､個人の作成及び進路の確信度の確認を行った。一方「総合評価に客観性を持たせよ」とのご指摘を受け、資質能力を測定するAiGROWを一年生より先行して導入した。

その他、google Jamboardや、Padletの導入など、ＧＬＰの使命であるパイロットケースとしての取り組みを最後まで果たした。コロナのピンチを良き方向に導く手段、方便として新たな取り組みを導入できた。

ＳＧＨ終了により、６年間の取り組みグループとしてのＧＬＰそのものは終了となるが、今後２年生のＧＣＩＳに置いて国際機関・NGOコースの各廃絶問題テーマグループに、その内容は継続されることとなっている。

Ⅳ、ＧＣＩＳ「世界市民探究：GCIS (Global Citizenship Inquiry Studies)」

ＳＧＨの活動のレガシーとして、ＳＤＧｓをはじめとした地球規模課題を私事化するために、「私が世界をかえていく」をメイン・ビジョンに掲げ、３年間を通じてデザインされた探究学習を本年度１年生より年次進行で開始した。１・２年生は週１時間、「総合的な探究の時間」を利用する。

①総合的な探究のねらい

・アイディアや価値を創造し、課題を解決する力
・どんな困難な状況に対しても負けじ魂で乗り越えてく強靭な体力と精神力
・基本的な知識や、問う力、批判的・論理的思考力などの課題発見に必要な力
・適切な情報にアクセスし、取捨選択する力などのリサーチリテラシー
・プレゼンテーションなど、あらゆる形態の発表で相手にわかりやすく伝える発信力
・ポートフォリオ作成等による、自分自身を俯瞰して振り返る力

②各学年別の目標

・１学年…探究学習の手法を理解し、基本的な「課題発見力」「リサーチリテラシー」を身につける
・２学年…獲得した探究学習の手法を活用し、社会(専門家)と触れることでさらに深化させて、その内容に対して「アクション・プラン」を提案し、発表を行う。
・３学年…蓄積してきた知識や技能・思考力を客観的に認知する。大学(学士課程)で必要とされる資質・能力を身につける。最終的に、解決困難な地球規模課題であっても、自らの力で解決に導くとの誓いを仲間と共有する。

③本年度１年生の実績

１、探究プログラム１「あいまいな日本語探究」（前半期取組み：中間発表会で発表）

・探究入門編として設定。

・４～５人のグループで指定された「あいまいな日本語」を定量化し、再定義する。

・クラスの生徒にアンケートを実施し、一次資料として活用する。

・Google スライドにまとめて発表。

・中間発表を他クラス同一テーマのチーム間で行い、情報の交換を行う。

２、探究プログラム２「食品ロス探究」（後半期：最終報告会で発表）

・世界的な問題でありながら自分事として捉えられる課題を設定。

・社会へのアプローチを意識した「アクション・プラン」の作成を目標とする。

・文献調査・リサーチの方法を学び、論理的に考え、根拠を明確にすることを求めた。

・食品ロス探究の最終発表はポスター発表の予定であったが、オンライン授業期間が続き、オンラインでのポスター発表に切り替えて実施。

・フォームを使って相互評価をし、分野ごとの代表発表 G を決定。

・代表発表 G は公益財団法人日本フードバンク連盟理事の田中入馬氏が参加される中で発表を行い、講評もいただいた。このことは自分たちのアクション・プランが社会に繋がったことを意味するものとなった。

Ⅴ、フィールドワーク（オンライン）

①沖縄オンラインフィールドワーク

今年はオンラインで４日間にわけて実施。今回のフィールドワークは、ZOOM のビデオ通話システムを活用し、東京と沖縄をオンラインで結び行った。延べ人数は１００人を超えた。

・企画１〈沖縄戦遺骨収集ボランティア〉

第１日目：１１月７日（土）　沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の具志堅隆松代表を講師にお迎えし実施。「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」とのテーマで、実際の遺骨収集活動の現場の様子や収集された遺骨などの画像を画面で共有しながら、そこから想像し垣間見ることができることを教えていただいた。その後、グループごとに分かれて意見交換を行い、各グループからの報告と具志堅代表への質疑応答が活発に行われた。

・企画２〈グローバルセミナー〉

第２日目：１１月１１日（水）　グッジョブおきなわプロジェクトの喜屋武裕江代表を講師にお迎えし、グローバルセミナーとして開催した。（グローバルセミナーで記載）

・企画３〈ひめゆり平和祈念資料館・那覇国際高等学校〉

第３日目：１１月１４日（土）　ひめゆり平和祈念資料館説明員の仲田晃子氏を講師にお迎えし実施。この企画には交流を続けている沖縄県立那覇国際高等学校（SGH 校）の生徒も参加。「戦争体験を伝えるかたち～ひめゆり平和祈念資料館の試み」と題して、元ひめゆり学徒の皆さんが高齢化する中、資料館のリニューアルに向けて積み重ねてきた取り組みや課題について教えていただいた。その後、グループごとに分かれて意見交換を行い、質疑応答を行った。

・企画４〈創立者池田先生と沖縄〉

第４日目：１１月１５日（日）　沖縄の創価学園顧問、安田 進氏を講師にお迎えし実施。沖縄戦を次世代に継承していく地道な取り組みと課題について教えていただいた。

②広島オンラインフィールドワーク

毎年、SGH の GLP の教育事業の一環として行われてきた広島フィールドワークを、今年はオンラインで実施。今回のフィールドワークは、ZOOM のビデオ通話システムを活用し、東京と広島をオンラインで結び行った。

・企画：広島女学院高校ー創価高校 平和フォーラム
・目的：核廃絶教育を通じて交流を行ってきた両校生徒の交流を深め、地球規模課題解決にむけた問題意識を高める
・交流日程：２０２０年１１月１４日（土） 午後１３時過ぎ（９０−１２０分程度）
・参加生徒：創価高校 ＧＬＰ２８名（高校２、３年生）、広島女学院高校 ３０名
・内容：小グループセッション、創価高校生よりグループごとの研究発表、テーマ別ディスカッション、全体メインセッション、各グループの代表による報告

③クリティカル・イシューズ・フォーラム（CIF)

コロナ感染症のため、カリフォルニアでの実施が中断されている CIF が、本年度はオンラインで実施された。

・２０２０年１０月２４日(日) 専門家による講義に参加
講演者：ラブリー・ウマヤン女史（Bombshelltoe 創設者）
参加者：日・米・露の各参加校、創価高校からＧＬＰ生徒２８名
１月下旬～ ＣＩＦオンライン講座を受講開始。CIF ファイナルプロジェクトの説明
２月６日（土）メンバーの選定、プロジェクト開始 Canvas への登録
２月９日（火）ＭＩＩＳ大学院生によるオリエンテーション
３月８日（月）ＭＩＩＳ大学院生による探究内容のメンターシップ開始
３月２６日（金）（予定）「核廃絶への青年の貢献について」の紹介動画の作成
ファイナルプレゼンテーションのアップロード、
４月１８日（日）（予定）ＣＩＦ参加校によるオンラインミーティング
テーマ「国連改革と安全保障の理念の変容」

④海外オンラインフィールドワーク

カリフォルニア・フィールドワークに代わるものとして、ウェブリオ(株)と共同開発した「オンラインスタディーツアー」を活用した。

・２０２１年1月１５日、２９日、２月５日、１２日（4回）すべて１７時～１８時
・参加者 ＧＬＰ生２８名（2年１９名、３年９名）
・交流国(今回はカンボジア)と平和をテーマに両国の相違点・共通点を見つけ討議する。
・２０２１年度以降のＧＣＩＳのフィールドワークまたは、高３研修旅行の先駆的事例として先駆的に実施。

VI、グローバルセミナー（オンライン）

・目的 国内外で活躍される有識者・学術者・本校卒業生をお迎えし、講演会・懇談会を開催することによって、生徒がグローバル人材へと成長するための触発の機会とする。一貫校である創価中学校にも広く公開する。２０２０年度はコロナ禍のため、オンラインで４回行っ

た。※２０１９年度は１５回（9カ国１５組）実施

①菖蒲川由郷氏（新潟／新潟大学大学院特任教授・厚生労働省のクラスター対策班）

〈開催日・会場〉２０２０年6月３０日（火）

新潟大学と創価高校の各教室をオンラインで結び実施

〈テーマ〉医学を志して走り続けた２０年

〈概要〉全員登校が再開され、本年初のグローバルセミナーを全校生徒対象に開催。コロナ禍の中、菖蒲川教授は厚生労働省のクラスター対策班で活躍されており、公衆衛生学の専門的な話から、新潟と結んでコロナウイルスに関わる話をうかがった。

②エド・フィーゼル氏（アメリカ／アメリカ創価大学学長）

〈開催日・会場〉２０２０年１０月３１日（土）

カリフォルニアのアメリカ創価大学と創価高校の各教室をオンラインで結び実施

〈テーマ〉アメリカ創価大学（ＳＵＡ）における世界市民教育

〈概要〉世界市民について「知恵・勇気・慈悲」の３つの視点を中心に話を進められた。アメリカ創価大学では広い分野の横断的な教育や研究を通して、いかに世界市民を育成しているか、学問だけでなく一流の人格を養成するＳＵＡの取り組みが紹介された。

③喜屋武裕江氏（沖縄／グッジョブおきなわプロジェクト代表）

〈開催日・会場〉２０２０年１１月１１日（水）・沖縄と参加者をオンラインで結び実施

〈テーマ〉２０３０年 輝く未来は自分で創ろう！！

〈概要〉沖縄フィールドワークの１つとして実施。沖縄県のおかれた現状や、今後の社会の変化を考察しつつ、一人ひとりのキャリア形成の上で大切なことは何かについて、沖縄と参加者個人を結んで実施。

④西沢俊広氏（筑波大学／ＮＥＣ ドローンの運行管理システム開発（国家プロジェクト）リーダー）

〈開催日・会場〉２０２０年１１月１７日（火）・筑波と学校をオンラインで結び実施

〈テーマ〉ロボット・ドローンが活躍する安心・安全で効率的な社会の実現を目指して

〈概要〉ロボット・ドローンの研究開発を通し、ドローンが安心・安全に日本のそして世界の空を飛び交えるようにするための国家プロジェクトの責任者として、近未来の話をされた。研究開発だけでなく法制度設計や政策提言などの話もいただいた。

Ⅶ、オンライン英会話

ＳＧＨ当初にＧＬＰがウェブリオ(株)のオンライン英会話を先駆的に実施。現在は英語表現の時間で全校生徒対象のプログラムとして実施されている。ＳＧＨで行ったことのカリキュラム化の一つである。

Ⅹ、タイムマネジメント指導

スコラ手帳(時間管理手帳)を活用し、一人ひとりの生徒が時間の使い方を見つめ価値的な時間の使い方を学ぶ、タイムマネジメント教育に取り組んでいる。ＳＧＨＡより６年継続して

行ってきた。臨時休校が続いた中でも、定期的にオンラインで提出する取り組みも実施。６月にはこの取り組みが注目され、「休校期間も生徒がセルフマネジメント」とのタイトルで朝日Ｅｄｕａ他、インターネット上の多くのニュースサイトで紹介された。

７　５年間の研究開発を終えて

目標の進捗状況、成果、評価と次年度への改善点、ＳＧＨ終了後の継続性について

以下の（１）～（８）の項目として報告を行う。

（１）教育課程の研究開発の状況について
（２）高大接続の状況について
（３）生徒の変化について
（４）生徒の資質向上測定・外部テスト AiGROW 受験結果
（５）アンケートと分析
（６）教師の変容について
（７）学校における他の要素の変化について（授業、保護者）
（８）その他の課題や問題点について

（１）教育課程の研究開発の状況について

①スーパーグローバルハイスクール指定後、「言語科」を設け、「言語技術」の授業を１年生と２年生に１単位ずつ行った。また、これを英語科の教員とティームティーチングとして組むのみならず、担任も参加するカリキュラムとした。「日本語と英語の往還作業」の授業は本校独自のものであり、高校から始まった「言語技術」は中学校でも単位化され、本年度からは「つくば言語技術教育研究所」のテキストは中学校で購入して学ぶことになった。今年は移行期であり、中学と高校で言語技術の授業は行われた。新年度カリキュラムから高校からはなくなる予定である。このように、小中学校に展開できたことは、ＳＧＨとして新たなことを取り組んだ成果であり、実験的に行ったものの有用性が証明されたものである。小学校の国語の授業にも取り入れられ、「小中高一貫」のカリキュラムとなった。当然ながら、これはＳＧＨ終了後も継続する。

②海外フィールドワークをウェブリオ(株)と共同開発をした「オンラインスタディーツアー」を活用した。ウェブリオ(株)とは、ＳＧＨの当初、創価高校と共同開発をした「オンライン英会話」時代より継続して、さまざまコンテンツを開発してきた。今回も、重ねての討議から、本校の探究活動に合う形で実施ができた。カンボジアの高校生との討議は、語学力の壁以上に問題の討議に至るまでのＩＴ環境やスキルの差があった。先駆的に行ったものとして意味のあるものとなったが、全校生徒への展開に関しては、費用対効果を考えて今後の課題となった。

③選抜生徒によるＧＬＰは、学校設定科目としてカリキュラム化した。現在３年生のみが対象となっている学校設定科目を、今後は２年生から「総合的な探究の時間」の選択コースとして実施する。新カリキュラムになっても残ることになった。

④本年度からポストＳＧＨとして「総合的な探究の時間」を「世界市民探究（ＧＣＩＳ：Global Citizenship Inquiry Studies）として１年生より１単位実施。その準備のため、２０１９年度より「探究科」を設置してきた。この探究科も言語科もすべてＳＧＨ委員で構成されており、ＳＧＨ終了後も継続する。残念ながら、準備してきた教育コンテンツはコロナ禍のために半

分しかできなかったが、オンライン授業で出来るものに変更し対応した。また、２年次から展開する探究活動の準備にあたった。さらに、本年度から「小中高キャンパス探究科会」が発足した。これもＳＧＨとして先駆的に取り組んだ事例を小中に落とし込むことになり、探究活動も一貫性をもって行うことを目指す。

（２）高大接続の状況について

①高大接続について、スーパーグローバル大学グローバル化牽引型に採択されている創価大学と、定期的に「高大接続ワーキング」を実施。ＳＧＨの間は、毎回の公開授業・中間発表会・活動報告会に教授に参加をいただき助言をいただいてきた。また、学校設定科目で、大学教授の派遣がオンラインとなり発展した。これは、オンライン授業では生徒の負担軽減のために、一日６コマのオンライン授業にならないように新たに時間割を作成した際に、学校設定科目は軽減して展開したものの、大学教授も大学自体がすべてオンラインで授業をおこなっていることから移行がスムーズであり、また生徒も身近に感じる利点があった。来年度もコロナ禍が収まっても、オンラインで行うものと期待され、より多くの教授の参加が期待されるものとなった。本年は、学校設定科目「平和学入門」でのみ実施となった。

②スーパーグローバルハイスクール指定後、本校卒業生が、大学でどのように活躍しているかを伺ってきた。ＳＧＨ指定後は、言語技術の素養を持っていること、ＳＤＧｓに対する問題意識の高さ、ディベートの素養、海外留学意欲の高さなどが格段に上がったことを報告として受けている。本年度は、本校がどのような探究活動を行っているのか、大学教授の方から積極的な視察があった。

③総合的な探究の授業で、年次進行の２年生で展開する「貧困・飢餓・教育・環境・水問題・経済格差」の問題についての高校生が大学へアプローチする懸案事項は、大学での受け入れ体制が確立した。

④ユネスコスクールのASPUnivNET大学である創価大学、ユネスコスクールの玉川大学・小林教授よりご教示をいただき、ＳＧＨ校の取組みを継続させるために、ユネスコスクール・チャレンジ校となった。本年は、１２月６日のユネスコスクール全国大会に参加、１２月１２日には創価大学教職大学院が主催したユネスコスクール・オンラインフォーラムにて本校の事例を発表した。今後も大学を含め連携をとりながら、一般公開含めた情報の発信を続けていく。

（３）生徒の変化について

①学校全体がＳＤＧｓを常に意識するものとなった。特に、今回は学園祭を「オンライン学園祭」として実施したが、各クラスでＳＤＧｓをテーマに演劇を行い、映像として配信した。オーディエンスの圧倒的な増加や全生徒の参加など多くの利点があったが、ＳＤＧｓを学んできたことによる問題意識の深さがあった。この時に、ＧＬＰが受けてきた映像配信の講義を全校生徒を対象にして放送室から実施した。映像専門家のこの講義は４回行った。ＧＬＰの先駆的な取り組みが生きた事例の一つと捉えている。

②英検受検率のアップと合格者の増加。特にスーパーグローバルハイスクール指定前は、英検準１級は非常に高いレベルという認識であったが、今は手の届く目標として普通に捉えられている。今年度は、コロナ禍であるため受験生が減少したが、合格者は多く、合格率の高いものとなった。

英検の受験者数（合格者数）の推移

	SGHA	SGH 1年目	SGH 2年目	SGH 3年目	SGH 4年目	SGH 5年目
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020

	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
準１級	67 (6)	127 (13)	204 (23)	272 (32)	258 (25)	251 (15)	106 (32)
１級	1 (0)	6 (1)	18(4)	16 (1)	15 (0)	3 (1)	7 (3)

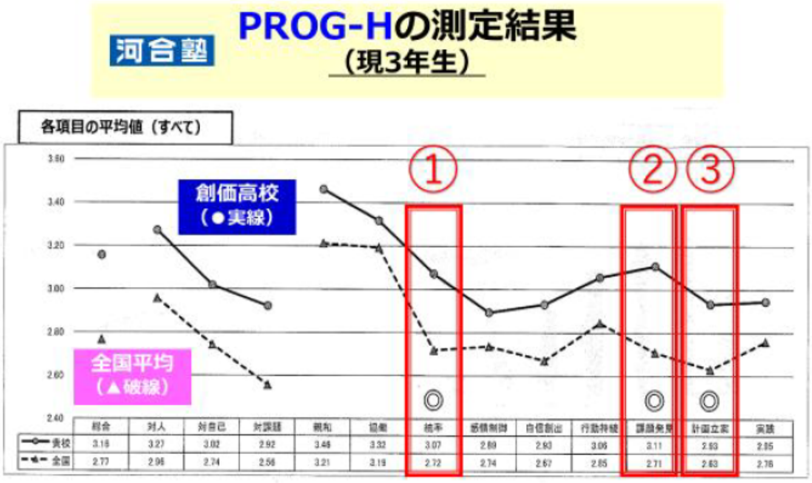
③スーパーグローバルハイスクール指定後の卒業生は、ほぼ９０%以上が留学をしている。これは、主な進学先である創価大学がスーパーグローバルユニバーシティとして留学を勧めていることもあるが、海外大学進学の増加だけでなく、大学時における留学に対する意欲が非常に高まった。

④一般に行われる発表会やフォーラムに積極的に参加することが多くなった。関東大会予選のサステナブルブランド国際会議はコロナ禍であったが、本年度も希望者が多数であった。

（４）生徒の資質向上の測定・外部テスト AiGROW 受験結果（参考・PROG-H グラフ）

課題であった「生徒アンケートによらない生徒の資質・能力の変容の測定」のために、ジェネリックスキルを測るための PROG-H を高校２年生で２回実施して来たが、紙ベースでしか対応出来ないとのことで、コロナ禍のオンライン授業のため実施ができなかった。継続性が無くなったが、今後を見通してオンラインで可能な AiGROW に変えて実施。このテストははＧＬＰの先駆的な取り組みで一度利用し確認済みであり、全生徒に展開したことになる。

結果として、本校は全国平均より１つの項目を除いて圧倒的に上であることが判明した。特に全国平均を大きく上回っているのが、「創造性」「共感」「傾聴力」「寛容」「地球市民」「組織へのコミットメント」などである。なお、全国平均との差などの数値やグラフは AiGROW は公表の許可を得ていないので、同等の評価の出ている昨年度末の PROG-H のグラフを参考に掲載させていただいた。



①統率 ②課題発見 ③計画立案力

このグラフより、特に、①統率、②課題発見、③計画立案　において全国平均より大きく上回っていることがわかる。①統率は、生徒が主体的に運営できるよう生徒リーダー（ＧＣＰリーダーズ）を育ててきたことによると思われる。②課題発見力、③計画立案はＳＧＨコンテンツの狙い通りと思われる。

逆に、AiGROW で全国平均に近かったものは、「自己効力」であった。高い理想を掲げ、地球規模課題に挑戦することによって生じる逆転現象の「無力感」は以前も指摘されてきたが、これから展開していくＧＣＩＳのビジョンとして「私が世界を変えていく」を掲げている。地球規模課題が自分の手ですぐに解決できることではないが、私事と捉え、人生の目的として粘り強く戦っていける生徒を輩出していきたいと思う。これは、ＳＧＨ後の今後の課題として捉えていく。

（５）アンケートと分析

２０２１年３月、ＳＧＨ活動に関するアンケートを全校対象に行った。今までは紙媒体であったものを端末のプラットフォームから入力出来るように変更した。しかし今年度は年度当初から在宅でスタートし、授業確保が最優先であったため年度当初のアンケートを取ることはできなかった。今年度、アンケートを取るにあたり、以下のことが予想された。

①オンライン授業がメインとなり、ＳＧＨに関する授業が主要教科に比べて後回しにならざるを得なかったため、グローバル課題に関する内容については、例年よりアンケート結果は悪くなる。

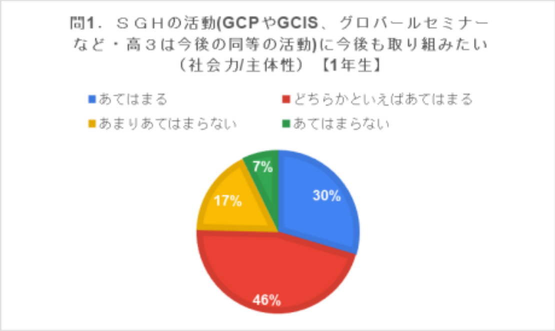
②同じアンケートをＧＣＩＳプログラムを行った１年生と、ＳＧＨプログラムを行った２，３年生に実施した場合、１年生では学習の狙いがＳＧＨのグローバル課題まで行きついていないため、２，３年生の方が高い。

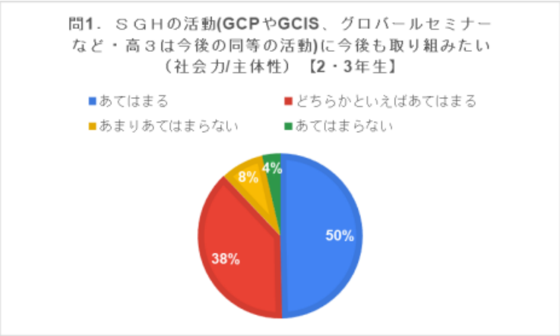
③過去４年間と比べるのは、今年は特殊すぎるため比較対象とならない。

※過去４年間の比較グラフは、昨年記載済み

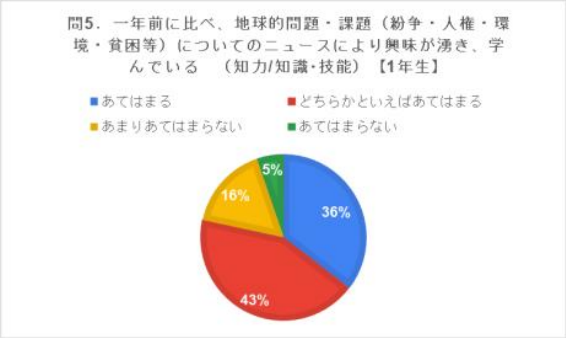
まずは、教育がいかに生徒の意識を変えるかが明確となったいくつかのグラフを提示する。以下に示すものは、端的に上記②の教育効果の重要性示したものと言える。

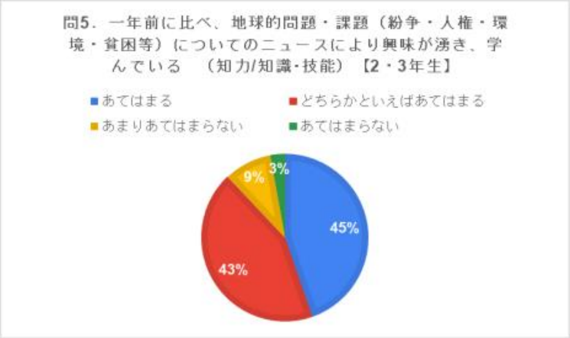
問１　ＳＧＨと同等の活動を今後も取り組みたい　高１(左)→高２，３(右)





問５　地球規模課題に興味を持ち学んでいる　高１(左)→高２，３(右)





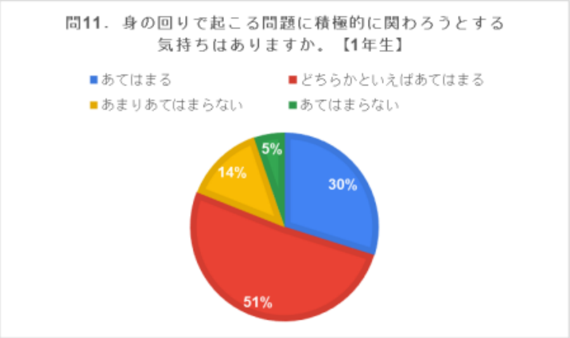
次に、上昇が微少のものを示す。これらは、潜在的にグローバルに働きたいという気持ちがあることを示していると思われる。ＳＧＨアンケートでは、ずっと上げ止まりのものである。

問２　将来、留学したい　高１(左)→高２，３(右)

問３　将来、海外で活躍する仕事につきた　高１(左)→高２，３(右)

次は課題として見えた結果のグラフである。高１で身近な問題（食品ロス）を探究のテーマにしたため、高１で上がっていると思われたものであるが、上級生の方がやはり意識が高い結果となった。ただ、本年度は特に高１は取り組んだ時間が少なく、今後きちんとＧＣＩＳプログラムを行なえば、変化がみられると期待される。

問１１　身の回りで起こる問題に積極的に関わる気持ち　高１(左)→高２，３(右)



（６）教師の変容について

①スーパーグローバルハイスクール以後、ＳＧＨ委員会を希望者で運営しているが、専任教員５１名中、２５名がＳＧＨ委員として希望して運営に当たっている。学校全体として実施しているため、結果として全教員がＳＧＨプログラムを実施し、ＳＤＧｓに関する高い問題意識を持つようになっている。

②スーパーグローバルハイスクール指定前は、校内の一般公開は学園祭のみであった。ＳＧＨ指定後より３年間は、中間報告会と活動報告会の２回を一般公開として追加し、４年目からは、学期２回、年６回の一般公開を追加した。本年度はオンライン公開であったが、これは全教職員に対して「開かれた学校」という感覚の変容と、一般公開される質の高さを求める姿勢の変容が見られた。

③言語技術の授業を小中高一貫で取り組むために、小中高それぞれの学校から、毎年２名前後の教員を、つくば言語技術教育研究所のセミナーに参加させている。本年もオンラインであったが新たに２名の教員がセミナーに参加した。小中学校とも陣容が整ってきている。

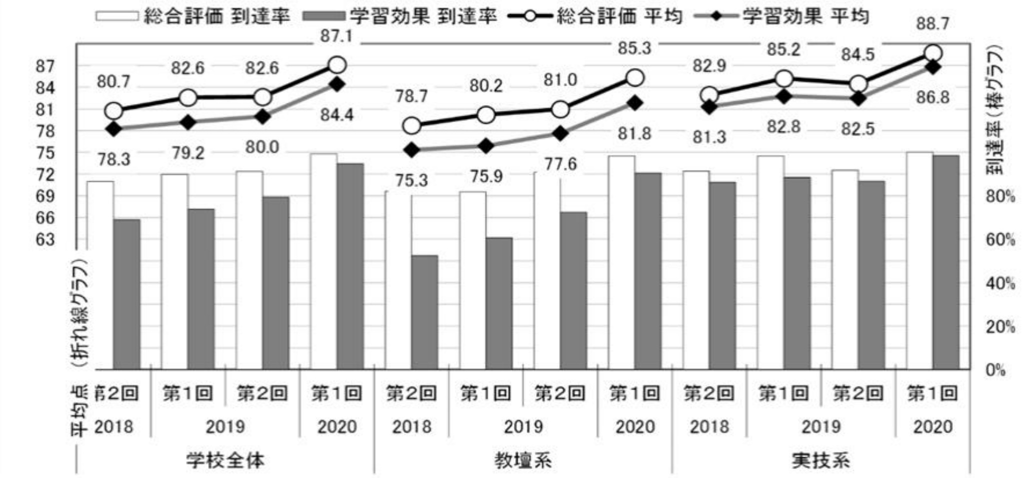
④スーパーグローバルハイスクール指定後、この５年間で「言語技術」は学校のスタンダードとなった。通常の授業の中で、例えばアクティブ・ラーニングの手法などの根幹になった。これはＳＧＨ前後の、非常の大きな変容であった。

⑤英検やＴＯＥＩＣに挑戦する教員が増えた。今年度はコロナ禍のため受検できていない。

⑥非常勤講師の授業の質のアップをどう行っていくか課題であったが、コロナ禍のオンライン授業を行う中で一気に解決した。出来ないでは済まされない状況と、皆で情報を共有し合い、支え合う中で、授業が大幅に見直され、改善された。客観的事実として（７）の項目で代ゼミの授業評価アンケートを記載する。

（７）学校における他の要素の変化について（授業、保護者）

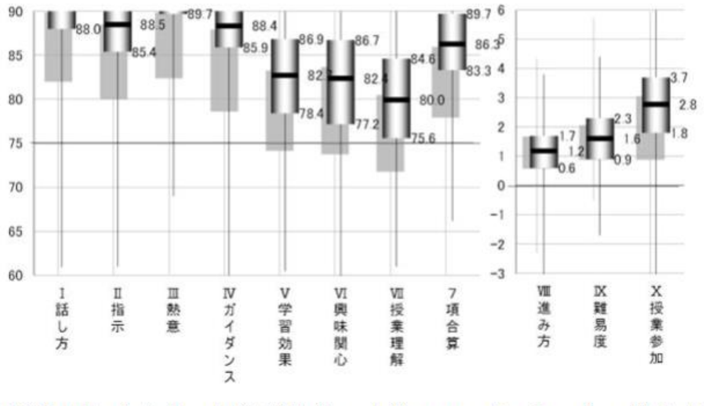
代ゼミの授業評価アンケートの結果は次のようになった。



折れ線黒が総合評価、灰色が学習効果であり共に３年間上昇している。測定された授業任官する七つの全項目で大幅に上昇している。左側の縦軸がポイントを表しており、この評価では、75 以上が代ゼミの目標値となっているが、遥かに高い評価となっている。

また、下側の棒グラフは、その目標である 75 ポイントに達成している授業が学校でどれくらいの割合を占めているかを表している。棒グラフの目盛りは右の縦軸で、学校全体としては、総合評価（白い柱）はほぼ 100%、学習効果を上げている授業（黒い柱）も 95%に達している。代ゼミの分析者からは、「すでに 80 ポイントを超えている学校が、さらに４ポイント上乗せしたのは極めてまれなことです」と言われている。これらはＳＧＨ効果とも言えると分析している。

学校課題別　四分位図（影は昨年12月の値）

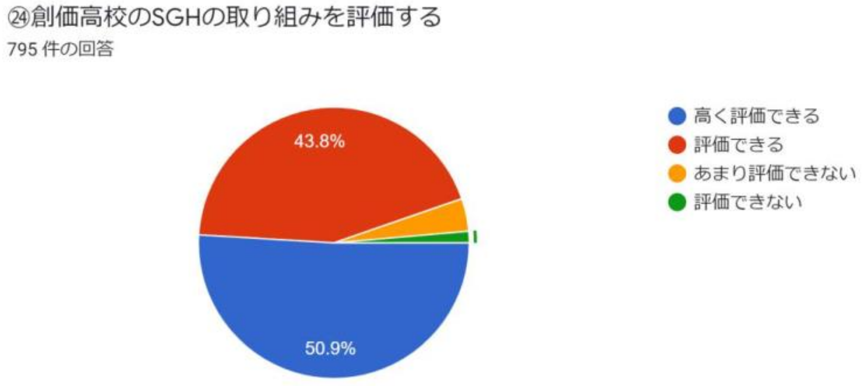


学校課題別四分位図によると、円筒が生徒の人数の 50 パーセントの塊を表しており、円筒の中の黒い太線が中央値となっている。影は一昨年の１２月の値で、全項目で大きく上昇してことがわかる。これはこの数年間ずっと上昇してきており、高いものは表から飛び出している。ガイダンスの上昇は「授業の目標や勉強のやり方について、先生は説明をしてくれる」という質問であり、この上昇からポイントを押さえた取り組みができていることが読み取れる。また、分析からはオンライン学習についても肯定的に評価されており、ＳＧＨを行いな

がらＩＴをいかに利用するか、またその技術をいかに全教員の普遍的な力とできたかが示されたものと捉えている。

さらに、生徒の授業参加の項目は一般的にはなかなか上がらないものと説明を受けているが、大きく上昇した。これは、先生方が「アクティブ・ラーニングを中心にすえた授業を展開していることが推察される」と分析されていたが、ＳＧＨで始めた「言語技術」の授業が教員間に一般化し、対話による授業、一方通行ではない授業、いわゆる本当のアクティブ・ラーニングを教員行っていると分析している。

次に、保護者アンケートの結果である。今年は思うような取り組みが出来なかったが、オンラインでも出来るものとして実施した。



２０１８年度の保護者アンケート回収率は６３９件で６１％、２０１９年度は９４４件で９１％、本年度は７９５件で７１％であるが、この減少はオンラインによって様々な連絡やアンケートが頻繁になったため、保護者に煩雑感を与えたこともあると分析している。

上記の保護者のアンケートのうち、「ＳＧＨの取組みを評価する」は、よくあてはまる、あてはまるが、一昨年度９３％、昨年度は９２％、本年度は９５％と、ほぼ上げ止まりの中アップして高い評価を得た。

（８）その他の課題や問題点について

①ＳＧＨが終了するにあたり、ユネスコスクール委員会を設立した。本格的にはユネスコスクールに認定されてから活動を開始するが、これはＳＧＨの活動を継承し、特に対外的な部分を担当する分掌となっている。その後、文科省のＳＧＨネットワークにも加盟申請をすることとなったが、校内での役割や対外的な教員の受け皿の設置、ＧＣＩＳとの関連性が翌年度からの課題である。

②来年度からのフィールドワークの実施が課題となっている。事前学習を行って現地に入るから観光ではなく実施できてきていた。この実施団体はＳＧＨのうちＧＣＰ教員であった。来年度よりＧＣＰは高３を除いて実施しない。高３のみ旧カリキュラムのＳＧＨを実行する負担感も含め、紐づけされていたフィールドワークの実施が難しくなっている。特にコロナ禍において先々が見えない中で、下見などに労力を割くことが困難である。また、オンラインで行ったとはいえ、フィールドワークはあくまで「現地性」がそのいのちであっ

たはずである。その中で工夫したことは評価できるが、技術的な継続性は可能であるが、興味を生徒に持たせ続けることが今後もできるのかどうかは疑問である。

③ＧＣＩＳの方向性はＳＧＨの反省点からきている。ＳＧＨで課題として出てきた表面的な達成感や深まりの少ない考察、それによる薄いプレゼンテーションを克服する目標がある。しかし、良かった点も失う可能性があり、カリキュラムマネジメントと共に課題である。

④評価の上げ止まりは、逆に課題である。より高みを目指すために、対外的なチャレンジも必要と思われる。

⑤「言語技術」と「世界市民探究」を小中高の創価学園の一貫性のある取り組みとして実施しているが、学校は一貫校ではない。いかに有用性のあるものとして継続できるか、今後の課題である。

【担当者】

担当課	経理募金課	ＴＥＬ	042-342-2611（代）
氏　名	山下　英一	ＦＡＸ	042-342-2617
職　名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp

2.　グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）

A）概要

■ 概要

グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）は、全校生徒対象のSGH企画です。国連が提示する地球規模課題や「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の 17 のゴール（SDGs）からテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れることで、現代社会に対する幅広い教養と協調的問題解決能力の育成を目指します。

企画は学期に2回ずつ実施する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で当初案と変更になっています。また 1 年生は本年より「世界市民探究＝GCIS」が始まった関係でこれまでの学期2回の実施から、不定期開催となっています。

1年生は「SDGs」を学ぶ企画。2年生は、「戦争」や「現代の紛争」をテーマに、第二次世界大戦や、ルワンダ内戦の歴史的背景などについて学びました。3年生は、「国連ランチ」のテーマで模擬国連を実施し、全員が一国の大使となって交渉を重ねることで、国際協調の重要さと難しさを学びました。また3年生は、GCP 企画の総括として課題研究「ファイナルプロジェクト（Final Project）」に取り組みました。これは各自が SDGsからテーマを設定して課題研究を行い、その成果をポスターセッションの形で日本語・英語の2言語で発表するもので、最後には 2000 字以上の論文にまとめました。また、Final Project の準備として、「現代社会」と「英語表現」と「現代文」の授業において、プレゼンテーションスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも実施しました。

■ GCP リーダー

GCP 企画の運営は、教員ではなく希望生徒で構成された GCP リーダーが担っています。本年度は 2・3 年生のみ、多くの希望者が各クラスからリーダーとして選出されました。GCP リーダーは、各企画の前にリーダーズミーティングを行い、テーマについての学習や当日の企画のリハーサルをします。当日は試行錯誤しながらクラスでの企画を運営し、その中で、企画力やリーダーシップなどの育成を図っています。

■ 昨年度との相違点

①1年生は本年より「世界市民探究＝GCIS」が始まった関係でこれまでの学期2回の実施から、不定期開催に変更しました。

②ユナイテッドピープル提供のドキュメンタリー視聴サービス「cinemo.edu」を導入。生徒の端末からいつでもどこでも良質なドキュメンタリー映画 17 作品を視聴できるようにしました。

③新型コロナウイルスの影響で、2・3年生で予定していた内容を一部変更。3年生の模擬国連は開催回数の関係でテーマを「国連ランチ」に変更しました。

■ 年間スケジュール（年度当初案）

		1年生	2年生	3年生
テーマ		貧困	戦争	模擬国連(1)
1学期	5月18日	**グループ学習(ジグソー法)** 国連が定めた「2030アジェンダ」について、ジグソー法を用いて理解を深め、地球規模課題への関心を高める。	**VTR学習** 第二次世界大戦時のフィリピン・レイテ島決戦をめぐる日本兵・アメリカ兵・フィリピン人の戦争証言を通して戦争の実態を学ぶ。	**模擬国連レクチャー・準備** 模擬国連のやり方を学び、議題について学習したり、国別にスタンスペーパーやスピーチなどの準備を行う。
	6月15日	**貿易ゲーム** 「先進国」「新興国」「発展途上国」の3つの立場から世界の貿易や格差を疑似体験し、協調して課題解決に取り組む。	**グループ学習(ジグソー法)** 原爆投下による被害の事実を知り、アメリカと日本の核兵器へのスタンスを整理しながら、核兵器廃絶への可能性を探る。	**模擬国連** 6人1組のチームをつくり、「気候変動枠組み条約(COP)」を議題に15ヵ国の担当に分かれて模擬国連をクラスごとに開催する。
テーマ		環境	異文化理解・現代の紛争	模擬国連(2)
2学期	10月16日	**いのちの食べ方を問う** 食肉の加工過程を振り返りながら、身近な食品ロスの現状からバーチャルウォーター、フードマイレージなどの環境問題を考える。	**留学生交流** 創価大学に学ぶ留学生約50名に来校していただき、交流を行う中で、異文化に触れ、理解を深める。	**模擬国連** 仮想の国を設定し、「核軍縮」をテーマに模擬国連をクラスごとに開催する。
	11月30日	**ロールプレイ** 「世界がもし100人の村だったら」をテーマにロールプレイを行い、国際社会が抱える格差について体験的に学ぶ。	**グループ学習(ﾌｨｯｼｭﾎﾞｰﾝ)** 第二次世界大戦後の世界の紛争についての実態（ルワンダ内戦における“大量虐殺”）を知り、なぜ過ちは繰り返されてしまうのかを考える。	
テーマ		格差・国際ﾊﾟｰﾄﾅｰｼｯﾌﾟ	人権	Final Project
3学期	1月18日	**模擬教育援助会議** 途上国側と援助国側に分かれて、模擬教育援助会議をクラスごとに実施。途上国の教育の現状と教育援助のありかたを考える。	**グループ学習(人権すごろく)** 「人権すごろく」「世界人権宣言」を通して、長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきた人権への理解を深める。	**Final Project　ポスターセッション** アジェンダ2030・SDGsの中からテーマを選び、「現代社会」と「英語表現」と「現代文」の協同で日本語・英語によるポスターセッションと論文作成に取り組む。
	2月22日	**SDGs Card Game** 本校が開発したSDGsを体験的に学ぶためのカードゲームを実施。先進国・新興国・途上国の9ヵ国にわかれ、自国の課題や地球規模課題を連携・協力して解決していくゲームを通して、SDGsについて学ぶ。	**ディベート** ディベートを通して身近な人権について考える。また創立者の人権闘争を学び、生活の中で他者の人権を尊重するための方途を探る。	**UNHCR WILL2LIVE映画祭** **学校パートナーズ上映会「シリアに生まれて」** 国連UNHCR協会が主催する「WILL2LIVE映画祭」の学校パートナーズとして上映会を開催。「シリアに生まれて」を鑑賞する。

■ ※1 年は不定期開催

B）　ドキュメンタリー映画視聴サービス「cinemo.edu」

■ 概　要

本年度よりユナイテッドピープルが提供する「cinemo.edu」のサービスを開始しました。

SDGs、社会課題をテーマにしたドキュメンタリー映画 17 作品を生徒一人ひとりの PC やスマートフォンで自宅・外出先など、好きな時に好きな場所で何度でも視聴することができます。

この 1 年間で多くの生徒が視聴し、655 件の視聴レポートが寄せられました。

＜ラインナップ(17 作品)＞

難民キャンプで暮らしてみたら

1日1ドルで生活

ナディアの誓い – On Her Shoulders

アレッポ 最後の男たち

最後の楽園コスタリカ ～オサ半島の守り…

シード～生命の種～

気候戦士～クライメート・ウォーリアーズ～

コスタリカの奇跡 ～積極的平和国家のつ…

ポバティー・インク ～あなたの寄付の不…

それでも僕は帰る ～シリア 若者たちが…

ジェンダー・マリアージュ ～全米を揺る…

ザ・トゥルー・コスト ～ファストファッ…

バベルの学校

ELEMENTAL 生命の源 ～自然とともに～

happy －しあわせを探すあなたへ

幸せの経済学

バレンタイン一揆

◆ 生徒感想

『1 日 1 ドルの生活』

ペニャ･ブランカのように、典型的な“地方の貧しい村”では、小さな変化が大きな結果をもたらすことがわかった。しかし、なぜ過去の国際開発は貧困を悪化させる結果に終わってしまったのか。ペニャ･ブランカではほとんどの人が日雇いの非正規雇用であるため、正規雇用ができるような工場を1つ作るだけでも、人々の収入は安定すると思った。普通の薬ですら買えない極貧状態であり、第一次産業がメインの地域では、波のある収入をどう使うのかが鍵を握ると思ったから、収入が安定したら、生活も安定すると考えたからだ。融資を受けることで生まれた余裕も、いつかは皺寄せがくると私は思う。だから正規雇用の人間しかお金が借りられないのは銀行としては当たり前だと思う。確かに融資は生活を支えるかもしれないが、永遠ではない。それ故に、正規雇用を増やすことが問題の改善に繋がると考える。また学校も、40%の生徒が貧困の為に卒業できないということで、それがまた人々の貧困を悪化させると思った。チノは、「職につけるからスペイン語ができるようになりたい」と言っていた。それは学校に行かねばできないことだし、学校に行くにはお金が必要だ。義務教育制度は、なぜ貧困の地域にはないのだろうか。少なくとも初等教育機関は全員が卒業すべきだと思うので、その期間は学費を無料にした方がいいと思う。学費が浮くことで、家庭的な負担も減るし、子供も仕事に就く条件を一つ満たすことができる。私はこの動画を視聴して、自分が貧困地域に対して今何ができるか考えたが、思い付いたのは寄付くらいだ。その寄付がどれだけの結果をもたらすかはわからないし、そもそも結果をもたらせるのかもわからないが、そういった“今できること”を実行することで、貧困はなくなるのだろうと思う。

『気候戦士～クライメート･ウォーリアーズ～』

元々気候変動に対して興味があり、危機感も持っていましたが、視聴したことによってより身近に感じることが出来ました。また、気候変動に対して危機感を持ち、行動に移していく活動家の方々の勇気や行動力にとても心を動かされました。改めて一人一人の小さな取り組みが大きな変化に繋がることを学び、自分に出来ることは何かと考えることも出来ました。今回見たこの映画はとくに石炭や天然ガスについてでしたが、他の問題にフォーカスした物も見てみたいなと思いました。

『バレンタイン一揆』

普段、私達は当たり前のように学校に通っている。けれど、世界中には学校に通えない状況にある子供達がたくさんいる。その事を絶対に忘れてはならない。学校に通えること、勉強できること、こういったことができることに感謝しなければならない。そして、世界中のたくさんの子供達が学校に通えるよう、私達が行動しなければならない。私は、そう思いました。自分が思ったこと、感じたこと、考えたこと、他の人に届けたいと思っても、なかなか人の心に届かない。それは、受けとる側が琴子さん達が体験した様々なことがいかに大事かということが分かっていないからだと思います。私は、その事を知ることができて、良かったです。こういう機会を他の学校でも行っていってほしいなと思います。私は、学校に行けることに感謝するだけでなく、世界の子供達が笑顔になる社会を目指したいです。

『それでも僕は帰る～シリア　若者たちが求め続けたふるさと～』

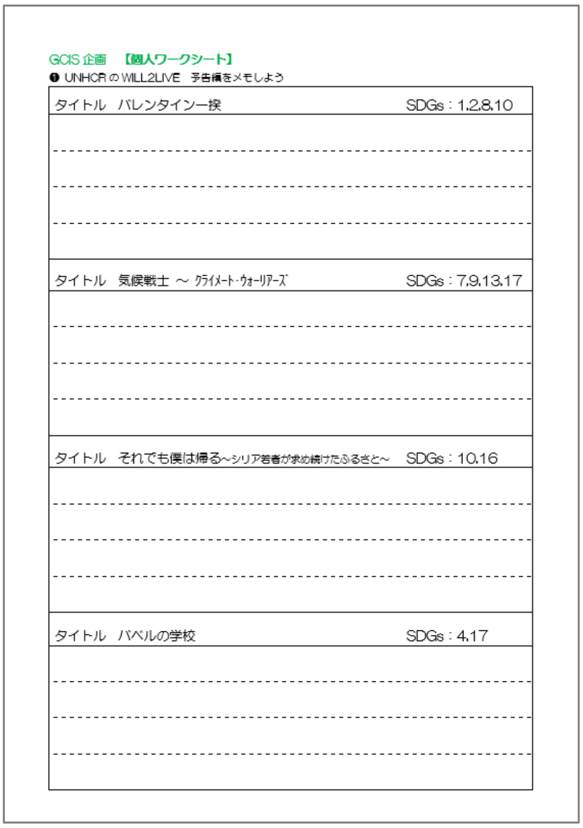
政府が普通に市民をためらいなく射殺している、やめる気配がないことに恐怖を感じました。また、映画としてですが、シリアについて知ることができてました。こうした紛争問題は、今でも世界のどこかで続いているので、また学びたいと思いました。今後の GCIS の活動に活かしていきたいと思います。

C）　ドキュメンタリー映画を見よう（全学年）

■ 概要

5 月より始まったユナイテッドピープル提供のドキュメンタリー映画視聴サービス「cinemo.edu」の視聴を促すための企画が 6 月 30 日に全学年対象に実施されました。

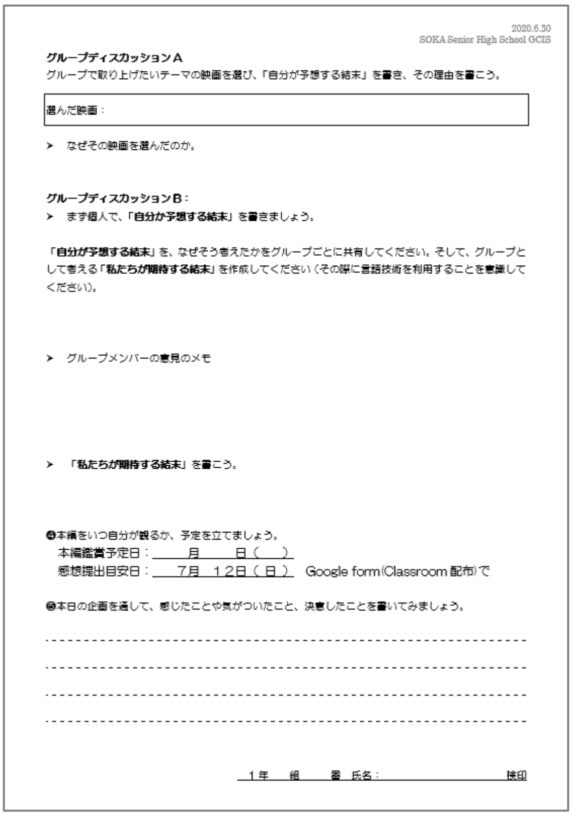
まず、ドキュメンタリー映画の予告編のうち、「児童労働」「環境問題」「内戦」「異文化多様性」の4つの分野のものを視聴しました。そして、生徒は1つの映画を選び、各自が予告編から予想した結末を持ち寄って班で話し合い、「私たちが期待する結末」を発表しました。この後、各自が選んだ映画をそれぞれがオンラインで鑑賞し、SDGs のどの項目に該当するかも意識して感想をまとめます。単なる鑑賞にとどまらず、主体的に考え意識を高く持って臨むよい機会となりました。



GCIS 企画　【個人ワークシート】

❶ UNHCR の WILL2LIVE　予告編をメモしよう

タイトル　バレンタイン一揆	SDGs：1.2.8.10
タイトル　気候戦士 ～ クライメート・ウォーリアーズ	SDGs：7.9.13.17
タイトル　それでも僕は帰る～シリア若者が求め続けたふるさと～	SDGs：10.16
タイトル　バベルの学校	SDGs：4.17



2020.6.30
SOKA Senior High School GCIS

グループディスカッションA

グループで取り上げたいテーマの映画を選び、「自分が予想する結末」を書き、その理由を書こう。

選んだ映画：

➤ なぜその映画を選んだのか。

グループディスカッションB：

➤ まず個人で、**「自分か予想する結末」**を書きましょう。

「自分が予想する結末」を、なぜそう考えたかをグループごとに共有してください。そして、グループとして考える**「私たちが期待する結末」**を作成してください（その際に言語技術を利用することを意識してください)。

➤ グループメンバーの意見のメモ

➤ **「私たちが期待する結末」**を書こう。

❹本編をいつ自分が観るか、予定を立てましょう。
本編鑑賞予定日：＿＿月＿＿日（　）
感想提出目安日：＿7月　12日（日）　Google form(Classroom 配布)で

❺本日の企画を通して、感じたことや気がついたこと、決意したことを書いてみましょう。

1年　組　番　氏名：　　　　　検印

ＧＣＩＳ企画(1年)

教　　科	GCIS	担当教員	各担任
実施年月日	2020年6月3０日(火)11:35～12:05	生徒在籍数	各クラス在籍数
単　元　名	SDGs　本時の題目	ドキュメンタリー映画を学ぶ	
本時の目標	WILL2LIVE のドキュメンタリー映画予告編を SDGs の観点で鑑賞し意見をまとめる。		

項　　目	項　　目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
事前準備	——	PC を立ち上げる 三密にならないよう、前もって座席の動かし方を表示する		セミナーの感想は google form で配布を指示
導　　入	①WILL2LIVE の説明 ※配布物あり ②今回の企画の説明	ＰＰＴを映す 今回の企画について簡単に説明をする	1	資料は Public に
展　　開	③予告編を4 つ視聴	順番は必ず、 １，バレンタイン一揆 ２，気候戦士 ３，それでも僕は帰る ４，バベルの学校	12	映像を見ながらメモをするように声をかける
	④グループディスカッションＡグループで映画をひとつ選ぶ	机を並び替えて、４人班（５人班）を作り、最も取り上げたい映画を決める。	8	
	決め方のグランドルール 1,言語技術を使って、全員がそれぞれを選んだ理由まで含めて主張をする 2,多様な意見に触れるために、全員が発言できるように、話す時間を意識する 3,相手の意見を否定せず、あいづちなどを多用する 4,グループの意見を決定するときは、なるべく多数決やジャンケンなどをせず、合意に基づいて決める			グループの様子をみながら弾力的に時間配分する。 密にならないよう、大声にならないよう注意。グループがうまく分かれるよう、臨機応変に対応
	B「予想される結末」を書く。 ※配布物あり	個人作業　「私が予想する結末」を 「私が予想する結末」をそれぞれが発表し、班で「私たちが予想する結末」を作成する。	3	
	⑦グループワーク （期待する結末掲示）	グループシートに記載する	4	回収後、クラス内で掲示
まとめ	⑧個人作業	映画を鑑賞する日時を予定表にいれる。 「個人 WS」に記入する	2	パスワードを忘れた、わからないという生徒は、5/25 の gmail (cinemo で検索)。またはフォルダー内のリストから個別に伝える
	⑨ワークシートの回収	今回の GCP 企画を通して感じたことや学んだことを「個人 WS」に記入し、担任の先生に提出する。 グループWS の掲示はクラスごとに判断	1	課題 form 配信

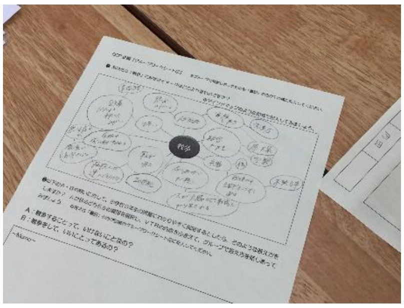
D）　レイテ決戦から戦争とは何かを知る（2年生）

■　概要

10月14日に行われた第2回目は、フィリピン・レイテ島の決戦の戦争証言の映像を通して、戦争とは何かについて学び合いました。映像では、レイテ決戦を戦った兵士たちの証言映像を特別に編集し、その際に、日本兵、アメリカ兵、そして、現地のフィリピン人など、戦争に関与した全ての当事者の証言を順番に視聴することで、偏った見方をせず、戦争について客観的に考えることを目的としました。

レイテ島は第二次世界大戦中、日本軍とアメリカ軍が最も激しい地上戦を繰り広げた舞台の一つです。その地上戦の経験者の証言は、授業で学んだ机上のものとは異なり、生々しいものでした。そして、戦争の勝敗に関係なく、戦争に関わった全ての人が悲惨な思いをし、深く傷ついていることを知ることができました。生徒は大きな衝撃を受けると共に、二度と戦争を起こさない、起こさせないという不戦の誓いを新たにしました。

最後に、小学校3年生の児童から「戦争することって、いけないことなの？」「戦争をして、いいことってあるの？」と質問をされたと仮定し、わかりやすく説明するにはどうしたら良いか、グループで案を考えました。「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もいない」ということを一人一人が理解することができました。



■ ワークシート例

レイテ島の戦い　とは…

・フィリピンのレイテ島とは、日本軍が「太平洋の天王山」と呼び、米軍のマッカーサー元帥が「アイ・シャル・リターン（私は戻ってくる）」の約束を果たす地と決めた太平洋戦争の決戦場。
・太平洋戦争中の１９４２年、日本軍はフィリピンを占領。当時、米軍大将だったマッカーサーは「戻ってくる」と言い残してフィリピンを脱出。１９４４年１０月２０日、マッカーサー率いる米軍約２０万人がフィリピン奪還のためにレイテ島に上陸。
約２カ月に渡る日本軍とアメリカ軍の地上戦で、日本側はほぼ全滅した。
・同島の太平洋戦争中の死者（推計）は日本軍約８万人、米軍約３５００人。
・日米両軍の間で翻弄され、レイテ島の島民約５万４千人も犠牲になった。
・また、米軍に協力したフィリピン人のゲリラ部隊と日本軍との戦闘も激化した。

〈レイテ島に上陸するアメリカ軍〉

〈米軍の猛烈な艦砲射撃で炎上する日本軍陣地〉

レイテ島

＜フィリピンと日本の戦後＞
太平洋戦争末期、日本軍が抗日ゲリラとの関係を疑って無実の人を虐殺する事件が相次ぎ、遺族らの反日感情はいまも強い。元従軍慰安婦が日本政府に補償を求めている問題や、米軍や住民の追及を恐れて日本人であることを証明する書類を捨てたために日本国籍が認められない残留日本人の問題も残る。

〈日米両軍による激しい戦闘で壁に無数の砲弾の穴が今も残る建物〉→

（出展：朝日新聞 2010年9月18日朝刊）

GCP 企画(2 年)

教　　　科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2020 年 10 月 14 日(水) 6 限目		生徒在籍数	各クラス在籍数
単　元　名	戦　争	本時の題目	戦争証言を通して「戦争」とは何かを知る	
本時の目標	戦争証言を通して、「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もいない」ということを一人ひとりが理解し、二度と戦争を起こさない・起こさせないという不戦の誓いを新たにする			
項　　　目	項　目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
導　　　入	①今回の企画についての説明 ※配布物あり	今回の企画について簡単に説明をする 「個人 WS①」	2	朝の SHR
展　開　①	②個人作業 ※配布物あり ④グループディスカッション A	「個人 WS①」❶・❷・❸に取り組む。 ⇒全体で❷・❸の答え合わせをする 「グループWS ①」 グループで机を合わせ、 「個人 WS①」❶に記入したことを共有し、 「グループ WS①」マインドマップに取り組む	4 3	 朝の SHR 時間がないので、いつもの 4 人 G で行う。 時間がきたら後は各自休み時間に完成させる
展　開　②	※配布物あり ⑥レイテ島の戦いの説明 ⑦VTR 上映 A 0:00~ （1.銃撃戦と消耗戦） →グループディスカッション B ⑧VTR 上映 B 10:38~ （2.斬り込み隊） →グループディスカッション C ⑨VTR 上映 C 18:49~ （3.フィリピン現地民との戦い 4.戦争とは？） ※配布物あり ⑩グループディスカッション D	「個人 WS②」 これから上映する映像について説明する。 NHK 戦争証言アーカイブよりフィリピン・レイテ島での決戦を語った戦争証言をまとめた VTR を鑑賞する。 ⇒印象に残った人（発言内容）をグループで共有する 映像の続きを鑑賞する ⇒印象に残った人（発言内容）をグループで共有する 映像の続きを鑑賞する VTR 終了後、「個人 WS①」❺を記入 「グループWS ②」 感想をグループで共有し、「個人 WS①」❺、「グループ WS①」❷の内容をディスカッション。「グループ WS②」に清書する	4 11 3 8 3 14 3 7	レイテ島決戦ついて説明 VTR 鑑賞後にどのようなディスカッションをするのかを事前に確認 「個人 WS②」に適宜メモをとるように指示する。 グループの様子をみながら弾力的に時間配分する。
	⑪クラス発表	各グループでまとめたものをクラスに発表	7	15:45 までには必ずスタートする。
ま　と　め	⑫個人作業 ⑬ワークシートの回収	今回の GCP 企画を通して感じたことや学んだことを「個人 WS①」❻に記入する GCP リーダーズがワークシートを回収し、担任の先生に提出する		※時間がないので、これ以降は各自で行う。 Form を配信するので、感想を今日中に送るよう指示する
課　　　題	・GCP リーダーは説明会の時に先に VTR を鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・時間がないので、速やかな進行を心掛け、リーダーズで協力して行う。			

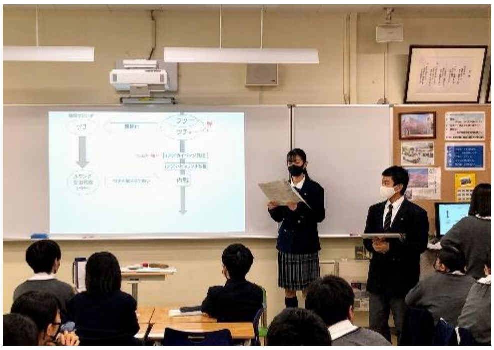
E）　ルワンダ内戦から現代紛争を考える（2年生）

■ 概要

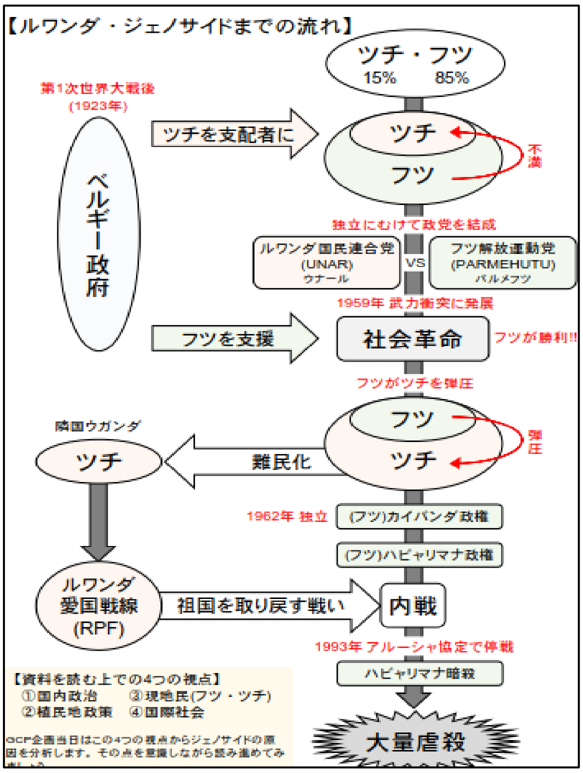
11 月 28 日に行われた第 3 回目は「現代の紛争」をテーマに、1994 年にアフリカのルワンダで起きたジェノサイド―大量虐殺について学びました。

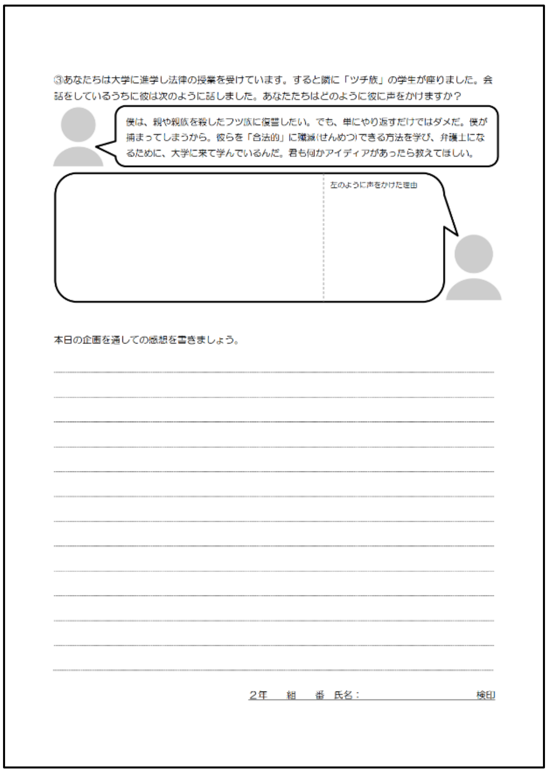
11 月 21 日のホームルームで、GCP リーダーより、現代の紛争からルワンダの大量虐殺(ジェノサイド)から学ぶ～という事前学習冊子を配布。資料の内容は、「なぜ世界で紛争が無くならないのか」増田弘著、「隣人が殺人者に変わる時　ルワンダ・ジェノサイド生存者達の証言」「隣人が殺人者に変わると時　加害者編」ジャン・ハッツフェルド著、「NHK未来への提言　戦渦無き時代を築く」ロメオ・ダレール著　より特に学んで欲しい部分を抜粋し作成したものです。

当日は、海外ドキュメント『ルワンダ（1）』」の視聴を行い、その後4名で構成する分れて、ツチ族・フツ族・国連軍兵士・TV 記者に分かれたロールプレイを行ないました。これは、ルワンダ内戦の様子を体験的に学ぶためです。休憩後、海外ドキュメント『ルワンダ（2）』を視聴した後、ルワンダ内戦がおきた原因について学びました。学んだ内容は、①国内政治②植民地支配③現地民(フツ族・ツチ族)④国際社会の4点からみた内戦の原因を「フィッシュボーン」と呼ばれるチャートにまとめていきました。次に、国連平和維持活動司令官・ダレール氏の発言の一部を抜粋し、どのような意図かをグループごとに検討させ、最後に「フツ族」に復讐をしたいという「ツチ族」の友人に対して、自分たちならどのように声をかけるかを話し合い、発表し合いました。



● 内戦の起こるしくみ（まとめの図）　　　当日課題（ワークシート）





③あなたちは大学に進学し法律の授業を受けています。すると隣に「ツチ族」の学生が座りました。会話をしているうちに彼は次のように話しました。あなたたちはどのように彼に声をかけますか？

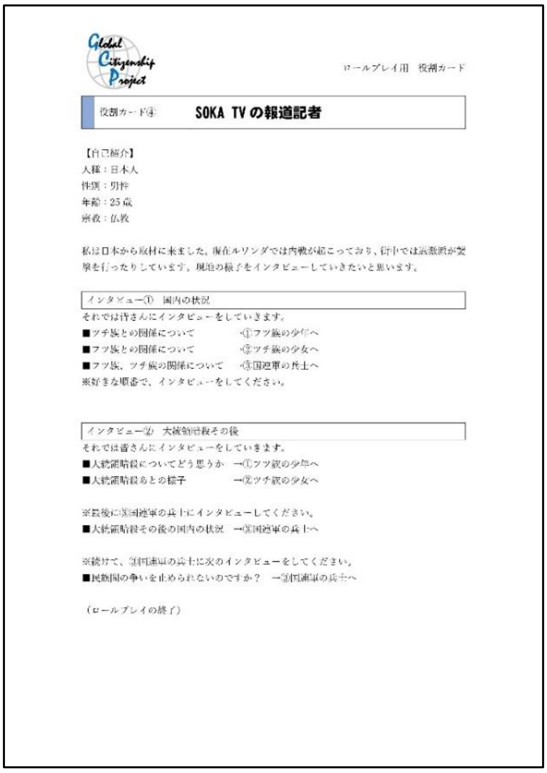
僕は、親や親族を殺したフツ族に復讐したい。でも、単にやり返すだけではダメだ。僕が捕まってしまうから。彼らを「合法的」に殲滅(せんめつ)できる方法を学び、弁護士になるために、大学に来て学んでいるんだ。君も何かアイディアがあったら教えてほしい。

左のように声をかけた理由

本日の企画を通しての感想を書きましょう。

2年　組　番　氏名：　検印

ロールプレイング用　立場を記述したカード（例）



ロールプレイ用　役割カード

役割カード④　**SOKA TV の報道記者**

【自己紹介】
人種：日本人
性別：男性
年齢：25 歳
宗教：仏教

私は日本から取材に来ました。現在ルワンダでは内戦が起こっており、街中では過激派が襲撃を行ったりしています。現地の様子をインタビューしていきたいと思います。

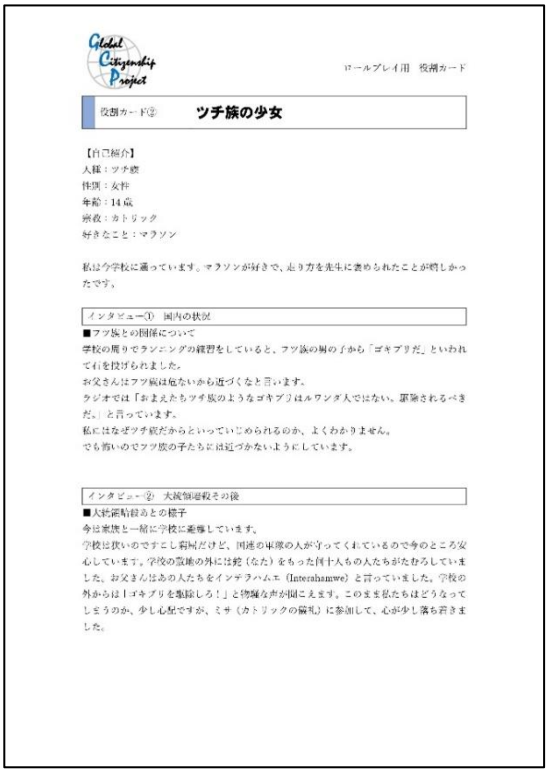
インタビュー①　国内の状況
それでは皆さんにインタビューをしていきます。
■ツチ族との関係について　→①フツ族の少年へ
■フツ族との関係について　→②ツチ族の少女へ
■フツ族、ツチ族の関係について　→③国連軍の兵士へ
※好きな順番で、インタビューをしてください。

インタビュー②　大統領暗殺その後
それでは皆さんにインタビューをしていきます。
■大統領暗殺についてどう思うか　→①フツ族の少年へ
■大統領暗殺あとの様子　→②ツチ族の少女へ

※最後に③国連軍の兵士にインタビューしてください。
■大統領暗殺その後の国内の状況　→③国連軍の兵士へ

※続けて、③国連軍の兵士に次のインタビューをしてください。
■民族間の争いを止められないのですか？　→③国連軍の兵士へ

（ロールプレイの終了）



ロールプレイ用　役割カード

役割カード②　**ツチ族の少女**

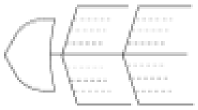
【自己紹介】
人種：ツチ族
性別：女性
年齢：14 歳
宗教：カトリック
好きなこと：マラソン

私は今学校に通っています。マラソンが好きで、走り方を先生に褒められたことが嬉しかったです。

インタビュー①　国内の状況
■フツ族との関係について
学校の周りでランニングの練習をしていると、フツ族の男の子から「ゴキブリだ」といわれて石を投げられました。
お父さんはフツ族は危ないから近づくなと言います。
ラジオでは「おまえたちツチ族のようなゴキブリはルワンダ人ではない。駆除されるべきだ。」と言っています。
私にはなぜツチ族だからといっていじめられるのか、よくわかりません。
でも怖いのでフツ族の子たちには近づかないようにしています。

インタビュー②　大統領暗殺その後
■大統領暗殺あとの様子
今は家族と一緒に学校に避難しています。
学校は狭いのですこし窮屈だけど、国連の軍隊の人が守ってくれているので今のところ安心しています。学校の敷地の外には鉈（なた）をもった何十人もの人たちがたむろしていました。お父さんはあの人たちをインテラハムエ（Interahamwe）と言っていました。学校の外からは「ゴキブリを駆除しろ！」と物騒な声が聞こえます。このまま私たちはどうなってしまうのか、少し心配ですが、ミサ（カトリックの儀礼）に参加して、心が少し落ち着きました。

GCP 企画(2 年)

教　　科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2020 年 11 月 28 日(土) 9:55~11:50 (100 分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単　元　名	現代の紛争	本時の題目	現代紛争の実態と原因を探る	
本時の目標	ルワンダ内戦・大量虐殺(ジェノサイド)について国内政治・植民地支配・民族の違い・マスメディア・人権思想・国際社会等について着目をしながら原因を整理し、二度とジェノサイドを起こさないために必要なことは何かを考える			
項　　目	項　　目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
２１日（土）	①　GCP 企画の説明 ②　VTR 学習 vol.1 ③読み合わせ	GCP リーダーズより企画の概略 ルワンダの大虐殺（ジェノサイド）がおこるまでの過程について VTR 学習 『事前学習資料』の「ルワンダ内戦・大量虐殺とは」読み合わせ（4 人1 班） －　10 分休憩　－ 読み合わせの続き グループ対話：「内戦の要因」について 「虐殺被害者・加害者の証言」読み合わせ グループ対話 「国際社会の対応」読み合わせ グループ対話	3 24 20 10 5 10 5 10 5	『事前学習資料』配布 映像：NHK 海外ドキュメント「ルワンダ（1）」 ①国内政治②植民地化政策③現地民(ツチ族・フツ族)④国際社会の 4 つの視点で、内戦の要因について話合う
1　時限目 (導入・展開Ⅰ)	①GCP 企画の説明 ③　概略の説明 ④　VTR 学習 vol.2 ⑤　ロールプレイ ④グループ内作業 A ※4 人 1 グループ	本時の内容について説明する リーダーズがルワンダ内戦の概略を説明 ルワンダ・ジェノサイドについてまとめた映像を学ぶ 4 人1 班のグループに分かれ、1 人 1 役のロールプレイを行い、ルワンダ内戦の様子を模擬体験する。 『事前学習資料』を読み解きながら、内戦の「原因」を①国内政治②植民地化政策③現地民(ツチ族・フツ族)④国際社会の 4 つのトピックにグループで整理しながら、グループワークシート(フィッシュボーン)にまとめていく	3 15 20	『事前学習資料』持参 映像：NHK 海外ドキュメント「ルワンダ（2）」 理解してロールプレイできているかクラスの様子を確認する※リーダーズがアドバイス ※フィッシュボーン 
休憩　10 分				
2　時限目 （展開Ⅱ）	⑤グループ内作業 B ※4 人 1 グループ ⑦グループ発表 ⑧まとめ ⑨個人作業 ⑩ワークシートの回収と次回予告	二度とこのようなジェノサイドをおこさないために必要なことは何か、グループで話し合いグループワークシートにまとめる。 いくつかのグループに発表してもらう ルワンダ内戦以外のジェノサイドについて紹介 個人ワークシートに本時の感想を記入する。	10 5 2 5 1	発言や感想をフィッシュボーン周囲の余白に書いていく。 リーダーズが事前に読み、どこまで紹介するか決めておくこと
課　　題	・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任は GCP リーダーズの進行のサポートをする。			

F） SDGs カードゲーム（1 年 生）

■ 概 要

11 月 28 日に行われた第 3 回の最終企画では、創価高校で企画立案し開発したカードゲーム型の教材を使用し、企画を実施しました。2015 年に国連で採択された「2030 アジェンダ・持続可能な開発目標＝SDGs」を体験的に学ぶことを目的に行われ、3～4 人グループで 9 ヵ国にわかれ、各国が抱える課題が SDGs のターゲットとしてカードにしたものを配布。各国はそれらの課題を「アイテム」を使って解決していきます。解決することで「ポイント」を得ることができ、最終的に一番ポイントを獲得した国の勝利となります。

教室前方の画面には、SDGs の世界全体の達成状況がわかるバロメーターが表示されており、自国の課題解決とともに、自国がすべてクリアしても、他国がクリアできなかった場合はポイントが減点されてしまうため、世界で SDGs の達成を目指し、道具の貸し借りや、融資など、互いに協力しあって交渉を進めていきます。

「アイテム」には「お金」と「アイディア」があり、「お金」は貿易ゲームの容量で、道具と紙をつかって製品をつくり、マーケットで換金することで得られます。「アイディア」は自国の教育水準や知的活動の指数をあらわしており、さまざまな課題を解決していく中で得ることができます。

各国の課題やそれを解決するための経済力や教育力の必要性、国際社会における援助のあり方、協力関係の構築など様々なことをカードゲームを通して体験的に学びました。

SDGs Card Game

Designed by SOKA Gakuen

1 ゲームの流れ

参加者(学習者)は、9 ヵ国のグループにわかれ、はさみや鉛筆などの道具と紙を使って「製品」を作り、「マーケット」で売って「お金」を得たり、自国の教育力を証明することで「アイディア」を得たりする。それら「お金」「アイディア」のアイテムを使って、自国の課題が示された「ターゲットカード」を実行（国連に提出）し、2030 アジェンダ・SDGs の達成を目指す。

「ターゲットカード」を実行することで得たポイントの合計数をグループごとに競うゲーム。

アメリカ	日本	イギリス
インド	ブラジル	中国
リベリア	ハイチ	カンボジア

アイテム　　ターゲットカード

2 ルールの詳細

ターゲットカード

SDGs の 17 項目 169 ターゲットを各項目 1～3 ターゲットにしぼり、35 種類のターゲットカードが用意されている

「共同提出国数」には、同じ種類のカードをもっている国の数が示されている。それらの国でターゲットカードと「必要なアイテム」を分担して提出しなければならない。どの国がどの種類のターゲットカードを持っているかは「国連」が情報をもっている。

ターゲットカードを実行するにはアイテムが必要になる。共同提出国数が複数の場合、それらの国でまとめて用意する必要がある。(カードに書かれている枚数は共同提出国で合算した数)

ターゲットカードを実行するとリターンとして指定された「ポイント」とカードによって製品を作るための道具を受け取ることができる。「共同提出」で提出した場合、得られるポイントカードは提出国で山分けする。

「実行条件」に書かれているターゲットカードが既に提出済みでないと、ターゲットカードは実行できない。提出状況は「国連」で確認することができる。

アイテムカード

アイディア idea　「教育水準評価書」を提出することで得られる。（アイディア）

1G money　道具を使って「製品」を作りマーケットで換金することで得られる。（お金）

1 point　「ターゲットカード」を実行することで得られる。マーケットでは 1point につき 1G と交換できる。※逆は不可（ポイント）

ゲーム進行のルール

・グループの中から「国連大使役」と「労働者役」を 1 名ずつ決める。
・交渉や作業はゲームで提供されているもののみを使用する。
・「ターゲットカード」と「教育水準評価書」の交換を除けば、交渉内容は原則自由。道具やアイテム、ポイントを交換したり、譲渡したりすることは各国ごとの条件次第で自由に行うことができる。

取り引きのルール

国連・国際機関

ターゲットカードの処理

①必要なアイテムをそろえ提出する。共同提出が必要な場合は、代表のグループがアイテムをそろえてターゲットカードを提出する。

提出の際は、**カードの文章（ターゲット）を読み上げる。**

②指定されたポイント、道具などを受け取る。

③ターゲットカードは自国に持ち帰る。ただし、再利用はできない。

「アイディア」カードの交換

「教育水準証明書」の問題に正解していれば提出するレベルごとに指定された枚数の「アイディア」カードを受け取ることができる。

開発支援

国際機関はさまざまな道具をもっている。各国は国際機関に相談することで、必要な支援を受けられる場合がある。ただ、道具そのものを借りることはできない。

国連開発援助会議

国連が「国連開発援助会議」を開催する場合、各グループの国連大使は参加しなければならない。

マーケット・開発銀行

「製品」と「お金」の交換

「労働者」が生産した「製品」を「お金」に換金できる。**道具は労働者しか使えない。**

13cm×8cm の長方形	3 枚 1 組 ＝1G
直径 9cm の半円(分度器の形)	3 枚 1 組 ＝3G

開発援助のための融資

開発銀行より 1 口 3G から融資を受けられる。
ただし、**「ポイントカード」を所持していないと**融資が受けられない。また、**定規をもっていない国限定。**

融資：1 口 3G ～	金利：1 口＋1G

資源発掘のための投資

資源獲得のための投資をすることができる。

赤コース：1 回 1G	青コース：1 回 3G
赤いサイコロを振る	青いサイコロを振る

サイコロを振り、出た目の枚数の紙をもらう。

ポイントと「お金」の交換

1 ポイントにつき 1G を交換することができる。**ただし、その逆はできない。**

ゴール

・ターゲットカードを全てクリアすることを目指し、獲得したポイントの数を各グループごとに競う。
・全ターゲットを達成した順番でポイントを獲得できる。1 位：？P、2 位：？P、3 位：？P、4 位以下：？P
・自国のターゲットカードが提出できていなかった場合、未提出の枚数×マイナス？P。
・全て提出できた国でも、他国でクリアできていない国が 1 つでもあった場合はマイナス？P。

※これらのポイント数はゲーム終了後に発表する

SDGs Card Game

教科	GCP	担当教員	各クラス担任
実施年月日	2020 年 11 月 28 日（実施日）	生徒在籍数	各クラス人数
単元名		本時の題目	「持続可能な開発目標（SDGs）」
本時の目標	「持続可能な開発目標（SDGs）」をテーマに、「SDGs Card Game」に取り組み、SDGs の意義や働き、世界が抱える諸問題の連動性や世界が協働することの重要性を学ぶ。		

時　刻	項　目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
事前準備 (前日まで)	グループを決める グループ担当国を決める	クラスの生徒を9 国に振り分ける。 「ファシリテーター」「国連」「マーケット」の担当生徒を決める		
(当日) 休み時間	配席準備・座席移動	机を「配席図」の通りに並べ着席してもらう		
授業開始	①ゲームのルール・意図の説明	「ファシリテーター」よりゲームのルールと意図を説明する。	5	ルールブック配布
	②作戦会議	「国連」より道具やカードを渡す。 グループは席について道具を確認し、作戦会議をする。	15	道具の配布
	③SDGs Card Game	前半戦（前半戦終了時刻を板書する）	30	※ターゲットカードを実行させるときは、必ず項目を音読してもらう。
		休憩　※状況に応じていれなくても良い	5	
		前半戦の振り返り 「ファシリテーター」より前半戦のゲームの様子を振り返り、後半戦に向けての状況整理やアドバイスを行う。	5	
		後半戦（後半戦終了時刻を板書する）	30	
		全ゴールにおいてパロメーターが MAX になるか時間切れになったら次第ゲーム終了		
	④振り返り・感想記入	ワークシートを配布し、グループごとに振り返り、感想を記入する	10	ワークシート配布
	⑥片付け	説明に従ってグッズを片付ける	10	
課題				
講評				

G）　模擬国連「国連ランチ」(3 年生）

■概要

模擬国連とは、実際に国連で行われている国際会議をモデルにして、一人一人が世界各国の大使となって会議・交渉を行うものです。今回は、「国連ランチ」をテーマに各クラスを 11 の国に分け模擬国連を実施しました。

このテーマは、世界各国の食料事情、経済状況、宗教上の特色などを加味した上で世界の人々が喜んで食べられる「国連ランチ」を考案しようというものです。第 1 回は、資料を基に世界各国の実情を詳しく調べましたが、次回も協議を続け、世界の人々に喜ばれるメニューは何かを考察しました。2 回目以降は、実際に交渉を行い、11 カ国で 1 つのメニューを作成し、最終的に提出されたメニュー(決議)案を可決し、終了しました。

■ワークシート例

Global Citizenship Project【模擬国連】

テーマ「国連ランチ」

国連総会で、各国が順番に「国連ランチ」を提供することが決定した。11 カ国ずつ、3 ヵ月ごとの順番で、各国の特色を生かしながら独自のランチメニューを提供する。はたして、どのようなランチを提供するのか、11 カ国で折り合いはつくのか。とある期間を担当することになった国々の大使が自国の威信をかけて交渉に挑む。

A 目 的

- 国連の会議を国際政治の仕組みを理解し、国際問題の解決策を考える過程を体験する。
- 担当する国の歴史、経済や文化を深く理解し、異文化への視野を広げ、論理的思考力、問題分析力を高める。
- 自国の利益を確保しつつも、他国を理解し尊重する中で、多角的な視点を磨き、国際協調、相互理解のあり方を捉える。
- 議論の過程を通じて【リサーチ・政策立案】【スピーチ】【ディスカッション】【交渉】の力を養う。

B 参加国

C 決議内容

国連ランチメニュー

□主食
□おかず① □おかず②
□デザート □飲み物

D 決まりごと・ルール

01 国連ランチは国連本部内で調理・提供し、販売対象は国連会議の参加者(各国首脳・大使等)・国連職員とする。また、国連ランチを食べるかどうかは選べるものとする。
02 ランチの値段はできるだけ低くおさえることを目指し、売り上げや利益についての議論は行わないこととする。
03 各国を代表する大使は、その国の経済・文化等を十分理解し、それらに反することがないように十分注意して交渉にあたること。
04 全会一致のコンセンサス方式での採択を目指すが、時間がない場合は多数決で最も得票数の多かった決議案を採択することとする。

E 会議の流れ

①10 月 31 日(土) 50 分 × 2

ルール 説明 → ポジションペーパー作成 → スピーチ原稿作成

②11 月 21 日(土) 50 分 × 2

作戦会議 → スピーチ (3min) → 交渉 → 作戦会議 → 交渉 → 作戦会議

③12 月上旬（3 年登校日） 50 分

作戦会議 → 交渉 → 決議 → 振り返り

?

決議案（ドラフト レゾルーション / DR）とは?

会議の成果文書である「決議」の草稿。大使は国際益を保ちつつも国益に寄与する文言を作成し、国益に反する文言を削除するために交渉を行う。会議における大使の全ての行動は、自国の政策に基づいた決議を採択するために行われる。

非公式討議とは？

着席討議(モデレートコーカス)と非着席討議(アンモデレートコーカス)の 2 種類が存在する。着席討議では議長の議事進行の下、動議で指定された目的に沿って各国大使が発言をする。非着席討議では、一定時間各大使が席を立ち自由に交渉を行い、立場の似通った国とグループを形成し決議案を作成する。多くの大使と意見を交換し、議論の対立軸を把握することが重要。

投票について

コンセンサス投票の場合、反対であれば手を挙げる。点呼投票（ロールコール）の場合、アルファベット順に国名が呼ばれたら 賛成、反対、パスのいずれかを答える。パスは一度のみ使えるが、次に答えるときは賛成か反対で答えなければならず、棄権はできない。

Global Citizenship Project Model United Nations 振り返り

①決議案の中に反映させたことと譲歩したことはそれぞれどのようなことですか？

決議案に反映させたこと	譲歩したこと

②採択された決議案の内容について「満足」していますか？（ はい ・ いいえ ）
③あなたは交渉に積極的に参加することはできましたか？ （ はい ・ いいえ ）
④交渉する際に難しかったことはどのようなことですか？

⑤大使として参加する中で、担当国の理解はどの程度進みましたか？該当箇所に○

全く理解できなかった	少し理解できなかった	どちらともいえない	少し理解できた	とても理解できた

⑥模擬国連を通して、どのようなことを身につけられると感じましたか？該当する項目を５つ程度選び、順位をつけてください。

[ ]問題分析力	[ ]論理的思考力	[ ]戦略的思考力	[ ]多角的視点	[ ]協調性
[ ]スピーチ力	[ ]リサーチ力	[ ]交渉力	[ ]説得力	[ ]相互理解
[ ]国際問題の理解	[ ]リーダーシップ	[ ]思いやり	[ ]朗らかさ	[ ]語学力
[ ]文章力	[ ]その他( )		[ ]その他( )	

⑦模擬国連を通しての感想を記入してください。

３年	組	番	氏名：

MODEL UNITED NATIONS in SOKA HIGH SCHOOL

SOKA HIGH SCHOOL

General Assembly

2020
Original: Japanese

Draft Resolution (決議案)

Sponsor: （共同提案国を列記します）

国連弁当のメニューを以下の通り決定する。

主 食	
おかず①	
おかず②	
デザート	
飲 料	

（以下に理由を書きます）

GCP 企画(3 年)

教　　科	GCP	担当教員	各担任
実施年月日	2020 年 10 月 31 日(水)　100 分 2020 年 11 月 21 日(土)　100 分 2020 年 12 月 3 日(木)　100 分	生徒在籍数	各クラス在籍数
単　元　名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の開催（核軍縮）
本時の目標	「国連ランチ」をテーマに、各クラスで 11 カ国に分かれて模擬国連を実施し、諸外国の経済や文化を深く理解し、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。		

項　目	項　目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
10 月 31 日(土)	担当国発表・席移動		3	
	模擬国連とは? 今回のテーマについて	GCP リーダーズより「模擬国連」の説明と、今回のテーマについての説明を行う	15	GCP ファイル・ワークシート、すべて配布
	①グループ作業	担当国ごとに「ポジションペーパー」と「スピーチ原稿」を作成する	30	
	①の続き		50	
11 月 21 日(土)	企画の流れを確認	本時の流れとポイントを確認する	5	スピーチメモ用紙配布
	②作戦会議	担当国ごとに前時の確認をし、作戦会議を行う	5	
	③スピーチ	1 ヵ国 1 分 30 秒以内でスピーチを行う	20	
	④交渉	決議案採択に向けて交渉を行う	20	
	⑤作戦会議	交渉を行わない作戦会議の時間を設ける	5	議長は必要に応じて決議案(未記入)を各国に配布
	⑥交渉	決議案採択に向けて交渉を行う	40	
	⑦作戦会議	交渉を行わない作戦会議の時間を設ける	5	
12 月 3 日(木)	企画の流れを確認	本時の流れとポイントを確認する	3	
	⑧作戦会議	担当国ごとに前時の確認をし、作戦会議を行う	5	
	⑨交渉	決議案採択に向けて交渉を行う	40	
	⑩決議	コンセンサス方式の投票を行う（決まらない場合は多数決に切り替える）	15	
	⑪振り返り	振り返りのワークシートにそって、グループ・個人で振り返りを行う	20	ワークシート配布
課　　題	・当日までにグループ分け・国分けを行う。 ・担任は GCP リーダーズの進行のサポートをする。			
講　　評				

H）　人権すごろく（2年生）

■ 概要

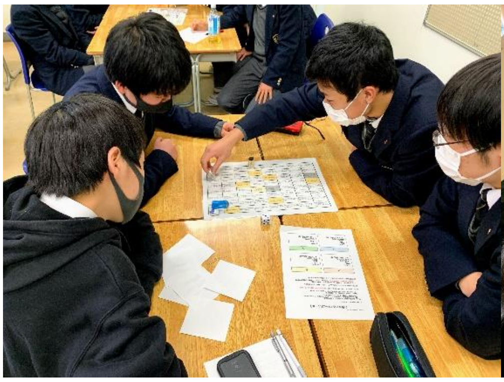
1 月 23 日に行われた第 4 回は、「人権」をテーマに、人権というものが、人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解すると共に、身近な生活の中から人権尊重の必要性、重要性を感じることを目標として行いました。

導入として、オリジナル教材である“人権すごろく”を使って、楽しみながら身近な自由が、「人権」として保障されているものであることを知りました。最初に、自身の出身国や性別といった人物像が設定され、設定によって異なる結果がでるようにし、理不尽な人権侵害を体感できるようにしました。各マスには、「突然逮捕される。2 マス戻る」や「テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1 回休み」など、人権に関わる内容が書いてあり、それを読み上げながら進めることで、理解を深めていけるようにしました。

続いて、人権団体、ユース・フォー・ヒューマンライツが作成した映像『人権の歴史』を視聴しました。短時間で分かりやすく人権の歴史がまとめてあり、生徒の理解が進みました。

本来であれば、次にグループごとに、世界で実際に起きている人権問題に関するニュースを配布し、それが世界人権宣言のどの項目に抵触するかを検討しながら学びを深める予定でしたが、新型コロナウイルスによる行事日程の見直しにより、各自で研鑽するにとどめました。

この企画を通して、平和な日常で暮らしていると意識できていなかった「人権」というものを少し身近に感じることができました。



■ ワークシート例

GCP企画【人権すごろくゲーム】

START	紛争が勃発し、住居を失う。以後2回は出た目のマイナス1	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	好きな人と結婚する。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む
右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	紛争が勃発し、難民となる。以後2回は出た目のマイナス1	好きな人と結婚する。1マス進む	Challenge③	脱税の容疑で財産をすべて凍結される。1マス戻る	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む
長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	好きな人と結婚する。1マス進む	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	Challenge⑤	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。
次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	Challenge⑥	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む。	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	Challenge①
仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	開発したシステムで特許を取得する。1マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	GOAL	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み
政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	強制的に結婚させられる。1マス戻る	外国に移住する。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	失業をしたが、失業手当をうける。1マス進む	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る
外国に移住する。1マス進む	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	大きな病気になったが保険が適用され安く治療を受ける。1マス進む	Challenge④	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む。	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む。
挙動不審を理由に1ヶ月拘束される。1回休み	Challenge②	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	強制的に結婚させられる。1マス戻る	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る

世界の人権問題を知ろう

(1)

エジプト

デモ隊と治安部隊の衝突 撮影しようとして死刑の危機に

マフムード・アブゼイドさん

2013年夏、エジプト全土でモルシ前大統領の支持者と治安部隊の間で大規模な衝突があり、約1,000人が命を落としました。最多の犠牲者が出たのはカイロ近郊ナセルシティーのラバア広場でした。座り込みでモルシ復権を訴える親モルシ派を排除しようと治安部隊が実弾や催涙ガスを使用し、数百人が亡くなったのです。

この事件では、デモ参加者が大勢逮捕されました。事件の様子をカメラに収めようとしていたフリーの報道カメラマン、マフムード・アブゼイドさんも、逮捕されてしまいます。現場にいたフランスと米国のカメラマンも同様の目に遭いました。

2人の外国人カメラマンはその日のうちに釈放されました。しかし、マフムードさんは拘束され続け、今に至ります。C型肝炎にかかっているのですが、治療を受けさせてもらえません。

2年半後にようやく始まった裁判

マフムードさんは他のデモ参加者など738人とともに起訴され、2016年3月、逮捕されてから2年半以上経って、ようやく裁判が始まりました。マフムードさんが問われたのは「禁止団体（ムスリム同胞団）に所属」「殺人」「殺人未遂」「武力と暴力で体制転覆」など9つの罪でした。マフムードさんはすべてを否認。彼はただ、写真を撮るためにそこにいただけなのです。しかし、裁判で有罪になれば、死刑を科される恐れがあります。

エジプトでは2011年、30年以上続いた独裁政権が民主化運動によって倒れ、翌年、選挙でモルシ氏が大統領に選ばれました。ところが景気低迷と治安悪化で退陣を求める声が高まり、1年もたたないうちに、軍によって解任されます。治安部隊との衝突事件では、多くのモルシ派が死刑判決を受けています。

(2)

イラン

クルド人女性のために活動して終身刑 拷問で失明の危機に

ゼイナブ・ジャラリアンさん

ゼイナブ・ジャラリアンさんは、イランでクルド人の権利、特にクルド人女性の地位向上に取り組んできました。ゼイナブさん自身もクルド人です。

2008年3月、彼女は諜報機関によって突然、逮捕されてしまいます。弁護士や家族にも連絡をとらせてもらえず、8カ月も独房に閉じ込められ、その間、壁に頭を何度も打ちつけられるなどの拷問を受けたと言います。そのせいで頭蓋骨にひびが入り、脳内出血を起こしました。拷問の後遺症で今も目に問題を抱え、家族の費用負担で刑務所外で手術を受けましたが、失明の危険性は消えていません。しかし治療は拒否されています。

武力闘争に関わったと疑われ

逮捕はクルディスタン自由生活党（PJAK）の武闘派メンバーだと疑われたためでした。PJAKはイラン政府と戦闘を繰り広げており、イランや米国などではテロ組織に指定されています。ゼイナブさんはPJAKの政治部門と連携することはありましたが、武闘派との関わりは否定し続けています。

わずか数分で終わった裁判では、神への敵意を持った罪で有罪になり、死刑を言い渡されました。その根拠は拷問で強要された自白で、PJAKの武力行動との関係を証明する証拠は示されませんでした。その後2011年12月に、最高指導者の指示により終身刑に減刑されています。

2016年4月、国連の恣意的拘禁に関する作業部会は、ゼイナブさんがクルド人の権利のために活動し、PJAKの非戦闘部門と関ったために拘束されたとする見解を採択しました。そして彼女を直ちに釈放し補償を受ける権利を法的に認めるよう、イラン当局に求めています。

(3)

イタリア

ロマの家族が強制立ち退き 危険な場所からまた危険な場所へ

自治体が用意した一時的な居住地

2016年6月21日、75家族・約300人のロマの人たちが、イタリア・ナポリ近郊にある居住キャンプから強制的に立ち退かされました。

このキャンプはジュリアーノ・イン・カンパーニア市が2013年に設置したもので、それまで何度も強制退去を受けてきたロマの人たちは、このキャンプに移されて3年の間暮らしていました。キャンプは有毒廃棄物の堆積場の近くで、閉鎖は健康・安全上の理由による裁判所の命令でした。そもそも居住地にするには、危険な場所だったのです。

建物のない代替地

ジュリアーノ市は新たな居住地を作ることにしましたが、完成まで住む場所として市が急きょ用意した所は、ひどいものでした。テニスコート4面分ほどの狭さの花火工場跡地で、周りは雑草だらけ。トイレは二つしかなく、一つはぼろぼろ、一つは壊れていました。排泄物を化学処理するトイレと貯水槽が設置される予定ですが、あまりに劣悪な環境です。

家屋もなく、住民たちはトレーラーを持ち込むことを許可されましたが、トレーラーを持っていない家族は外で寝泊まりするしかありません。がれきやさびた釘、「自然発火物」「粉」と書かれた怪しげな容器などが転がったままで、健康面でも安全面でも適切な場所とは言えません。

少数民族ロマの人たちの強制立ち退きは、イタリア各地で行われています。EUが社会統合に向けて資金援助をしているにもかかわらず、ロマに対する差別と偏見がまん延し、へんぴな場所に居住区を作るなど、イタリア政府は隔離政策を改める様子はありません。

GCP 企画(2 年)

教科	GCP	担当教員	各担任
実施年月日	2021 年 1 月 23 日(土) 12:25～12:55 (30 分短縮 vr)	生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	人権	本時の題目	「世界人権宣言」を学ぶ
本時の目標	「人権」とは何かを知り、人権が人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解する。また、『世界人権宣言』を通して、世界の人権問題を考える。		

項目	項目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
1 時限目	① 本時の GCP 企画の説明	本時の内容について説明する	1	目標を読み上げ、短縮バージョンで行う旨を伝える
	② 人権すごろくゲーム	ルール説明 4 人 1 組になり、A ～D を割り当てる ルールに従い、すごろくゲームを行う ※コマは自分の消しゴム等を使用	2 10	資料の配布（リーダーズに手伝ってもらう） ゲームは時間になった時点で強制終了
	→ゲーム振り返り	個人ワークシート配布。❶に取り組む	2	
	③ＶＴＲ学習	「人権の歴史(10 分)」を視聴する	11	Youth for human righs 作成
	④世界人権宣言を学ぶ	世界人権宣言配布。グループで簡易文を読み合わせ、ゲーム中に自分が制限された人権とは何かを考える。	3	配布はリーダーズにお願いする
自宅学習（任意）	プリント配布「世界の人権問題を学ぶ」	「世界の人権問題を知ろう(一覧)」を配布。	1	配布はリーダーズにお願いする
	次回予告	「人権ディベート」言語技術の授業を参考		
課題				
講評				

I) 人権ディベート（2年生）

■ 概要

第4回のGCP企画（世界人権宣言に学ぶ）に引き続き、「人権」への理解を深めることを目的として、2月13日、20日の2日間にわたり人権ディベートを実施しました。これは、ディベートの手法を用いて少年犯罪の実名報道について知り、そこから、「個人の基本的人権」と「公共の福祉」がぶつかる例について考え、さらに他者の人権を尊重するための方途を探るものです。

人権ディベートを行う「基礎体力」は、言語技術の授業でトレーニングしました。週1回行われるこの授業では、「創価高校は定期考査を廃止すべきである」「創価高校は文化祭を廃止して運動会を実施すべきである」など、身近で、背景知識の必要でない論題でディベートを実施。本校の創立者がかつて「互いの討論を通し、問題の核心に迫り、より優れた解決法を見つけていく『創造的議論』がディベートなのである」と語られたことを、実感を持って学ぶ事ができました。

13日の準備の日には、ディベートについての講義を受け、言語技術の授業で学んだ知識を再確認するところから始めました。そして、この企画では時間がないため、朝読書の時間を活用して事前に肯定側と否定側に分かれ、立論、質疑、アタック、ブロックを考えました。また、個人ワークシートに従って進めていくと、そのまま試合ができるようにしました。20日の本番までに1週間ほどあったため、それぞれ準備を進め、当日の1限目に最終準備の時間を取り、2時間目以降の本番に臨むことができました。新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下によりオンライン学習を実施していたため、準備から本番まですべてZoomを活用しての実施となりました。

少年犯罪をめぐる本番の論題は、生徒たちには少し難しく、その場で相手のアタックに切り返し、効果的にまとめを行うことができない部分もありましたが、言語技術の授業で学んだ技術を活かして、論題について、複眼的に考えることができました。

■ワークシート例

GCP 企画「人権」ディベートワークシート

【準備② メリット・デメリットを考える】

●少年犯罪の「実名報道」ってなに？

2015 年２月に神奈川県川崎市で少年が殺害され、容疑者として３人の少年が逮捕されました。そんな中、ある週刊誌が、逮捕された少年のうち一名を実名と写真付きで公表したことで、少年法第６１条が注目されています。この条文は、犯罪等を犯した少年の氏名・写真など、少年を特定できるような情報の報道（推知報道）を禁止しています。

<少年法―第 61 条>
家庭裁判所の審判に付された少年又は少年のとき犯した罪により公訴を提起された者については、氏名、年齢、職業、住居、容ぼう等によりその者が当該事件の本人であること推知することができるような記事又は写真を新聞紙その他の出版物に掲載してはならない。

その主な目的は、少年の社会復帰のためだと一般に説明されます。犯罪事実が実名・顔写真等とともに公開されると、たとえば少年が少年院等で反省して出所し、新たな人生を歩もうとしている時に、世間の偏見（ラベリング）等により人生をやり直すことの妨げになるため、人格生成過程にある少年の将来を考慮し、実名報道を禁止する必要があるのだといわれます。少年法は、２０歳未満の者を「少年」と定義し、その少年の立ち直り（社会復帰・更生）のためのさまざまな措置を定めているわけです。

●メリットとして想定されること

少年犯罪の抑止効果

現状では、罪を犯しても実名が公開されないため、あたかもそれが、社会や世間から“守られている”という意識を生み、犯罪行為へ走らせてしまう危険性があります。
実名報道が行われるようになれば、罪を犯した際に、成人と同じ社会的制裁を受けることになります。このような、犯人として世間に知れ渡ってしまうというプレッシャーが、少年犯罪の抑止効果につながることが期待できます。また、社会的制裁を受けたことで、再犯を起こさせにくくなることも考えられます。

メディアの「報道の自由」の確保

新聞やテレビなどのメディアには、国に左右されず重要と思われることを国民に伝える「報道の自由」があると言われています。しかし、現状の少年法(第 61 条)では罰則規定はないものの、少年犯罪の加害者の実名報道は禁止されています。
実名報道が行われるようになれば、メディアの「報道の自由」を確保することができます。

ネットによる不正確な情報拡散の防止

現状では、実名報道が行われていないために、凶悪な少年犯罪が起こった場合、一部ユーザーによってインターネットの掲示板等で犯人を特定するための書き込みが行われることがあります。その際に誤った情報によって無実の少年がつるし挙げられてしまう危険性もあります。匿名報道では内容の正しさを確かめることができず、誤った報道が見過ごされたままになってしまうからです。
実名報道が行われるようになれば、無責任なうわさや憶測の独り歩きを是正し、透明性を確保することができ、無実の少年が犯罪者扱いされる危険性を防ぐことができます。

被害者・市民の「知る権利」の保障

日本は民主主義国家であり、主権者である国民には国のあり方を考えるのに必要な情報を「知る権利」があるといわれています。
現状では、少年犯罪の加害者が誰なのか、どのような人間なのかを知るすべはありません。これは、被害者であっても同じです。
実名報道が行われるようになれば、こうした被害者や市民の「知る権利」を保障することが可能になります。犯罪の原因や今後の防止策などについて、国民全体で議論していくためには、その犯罪事実について、事件の背景なども含め、できるだけ正確でくわしい情報が必要になるといえます。

●デメリットとして想定されること

加害者の人権侵害・更生の阻害

現状の少年法は、処罰することよりも少年の更生に重きを置いているため、実名報道には消極的立場をとっています。少年には社会復帰のために犯罪事実を実名で公表されない権利があると捉えるのです。
実名報道が行われるようになれば、加害者のプライバシーを著しく侵害したり、心を傷つけてしまったりする危険性があります。報道が過熱し、犯罪と直接関係の無いような情報まで日本中に報道されてしまい、社会復帰そのものや、就職が困難になる可能性も考えられます。その場合、再犯につながる危険性もあります。

保護者・親族の報道被害

少年犯罪は、監督責任をもつ保護者が批判の対象になることもしばしばです。しかし、環境は家庭によって様々ですし、一概に保護者の責任を追及することが正しいとは限りません。
実名報道が行われるようになれば、そうした保護者にも直接追及の目が向けられ、また、関係のない親族までもが批判の対象になることも考えられます。その場合、平穏な日常生活が阻害され、ともすれば職を失う事態にもなりかねません。少年の健全な更生のためにも、生活が経済的に安定していることは重要な要素とも言えます。

模倣犯の増加

現状では、加害少年は「少年Ａ」といったような匿名で報道されています。
実名報道が行われるようになれば、犯人が有名人化・偶像化され、犯行の手口や犯人の性格・趣味などの詳細が合わせて報道されることで、同年代の少年たちの中から加害少年をヒーロー視した模倣犯が出てくるおそれがあります。一部には重大事件を真似することによって社会的な注目を集めたがっている者がいることも事実です。メディアの報道が「模倣犯」を誘発してしまう危険性があります。

えん罪被害

誤認逮捕やえん罪はあってはならないことではありますが、万が一そのようなことが起こった場合であっても、実名報道がなされなければ被害をある程度食い止めることができます。
実名報道が行われるようになれば、本来無実であった少年が裁判前からあたかも犯罪者のように実名が報道され、名誉を著しく傷つけられてしまうことがあります。一度広がった情報を修正することは大変困難です。無実の少年が犯罪者扱いされ、社会的制裁を受ける危険性は避けるべきです。

【アタックのポイント】
「少年」は、将来において社会を担っていく大人になるための生育途上にあるものです。そのような生育途上にある少年が過ちを犯したからといって、これを成人と同じように社会的制裁を加えることは、少年をきちんと教育していない親を含めた大人が負うべき責任を少年に押し付けることになりかねません。
しかし、現状のままであれば、少年の更生や社会復帰にはプラスかもしれませんが、他方でメディアや市民の「報道の自由」「知る権利」を考えればマイナスになります。どちらも憲法で守られている重要な権利であり、一般論としてどちらかが絶対的に優位であるとはいえません。しかし、今の少年法第６１条は、こうした権利よりも、少年の更生や社会復帰の利益のほうを優先させる立場をとっているようにも見えます。憲法の観点からみた場合、これに十分な理由があるかどうか、表現の自由への過剰な制約ではないか、という問題も提起され得ます。しかし、必ずしもメディアが節度ある報道をするとは限らず、視聴者の興味関心をかき立てるだけの悪質なメディアも存在します。また、インターネットの普及によりメディアで報道されなくても、ネット上で暴かれてしまうケースもありますし、一部週刊誌が罰則規定のないことを理由に実名報道をしてしまう実態もあります。その場合に、メリットやデメリットがどの程度の規模で発生するのか、よく注意する必要があるでしょう。

★この他に思いついたメリット・デメリットを挙げてみよう!!

GCP 企画「人権」ディベートワークシート

【準備③ 立論を構成する】

メリット(M)・デメリット(D)　プランを導入することで発生するＭ・Ｄを書きます(最大２つまで)

現状分析

(肯定側は)現状の問題点を主張します

(否定側は)現状のままでも良いことを主張します

発生過程

実名報道がなされるようになり、

Ｍ・Ｄが発生するまでの過程を順を追って整理します

↓

Ｍ・Ｄの発生

重要性・深刻性　なぜＭ・Ｄが発生することが(肯定側なら)重要なのか、(否定側なら)深刻なのか説明します

GCP 企画(2 年)

教　　科	GCP	担当教員	各担任
実施年月日	2021 年 2 月 13 日(土) 9:05~9:50(45 分) 2021 年 2 月 20 日(土) 9:00~10:55 (115 分)	生徒在籍数	各クラス在籍数
単　元　名	人　権　／　本時の題目		身近な人権・創立者の人権闘争を学ぶ
本時の目標	ディベートを通して身近な人権について考え、創立者の人権闘争を学ぶ中で、生活の中で他の人権を尊重するための方途を探る。		

項　目		項　目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
13 日（土）	導　入	①講義ビデオを共有 ②グループ作業（メリットデメリット） （立論） （反駁）準備	・ディベートの方法についてレクチャーする ・今後の流れについて説明する 左記の項目についてそれぞれのグループで準備を進める。	15 3	**担任：各 PC で共有**
15 日～19 日	朝読書準備	③グループ作業 各朝 SHR 後~9：00 （12room を準備）	朝の SHR の後を活用して、事前準備の詰め、原稿読みあげ練習（担任やＧＣＰリーダーズからの声かけをお願いします。）	合計 50	**担任：ブレイクアウトセッション 12room 作成**
20 日（土）	SHR 後	打ち合わせ開始	【zoom】グループセッション開始		**担任：room 作成**
	展　開 9:00~10:35	④ディベート（第 1 試合）	第 1 試合のグループがディベートを行う 肯定側立論(2 分)(1 分)否定側質疑(2 分) 否定側立論(2 分)(1 分)肯定側質疑(2 分) 否定側アタック(2 分)　肯定側アタック(2 分) 作戦会議（3 分） 否定側ブロック(2 分)　肯定側ブロック(2 分) ジャッジ・講評(5 分) ※ジャッジは肯定側 room で話し合い	26	（6 room：名前を付けられるのであればお願いします。①メイン room1 ②肯定 room1 ③否定 room1④メイン room2 ⑤肯定 room2 ⑥否定 room2 ）
		※休憩	【zoom】グループセッション第 2 弾開始 各 room で適宜打ち合わせ	10	**担任：room の再作成** （12room 作成。名前変更①メイン room1、②メイン room2、③メイン room3、④メイン room4⑤肯定1 、⑥否定1 、⑦肯定2 、⑧否定2 、⑨肯定3 、⑩否定3 、⑪肯定4 、⑫否定4 ）
		⑤ ディベート（第 2 試合）	第 2 試合のグループがディベートを行う 肯定側立論(2 分)(1 分)否定側質疑(2 分) 否定側立論(2 分)(1 分)肯定側質疑(2 分) 否定側アタック(2 分)　肯定側アタック(2 分) 作戦会議（3 分） 否定側ブロック(2 分)　肯定側ブロック(2 分) ジャッジ・講評(5 分) ※ジャッジは肯定側 room で話し合い	26	
		⑥振り返り	ディベートの反省・改善点を挙げ、議論を通して感じたこと、学んだことを振り返る	5	フォームをクラスルームにアップ
		⑦VTR 鑑賞	VOD『人権の夜明けのために～ローザ・パークスと池田大作～』を視聴する	17	**担任：共有画面で VOD を流す**
		⑧振り返り・まとめ	個人ワークシートに本時の感想を記入する	10	フォームをクラスルームにアップ
課　題		・1 試合目と 2 試合目の組み合わせは各クラスで決めてください。（試合進行はＧＣＰリーダーが担当） ・担任はブレイクアウトルームの作成、VOD の画面共有を行う。リーダーズのサポートをお願いします。			
講　評					

J）　ファイナル・プロジェクト（３年生）

■概要

2016 年度に、これまで各教科で個別に展開されてきた探求学習を統合し、教科横断型のプログラムを組めないかというアイディアが生まれ、全校対象企画の GCP で進めている探求学習の集大成として、「現代社会」と「英語表現」がコラボレーションした「Final Project」という企画が着想されました。

「Final Project」は 1・2 年生での GCP(Global Citizenship Project)の取り組みを通して興味・関心をもった分野を SDGs の 17 のゴールの中から一つ選び、探究活動を進めるものです。

GCP では、「2030 アジェンダ・SDGs」を活動の中心に据え、環境・教育・人権・紛争解決・核軍縮などをテーマに、1 年次より様々な企画に取り組んでいます。リンクマップ作りや貿易ゲーム、模擬国連や独自の教材などを用いて、地球規模課題や SDGs への関心を高めてきました。そして、3 年次に「現代社会」の授業内容とも関連させ、これまで学んできた SDGs の 17 のゴールの中から、自分がもっとも興味をもった分野からテーマを設定し、日本語と英語の二言語でポスターセッションを行う「Final Project」を進めています。取り組み内容の詳細は昨年度の報告冊子をご参照ください。

本年は、新型コロナウイルスの感染防止のため全校生徒が一か所に集まることを避けなければいけなかったため、さまざま検討した結果、各自がポスターセッションの様子を動画に撮り、それを「特設ホームページ」に掲載し、生徒・保護者向けに公開するというかたちをとりました。

■　ポスターセッションの動画の様子

■特設サイト

2020年度Final Project 特設サイト
ホーム · 1組 · 2組 · 3組 · 4組 · 5組 · 6組
2020年度Final Project 特設サイト
公開期間　2021年2月2日(火)~2月11日(木・祝)
クラス別 発表者ページ
1組
2組
3組
4組
5組
6組
多くの個人情報を含むため、このサイト及びポスター画像・発表動画を外部に漏洩したり、ダウンロード・スクリーンショット・画面録画等は絶対にしないでください。
動画再生や視聴には大量のデータ（パケット）通信を行うため、携帯・通信キャリア各社にて通信料が発生します。データ通信量が一定の基準に達した時点で通信会社での通信速度制限が行われることがあります。スマートフォンやタブレットでご視聴の場合は、Wi-Fi 環境でのご利用を推奨します。
個人 視聴リスト(感想・質問提出用)
2020年度 Final Project 視聴リスト
まんべんなくポスターセッションを視聴してもらうため、視聴する3年生を指定したリストを作成しました。
1~3年生のオーディエンスの皆さんは、公開期間内に、自分に指定された3年生の発表は必ず視聴し、「感想・質問 投稿フォーム」を一人1つずつ送信してください。
感想・質問　投稿フォーム

3.　グローバル・リーダース・プログラム(GLP)

A） 概要

コロナ感染症により、最終年となった GLP も、様々な点で、大きく変更を余儀なくされた。はじめに選抜方法である。3 年学校設定(2 年目)は、12 月に順調に実施されたが、2 年生選抜の二次試験が緊急事態宣言と重なった。このため、オンラインでの実施が前提となることを踏まえ、1次試験通過者全員を選抜対象とした。その結果、当初の予定人数から大幅に増やし、28 人として(3 年 9 人、2 年 19 人)6期 GLP をスタートした。また直接会えることができないことが長期化することもありうることから、フィールドワークやリアルでの出前授業の開催等を前提としないで、オンラインフォーラムを開催することをゴールに設定した。

開始時期も、大きく後ろ倒しされ、ずれ込んだ。例年、1回目のオリエンテーションを3月 18日ごろおこない、4月1回目までの課題を配布していたが、3月に開始できず、1学期の全校生徒がオンライン学習になれたころを見計らって 5 月より、オンラインで開始した。以降オンラインベースで授業を展開していった。

フィールドワークは最も大きな変化を伴った。当初広島・長崎での実施を予定していたが、これを広島女学院とのオンラインピースフォーラムに変更した。また海外との意識調査を及びプレゼンテーションをウェブリオ株式会社の協力を受けて、カンボジアの高生とオンラインでの交流を行う、オンライン・スタディーツアーに内容を変更した。また、これまでフィールドワークで行っていた大学研究機関の担当者の方による講演、被爆体験談などは、移動時間のないオンラインでの、各廃絶の専門家の方にインタビューを行うことができた。このオンラインを活用する試みは、来年度の GCIS での探究活動においても活用されている。

評価においては Google slide や Google form を活用して、それぞれがポートフォリオを継続し、個人の作成及び進路の確信度の確認を行った。一方「総合評価に客観性を持たせよ」とのご指摘を受け、資質能力を測定する AiGROW を一年生より先行して導入した。

その他、Google Jamboard や、Padlet の導入など、パイロットケースとしての取り組みを最後まで果たした。コロナのピンチを良き方向に導く手段、方便として新たな取り組みを導入できた。

終了によ,り、6年間の SGH の取り組みグループとしての GLP そのものは終了となるが、今後 2 年生 GCIS に置いて国際機関・NGO コースの各廃絶問題テーマグループに、その内容は継続されることとなっている

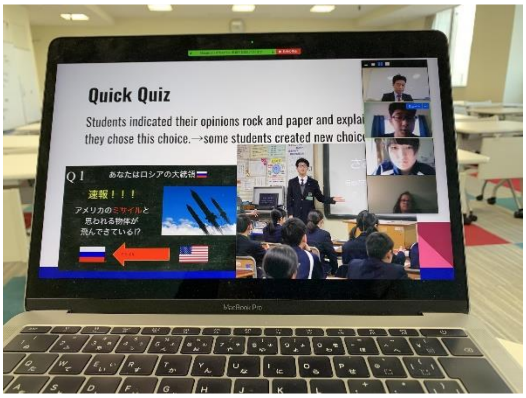
B）　クリティカル・イシューズ・フォーラム（CIF）オンライン

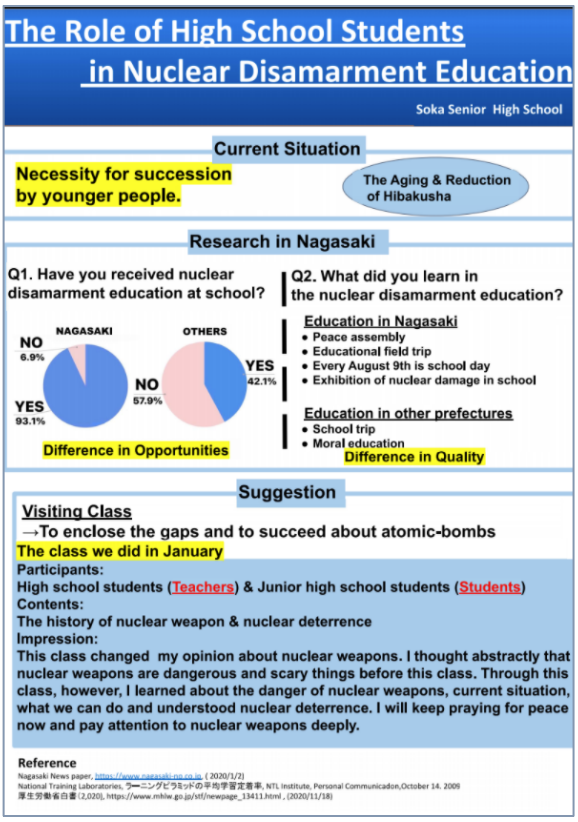
■要旨

3 月 26 日、新型コロナウィルス感染症対策のため、カリフォルニアでの開催が中止となっていた日米高校生による核廃絶発表会・クリティカルイシューズフォーラム(CIF)参加予定者による交流会が実施された。創価高校からは、1 年間核廃絶問題について学んできた GLP(グローバル・リーダーズ・プログラム)から、内田正城さん（3年）と熊谷琉夏さん（3年）が代表としてオンラインで参加しました。交流会では関西創価高校はじめ、広島、長崎の日本の高校生とアメリカの高校生が、それぞれの学校生活の様子や研究の進捗、さらには昨今のコロナウィルスの状況について意見交換しました。当日の模様は長崎 NHK でも放送された。また前日25 日には創価高校での研究内容について、ミドルベリー研究所の大学院生とのオンライン個別指導があった。アドバイスをいただいた大学院生からは、「青年による教育の重要性を感

じる、大変興味深い提案である」と意見が寄せられた。

創価高校発表テーマは「核廃絶における青年の役割　高校生による出前授業の有用性」であった。



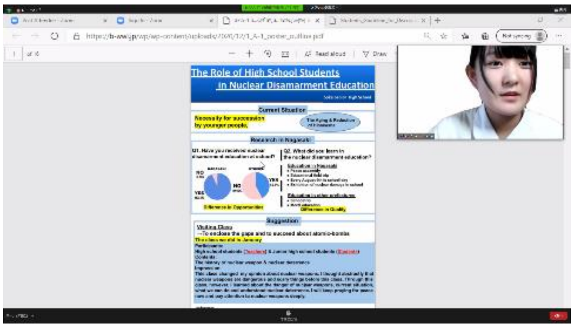


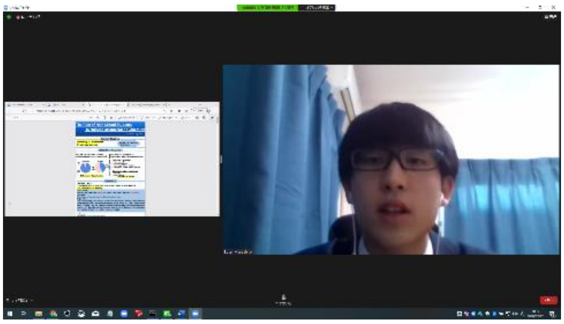
またこの内容は、12月20日に、2020年度　全国高校生フォーラム（主催：文部科学省・筑波大学）でも、各校が準備する4分間の英語プレゼンテーション動画として選出された。

フォーラム当日は、筑波大学・東野篤子教授のファシリテーションのもと行われた同フォーラムの分科会がおこなわれ、創価高校は、「格差のない社会をめざして」をトピックにしたグループに参加。9校の代表生徒と意見交換を英語で行われた。

◆ 参加生徒感想

「同年代の高校生が解決に向けて具体的な実践をしていること知り、とても感化されました」。「他校との交流を通して、多くの国際的課題が存在し、相互に影響を与え合っているということを学ぶことができました」。





◆ 創価高校発表内容概要

日本語テーマ 日本の核教育における高校生の役割
日本語要約 現在 1945 年に起こった原爆での被爆者は高齢化また年々減少してきている。そのため、日本の若者、特に高校生が原爆の歴史を継承する必要がある。私たちは、『核教育の差異は被曝地域とその他の地域で存在する』と問いを立て、長崎に調査を行った。結果、機会内容の差異があることが分かった。私たちはその核教育格差を埋めるために、出前授業というのものを提案する。実際に中学生に行った出前授業の結果や改善点を紹介する。
英語テーマ Title (20 words) The Role of Education and to Address the Sense of Crisis for Nuclear Weapons
英語要約 Outline (100words) We propose that conducting special lectures designed by high school students to the younger generations will be of help to stimulate the younger generation's motivation of nuclear disarmament issues. Nowadays, there are several opportunities to learn/know about nuclear weapons in Japan. However, the places that conduct peace studies including issues on nuclear weapons have been limited: Hiroshima and Nagasaki are the champions. Thus, most current young people in Japan have few opportunities to know what actually happened in the history of nuclear weapons. The role of the youth is to teach nuclear weapons to the next generation.

C) フィールドワーク 広島 オンライン交流会

■要旨

核廃絶教育を通じて交流を行ってきた広島女学院と、地球規模課題解決にむけた問題意識を高めることを目的に、オンラインで平和フォーラムを開催した。当日までには、一度、オンラインにて自己紹介や発表内容の紹介をした上で、11 月 24 日の本番に臨んだ。

全体挨拶・流れの説明に続き、今回のフォーラムのメインテーマである「『私たち』を増やすために ～核廃絶問題について友に語り掛けるときの第一声を考える～」を改めて共有した。その後、Zoom ブレークアウトセッション機能を活用し、両校7名程度のグループセッションにて、小グループで交流した。

小グループではアイスブレイクを行った後、創価高校の生徒はグループごとに核廃絶に関しての研究発表を行った。「日本において核兵器が過去の脅威でとどまってしまっているのはなぜか」、「今の高校生は、上の世代に比べて核兵器問題に対する知識や関心が薄れているが、その原因は家庭の中だけではなく、教育現場にも存在するのだろうか」などのテーマで発表した。

その後、両校生徒によるディスカッションに移り、メインテーマを念頭に、核兵器廃絶へ行動する人を増やすためにできることは何か、活発に議論を交わし Google スライドにまとめた。ディスカッションを終えると全体のメインセッションに戻り、各グループの代表が話し合った内容の報告を行った。最後に、教員のあいさつ、記念撮影を行い、平和フォーラムを終了した。

◆ 参加生徒感想

「核兵器廃絶問題は明るい未来を作るために話すことだから、明るく話しかけていいのではないかというものがあり、共感できた。」

「他校の人たちの意見に触れたことで自分の視野が広がっていった気がする。また、こうした問題に真剣に向き合っている高校生は他にもたくさんいるんだという心強さももらえた。」

「とても有意義なディスカッションになった。また広島女学院の皆さんは、核兵器に対する問題意識がとても高かった。さらに私達とは違う意見を持っている人も多く、私は新たな視点を得ることができたと思う。」

D)　小平市へのアクションプラン提案

■ 要旨

小平市教育委員会の方々にご協力いただき、3 年の GLP 生でアクションプランを提案する授業を行いました。この取り組みは、2021 年度 GCIS の取り組みの先行事例として実施しました。

■ 事前学習「ソーシャルチェンジ」

小平市との探究活動の実施を前に、教材として、「ソーシャルチェンジ」(教育と探究社発行)を用いて探究活動をおこないました。ソーシャルチェンジとは、自ら課題を設定し、その解決を探究するプログラムのことです。身近な問題から地球規模課題まで、さまざまな問題について、グループで探究活動を行いました。本年度は今後の GCIS の取り組みへの先行事例として、GLP・学校設定科目の時間を活用して行いました。

導入として、「学校をギネスブックに載せるには？」という論題について、アイディアの発案を行いました。例としては「先生のいない学校」といったものから「全員でけん玉を成功させる」などユーモアの溢れるものまで、さまざまな意見が出ました。深く議論はしませんでしたが、探究学習に取り組む上で、他者と協力してアイディアを生み出すマインドを学びました。

次に、"困っている人"を助ける方法をグループで考えました。まず、チームで助けたい"困っている人"をたくさんあげ、なぜその人を選んだのかをグループで共有した後、1 番助けたい人を 1 人に絞りました。次に、「困りごと」が起きる原因や、その原因が起きる原因を限界まで掘り下げ、これらをもとに、助ける方法を考えました。最後に、全体で発表を行い、他グループからの改善点や質問などを受けました。

● 授業の流れ

7/7	探究学習:学校をギネスに載せるには？ 概要/発案、共有
7/14	探求学習:困っている人を助けるには？ 概要/発案、議論
7/21	番外:チェンジメーカーについて学ぶ
8/25	探究学習:困っている人を助けるには？　概要/内容推敲
9/8	探究学習:困っている人を助けるには？ 概要/ポスター作成
9/15	探究学習:困っている人を助けるには？ 概要/研究企画プレゼンテーション

◆ 生徒感想

「ソーシャルチェンジに関わる話し合いの中で、誰かに何かをするとき、例えば今回のような計画をするなら「対象を明確化する」ことが大切だと考えました。こうしない場合ケースバイケースであり、状況によるという話が目立つように感じました。そして、話し合った内容を深めるために調べ物をすると、話し合ったことと似ている内容を団体が行っていたり、議論で問題として挙げていた点が載っていたりしたため、実際に計画をするときにもこのような議論が行われていると実感することもできました。」

「探究学習の『”困っている人”を助けよう』で、”困っている人”をあげる時、そのような人は身近にも、テレビや新聞にも、たくさんいるということ、また彼らを助ける方法も簡単なものもあれば、逆に難しいものもあると感じました。この作業を通して、”困っている人”は本当に困っているのか、困っている基準は何か、などと疑問も生まれました。困っている原因を限界まで掘り下げる作業は私たちにとって大変なことでしたが、新鮮で楽しかったです。困っている人を本当に笑顔にする企画を考えるために、物事を多角的に見る大切さ、仲間と企画を磨き合う楽しさを学ぶことができました。」

■ 生徒作成ポスター例

■ 小平市へのアクションプラン作成

まず、全員でのディカッションによりテーマを決定。市の教育政策に目を向け、コミュニティスクールについて調べてプランを作成することにしました。コミュニティスクールについての問いをグループ内で立て、実際に小平市教育委員会の方々へのインタビュー事項を決めました。

11 月 10 日に小平市教育委員会の方による出前講座(デリバリーこだいら)を受講しました。受講後に小平市の現状の課題を整理し、解決策をグループごとに考えた後、各グループの内容を共有し、プランのブラッシュアップを行いました。集大成として、考えた解決策をパワーポイントにまとめ小平市教育委員会の方々へのプレゼンテーション動画を作成しました。教育委員会の方々からもアクションプランに対するさらなる提案や疑問点など、多くのフィードバックをいただきました。

（デリバリーこだいらでの質問）

・コミュニティスクールにしたことによって、学校が地域にもたらすメリットは何か

・教師の仕事は増えないのか

・郷土愛に変化はあるのか　など

● 授業の流れ

9 月 29 日	デリバリーこだいらの受講講座決定
10 月 6 日	コミュニティスクールについての疑問や問題点を話し合う
11 月 10 日	出前講座を受講・コミュニティスクールの課題点について話し合う
11 月 24 日	コミュニティスクールの課題に対してのアクションプランを話し合う
1 月 19 日	プレゼンテーションの準備
1 月 26 日	プレゼンテーション本番（zoom を活用し録画）
2 月 2 日	フィードバック

◆ 高校生徒感想

「自分達自身が生活している地域社会に対して、批判的思考のもと、見つけた課題に有効な改善策を提示することは、とても困難を極めました。実際に私たちが考案した改善策が、現状のコミュニティスクールの課題を解決に導く可能性は小さいものかもしれません。しかし、ディスカッションを続けていく中で、コミュニティスクールの運営に、高校生考案の策を投げかけることは、両者にとって新しい価値を生むことに繋がるのではないかと考えます。また、この機会を通して、学校と地域社会による充実した教育環境作りには、小平市以外の他の地域ではどのような違いが見られるのか、などについて興味を持つことができました。これから高校を卒業した後も、生涯に渡って、探究は永久に続いていくと思います。よって、今回感じた、大規模な課題を発見したときに、現実に即した課題から着手し、探究を進めていく、ということを大切にしていきたいと思います。このような学びの機会を企画してくださった GLP 担当の先生方をはじめ、出前講座として創価高校にわざわざ足を運んでくださった小平市教育委員会の方々に心から感謝申し上げます。」

E） 評価と分析

■ 客観的評価

GLPの活動の評価方法として、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させる取り組みを、これまで3年間

実施してきた。しかしながら、「客観的評価に欠ける」とのご指摘をいただき、実際の業者か使用している評価を導入することで、生徒の資質能力の変容を可視化するように努めた。また、コロナ感染症により、直接「会えない」ために、心理的安全性を担保しなければ、よりよい相互評価の結果が出ないと判断した。そこで、IGS 株式会社の実施する Ai GROW を用いて資質能力を測定し、多角的で定量的な手法に基づき、客観的な評価を行った。質問項目においては、本校の SGH でも使用されている「創価学園の育てたい資質能力」に基づき、15のコンピテンシー項目が設定され、それぞれがスコア化された。

IGS 社によれば、Ai GROW は、「3,800 万件を超える評価データを基に個人の資質・能力を分析する評価ツールで、潜在的な性格の他、相互評価と AI による補正によってコンピテンシーを正確に評価・分析することが可能となる。これにより、自己の強みと課題を客観的に把握することができ、将来のキャリアを具体的に考えるきっかけとともに『自己肯定感』の向上にもつながる」。

■ 獲得させたいグローバル人材の資質・能力一覧

【認　知】	疑う力	【他　者】	影響力の行使
	論理的思考力		寛容力
	創造性		柔軟性
	課題設定		共感・傾聴力
【自　己】	決断力		表現力
	耐性	【コミュニティ】	組織へのコミットメント
	自己効力		地球市民
	個人的実行力		

【調査実施時期】

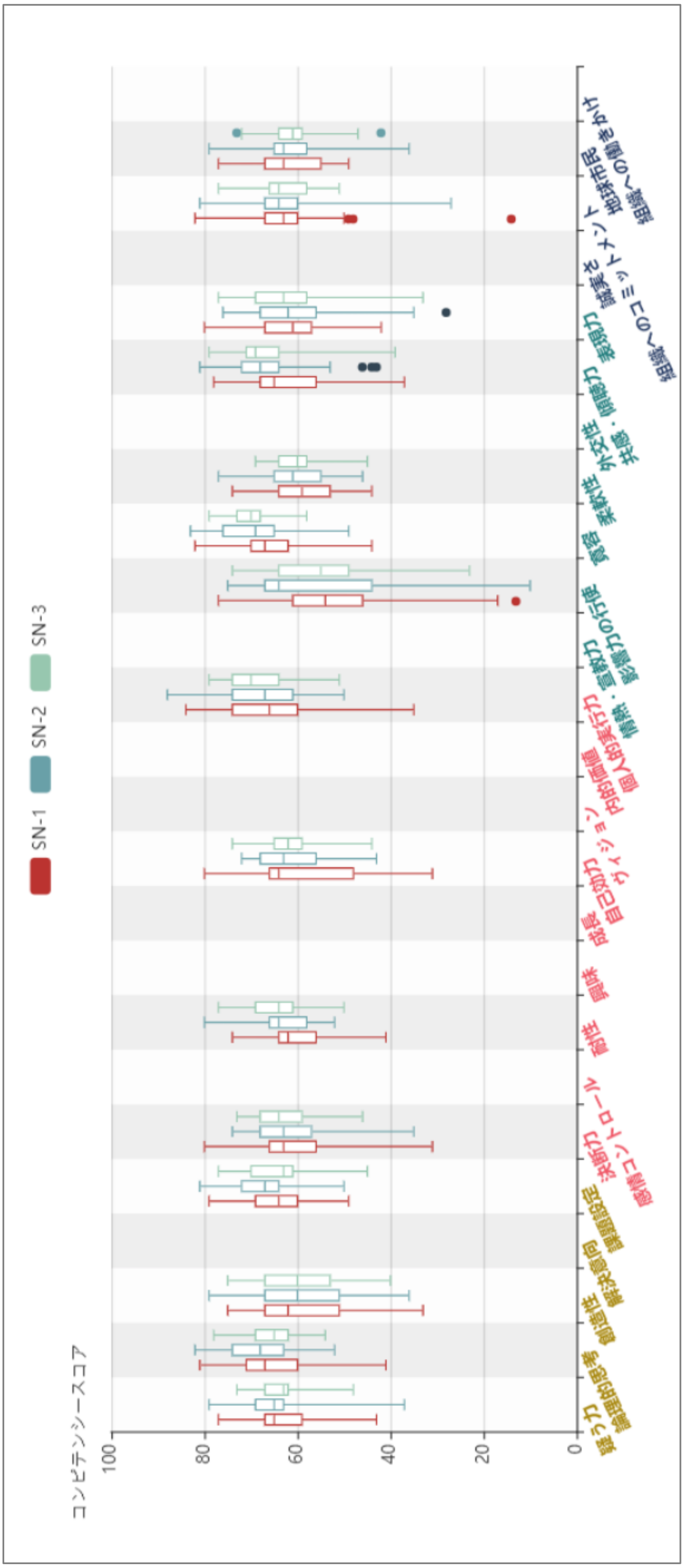
3回行われた

①2020年7月：GLP　1学期の活動（約2か月）の終了時。同学年の間での相互評価

②2020年12月：GLP　核廃絶問題探究のグループ別活動終了後。3か月間探究活動を行った4人グループ間での相互評価

③2021年3月：GLP　修了時。オンラインスタディツアーの4人ごとのグループでの相互評価

表 2. Ai GROW の 3 回分の変容



汎用
SN-1 2020年7月
SN-2 2020年12月
SN-3 2021年3月

【分析】

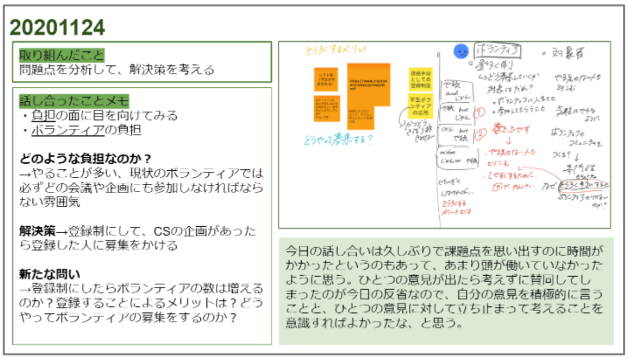
今回実施した15のコンピテンシーは、非常に高いスコアを示した。学期当初より全国的な平均スコアよりも高くなっている。12月の実施では、ほぼすべてのスコアで向上が見られる。とりわけ「疑う力」と「論理的思考力」の認知の要素と、「共感・傾聴力」「寛容」の項目での向上が堅調であった。これはテーマ別で核廃絶問題についてのグループ別探究を行った直後であり、論理的な深まりとチームワークが高くなったことが主な要因と考えられる。

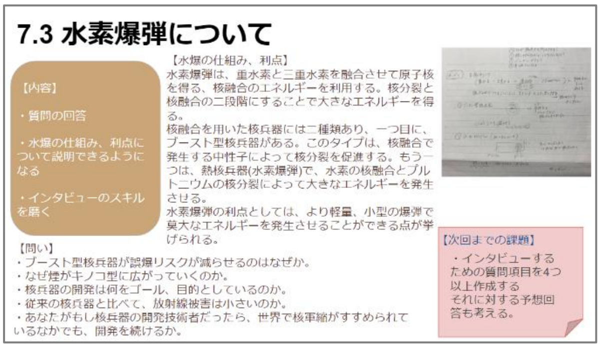
第3回は、全体として下がり気味の傾向があるが、これは5回行われ授業のうち4回が「オンライスタディツアー」の運営となり、その際に、カンボジア生徒の英語力フォローをどのようにするかという工夫が先行し、認知のコンピテンシーよりも、「表現力」の項目や、12月の第 2 回実施ですでに向上していた「寛容」の項目に上昇がみられた。また全体、りわけ「組織へのコミットメント」「地球市民」の項目において、上位と下位の分散が小さくなってきたことは、GLP 全体として高いコンピテンシーをもつ集団になったと推察される。

■ 自己評価

自分自身の振り返りとして、google スライドを利用して、ポートフォリオを毎回の授業で記載することを課題として設定した。1回1枚以上の条件で設定したが、最終的に30枚を超えるシートを概ね記載することとなった。CWC 担当教員により、言語技術「報告書の書き方」のオンライン講義を実施。その際に、報告書の中には、事実・考察・所感・疑問を必ず書くことを学んだ。GLP では特に「疑う力」と「論理的思考力」の向上に重点を置いており、「報告書の書き方」の内容を踏まえて、「学んだ事」「気づいた事」「生まれた疑問」を記載することを求めた。

■ 生徒ポートフォリオの例





4. 言語技術

A） 概要

「言語技術」とは、「議論する（話す・聞く）技術」「読解する（読む）技術」「作文する（書く）技術」「思考する（論理的思考・批判的思考の）技術」といった、言語をより有効に運用するための技術のことです。世界の多くの国々では、この「言語技術」が、各言語の「母語教育」として、小学校から高校まで体系的に教えられています。つまり、世界には発想・表現方法に共通的基盤があり、議論や交渉などは、それらに基づいて行われているということです。まさに「言語技術」は、言語を運用する上での「世界標準」であり、世界の多様な人々と議論を交わし、グローバルに活躍するための必須の能力だと言えます。本校では、グローバル人材像の資質として、「地球規模課題（Global Challenges）の解決に貢献する能力」を有することを定めていますが、この能力の基盤には、コミュニケーション能力や論理的・批判的思考力が欠かせないとしています。「言語技術」の導入は、まさにそれらの力を鍛えていくことを目的としています。本校では、つくば言語技術教育研究所所長の三森ゆりか氏が開発した「言語技術」教育のプログラムをもとにし、同氏から指導・支援を受けながら、「言語技術」教育を実施していきます。

「言語技術」の授業では、まず日本語でトレーニングを行い、同じ内容のトレーニングを英語でも行うという往還学習を実施します。この往還学習は、言語間の共通点や相違点を認識することで、「言語技術」習得の効率性を高めるという本校独自の取り組みです。この取り組みによって、日本語の言語能力の向上はもちろんのこと、各言語共通の「言語技術」の獲得は、外国語習得の効率化、及びその運用能力の向上を促進すると思われます。このようにして鍛えられた言語運用能力は、全教科における生徒一人ひとりの学習理解を促進し、実社会・実生活の営みも、より充実したものにしてくれるはずです。この「言語技術」の授業を通し、世界に通用する言語運用能力を備えた人材を、本校は育成していきます。

■ 昨年度との相違点

①5月18日～6月26日と1月18日～2月22日の期間がオンライン授業でしたので、ZOOMでの双方向授業を実施しました。

②使用するテキストは、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」から、同研究所の「言語技術のレッスン　速習版」に変更しました。

③高校2年では、2学期に新しく「報告」のレッスンを実施しました。目的、相手に応じて報告の内容、情報の並べ方、まとめ方が変わることを学習しました。

■ 年間スケジュール

2020年度 高校1年生 言語技術計画

1学期

1	・言語技術とは何か ・問答ゲーム（好きか嫌いか） ※オンライン
2	・問答ゲーム（ナンバーリング、選択） ※オンライン
3	課題配信 言語技術jに関する資料を読んで ※オンライン
4	【英語】・問答ゲーム（好き嫌い、ナンバーリング） ※オンライン
5	【英語】課題配信（映像：5W1Hを使った質問の作り方） ※オンライン
6	・授業ガイダンス ・問答ゲーム（好き嫌い・ナンバーリング・選択・賛成反対）
7	【英語】・問答ゲーム（好き嫌い・ナンバーリング・リアクション・選択・賛成反対）
8	・問答ゲーム（5W1Hで質問を返す・相手の応答の正しい掘り下げ方、2往復3往復の問答）

2学期

1	・問答ゲーム（5W1Hで質問を返す・2往復・3往復） ・5W1Hを意識した例文添削
2	【英語】・問答ゲーム（5W1Hで質問を返す・2往復・3往復）
3	・事実と意見の区別 ・論拠の確認
4	【英語】・事実と意見の区別 ・論拠の確認
5	・パラグラフとは何か ・パラグラフの構成要素（TS、SS、CS） ・作文課題（優先席、電子辞書）
6	・作文課題（コンビニ24時間営業） ・TSを支えるSSの作り方 ・作文課題をリライトする
7	【英語】・英文パラグラフ ・文と文をつなぐ表現(linking words)
8	・作文内容の素材集め ・SSの掘り下げ ・作文課題（自分で自由にテーマ設定）
9	・TSの性質を確認 ・TS作成の実践
10	【英語】・英文パラグラフ② ・論理構成 ・TS作成の実践
11	・マッピング ・作文課題（自分の性格・特徴を紹介）
12	・パーソナルエッセイの書き方（複数のパラグラフで文章を書く・素材集め・TS作成）

3学期

1	・説明の技術①（情報の整理分類、ラベリング） 【キャンプの持ち物・会議の持ち物】
2	・説明の技術②（時間配列の原則） 【ピザトーストの作り方】 ※オンライン
3	・【英語】時間配列の原則【カレーライスの作り方】 ※オンライン
4	・説明の技術③（概要から詳細） 【机の並び方・道案内】 ※オンライン
5	・説明の技術④（空間配列の原則） 【カバンの描写・ペンケースの描写】 ※オンライン
6	・1年間の振り返り（問答ゲーム・1年間の振り返り）

2020年度 高校2年生 言語技術計画

1学期	
1	ガイダンス
2	描写1
3	描写2
4	イラストの分析
5	絵画の分析1
6	絵画の分析2
7	詩の分析1
8	詩の分析2
9	小説の分析1
10	小説の分析2
2学期	
1	絵本の分析1(読み合わせ)
2	絵本の分析2(扉絵～前半)
3	絵本の分析3(後半)
4	絵本の分析4(すずめ)
5	絵本の分析5(分析の執筆)
6	報告1(英会話スクール)
7	報告2(事故の報告)
8	報告3(インタビュー準備)
9	報告4(インタビュー実施)
10	報告5(インタビューまとめ)
3学期	
1	ディベートとは
2	ディベート準備(立論作成1)
3	ディベート準備(立論作成2)
4	ディベート実施1
5	ディベート実施2(振り返り)

B) 学習・トレーニング内容

2020年度は1学期と3学期にオンライン授業の期間がありました。はじめに、その期間中の言語技術の授業の実践をご紹介いたします。

【1年生】

5月18日～6月26日のオンライン授業期間では、日本語2回・英語1回のZOOMによる双方向授業、日本語1回・英語1回の課題配信を実施しました。授業内容は、授業時間が45分であることと、オンライン操作に伴う時間ロスを想定した結果、当初の計画に従いつつも、内容を若干削減したものにしました。

まず言語技術とは何かということを丁寧に説明し、言語技術への理解を深めてもらいました。そして、日本語・英語ともに、対話の技術の基本トレーニングである「問答ゲーム」を、ZOOMのブレークアウト機能を用いて繰り返し実施しました。ブレークアウトに分かれると、共有画面が見られなくなってしまうので、問答ゲームの質問項目を、チャットに貼り付けたり、ブロードキャスト機能を使って生徒が確認できるようにしたりしました。最後はGoogleフォームで振り返りを提出してもらいました。振り返りは、その日の授業でなるほどと思ったこと・大事だと思ったことを、80字以内・2文構成・接続詞で2文をつなぐ、という条件で書かせました。また、疑問に思ったことを記入できるようにもし、それらの疑問には次の授業で答えるようにしました。

1月18日～2月22日のオンライン授業期間では、日本語3回・英語1回のZOOMによる双方向授業を実施しました。当初の計画に従い、説明の技術をトレーニングしました。よりよい説明の仕方を個人で考え、ブレークアウト機能でペアに分かれ意見を交換したり、スプレッドシートを共有して、全員に意見を書き込ませ、全員が全員の意見を見られるようにしたりしました。他には個人・ペアで考えた内容をチャットに書き込んでもらったり、グループごとに話し合った内容をジャムボードに書き込んでもらったりもしました。

最初は教員側が操作に慣れず、時間ロスをしていた部分もありましたが、回を重ねるごとにスムーズな授業進行ができるようになり、対面での授業とあまり変わらない進度で実施することができました。

【高校2年】

4月第1回目のオンライン授業では、自ら思考して「1年次における言語技術の学習内容」を振り返ることができるよう、以下の A・B のいずれかを選んで、400 字~800 字の 1 パラグラフの文章を書いて、提出をすることを課しました。

A:自分で参考書籍を1冊選び、1年生の言語技術の授業で学んだ(説明・作文など)情報伝達の技術を振り返り、本の内容と対照させながら、「分かりやすい**(表現、説明、作文、プレゼンテーション、議論)とは」について簡潔にまとめる。

B:1年生の言語技術の授業で学んだ(説明・作文など)情報伝達の技術について、保護者と話し、実際の仕事・社会生活で活かせる場面やその際の留意点について聞き取り、簡潔にまとめる。

5月に入ってからは、4月に提出されたものからよく書けているものをモデルとして紹介し、以下のチェックポイントを示し、各人の書いたパラグラフの書き直しを課しました。

チェックポイント:

1. Aの場合は『正確な書籍名』、著者、出版社を明記しましたか？ Bの場合は、漠然と「保護者に聞いた」ではなく、例えば「IT 企業に勤務の父」「スーパーで働いている母」などと具体的に書いていますか？
2. 冒頭に、もっとも伝えたい事を、簡潔に書くことができましたか？
   効果的なトピックセンテンスを意識しましょう。読み手が、冒頭を読めば、全体の見通しが立つようによく練ってください。
3. アイデアが大きすぎる、または、誰でも言えそうなことになってしまっていませんか？ 今回の

課題は、個人の読書または各人の保護者との対話に基づく「個性が出る」課題でした。「対話の技術が大事」「ナンバリングが大事」くらいのことは誰でも言えますから、もう少し掘り下げて欲しいです。（＝対話の技術の、何が大事なのか。ナンバリングがなぜ大事なのかを豊かな言葉で述べて欲しい）「私（と家族の対話）だから言えること」が浮かび上がるような、エピソードや具体例があるとより良いです。

4．論理に飛躍がありませんか？　また、無駄な言葉があれば、それを削って、すっきりさせましょう。

5．文体（です、ます　OR　だ、である）が統一できていますか？　また、話し言葉が混じってしまっていませんか？

以上の5つを自分で検討するだけではなく、1人以上の家族や友人に、自分の作文を読んでもらい、助言してもらいましょう。

1月18日～2月22日のオンライン授業期間では、教員・生徒ともにツールの利用に熟達してきたこともあり、教室でリアルに実施したであろう内容（ディベートの準備・実施）を計画通し実施することができました。

それでは各学年の学習・トレーニング内容を紹介してまいります。

【1年生】

1年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

①「対話」のトレーニング
②「作文」のトレーニング
③「情報伝達」のトレーニング

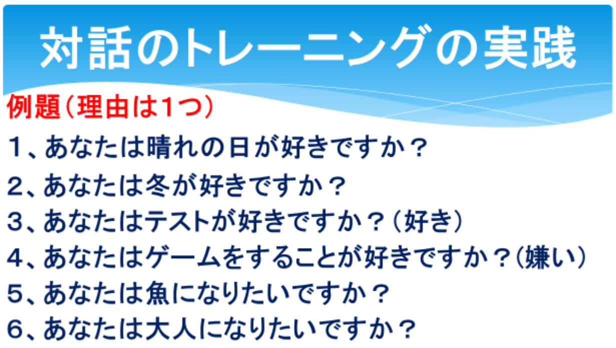
以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン　速習版」を使用しました。

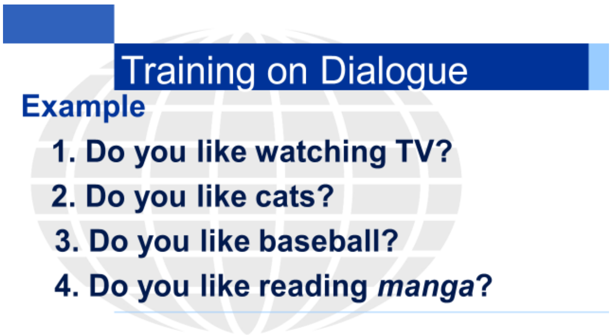
①「対話」のトレーニング

「対話」のトレーニングでは、(1)「問答ゲーム」、(2)ナンバーリング、(3)質問の分解、(4)論拠の確認、(5)「事実」と「意見」の区別を行いました。

(1)「問答ゲーム」

「対話」のトレーニングでは「問答ゲーム」を中心に行います。「問答ゲーム」は「対話」の技術のトレーニングの基本であり、「言語技術」全体の最も基本となるものです。2人1組となり、簡単な質問と応答をゲーム形式で繰り返します。「好きか嫌いか」という簡単な質問から始まり、「どちらが好きか」「どちらになりたいか」という選択を迫る質問、最後は「賛成か反対か」といった高度な質問まで行います。応答の際に「好き」や「賛成」など、あらかじめ立場を限定して答えさせ、自分の考えとは逆の立場に立って考えさせることも行いました。日本語で「問答ゲーム」を行った後には、中学導入レベルでの簡単な英語による「問答ゲーム」を行います。

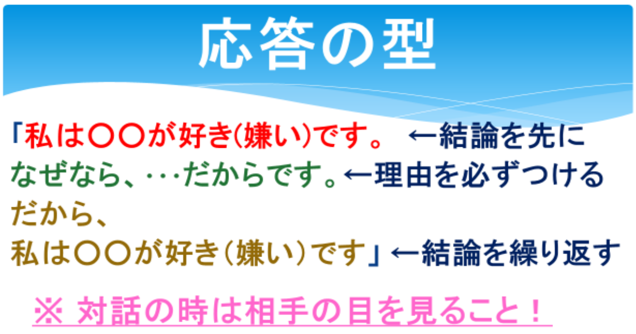




発言の際は、以下のルールを必ず守って行います。

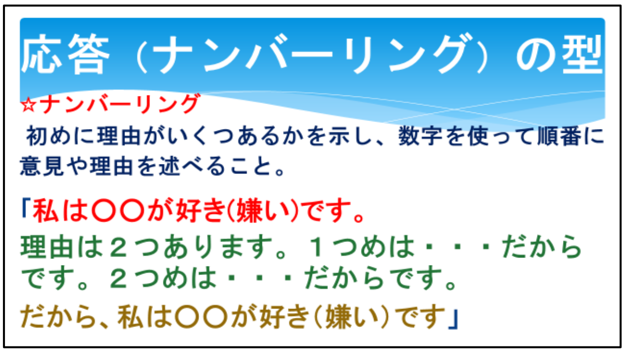
・結論をまず先に述べ、その後に必ず根拠をセットにして言う。
・発言の最後に結論を繰り返す。
・主語・目的語を省略しないで話す。
・質問に対して直接的・具体的に答える。

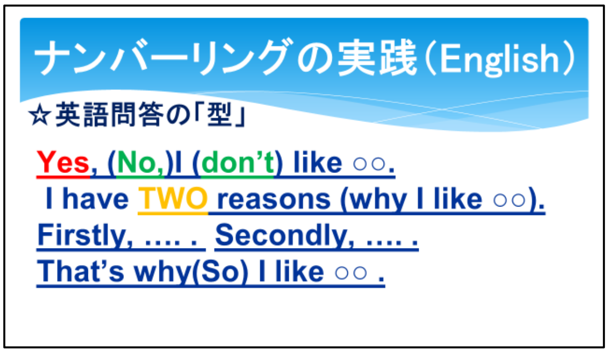
上記のルールに則ったものを「応答の型」として、繰り返しトレーニングし、体に染み込ませていきます。また、英語の「応答の型」も同様にトレーニングしていきます。

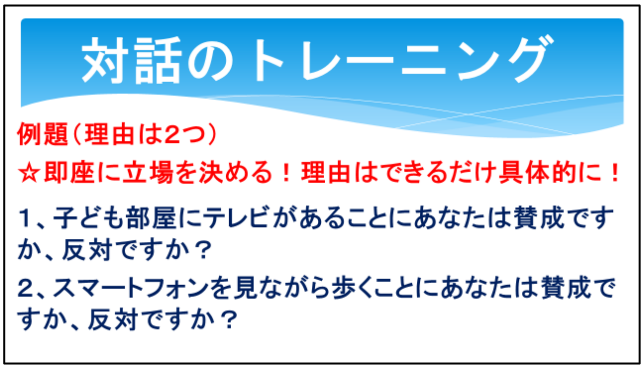


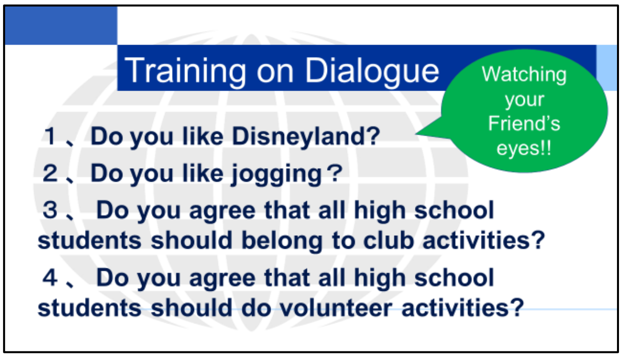
（2）ナンバーリング

理由が複数個ある場合は、ナンバーリングの技術を用います。ナンバーリングの型を日本語・英語それぞれで覚え、「問答ゲーム」で繰り返しトレーニングをします。





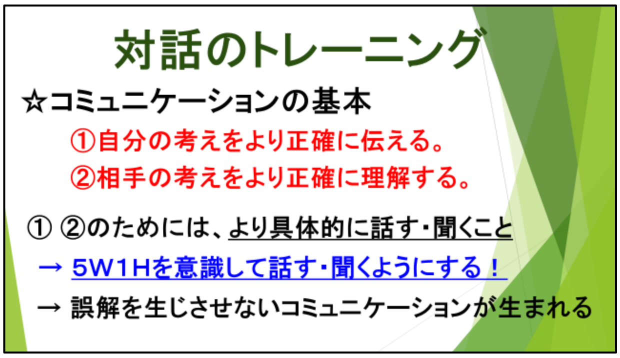


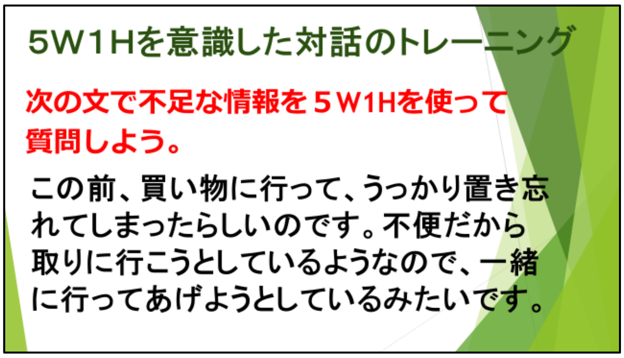


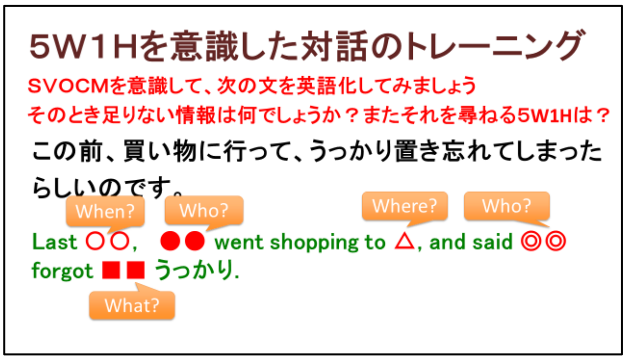
（3）質問の分解

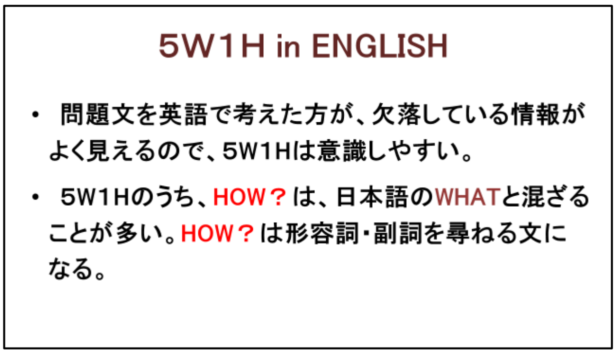
内容の濃い対話のために、相手に情報を伝える時は5W1Hをもとに、落ちている情報がないかどうか常に意識して話を組み立てます。また、相手の話を理解するために5W1Hを軸に、不足している情報がないかどうか常に意識して聴き、質問を分解（ブレイク・ダウン）して聞き返します。「質問→応答」の1セットで終わっていた「問答ゲーム」を、「質問→応答→質問→応答」と2セット、3セットと往復して行うようにします。このとき、話題を掘り下げていくような質問をすることを意識し、話題が拡散しないようにさせます。

複数回の往復の「問答ゲーム」をする前に、下に示した5W1H が抜けている例文をもとに、5W1H を補うトレーニングもしました。





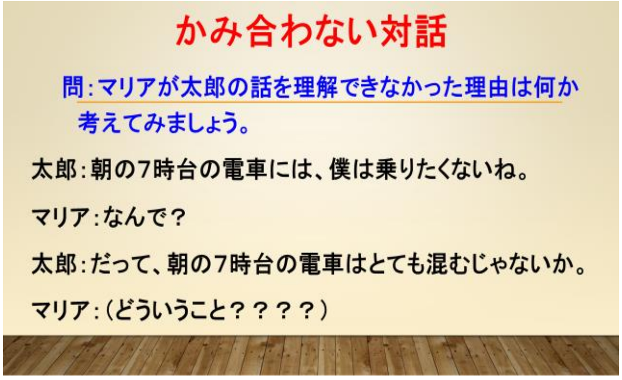


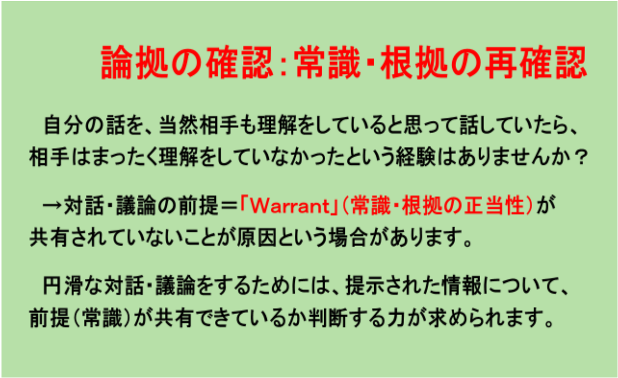


（4）論拠の確認

対話をしている時、相手の発言が、ある「常識」を前提としてなされる場合があります。この「常識」が共有されていないと、対話がかみ合わなかったり、後に問題を引き起こしたりします。よって、対話をしている際には、相手の発言の陰に潜んでいる「常識」に注意していく必要があります。そして、潜んでいるとしたらどのような「常識」が隠れているのか気づけるようにトレーニン

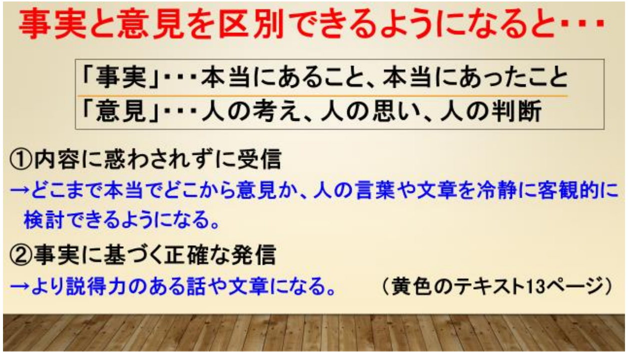
グをします。

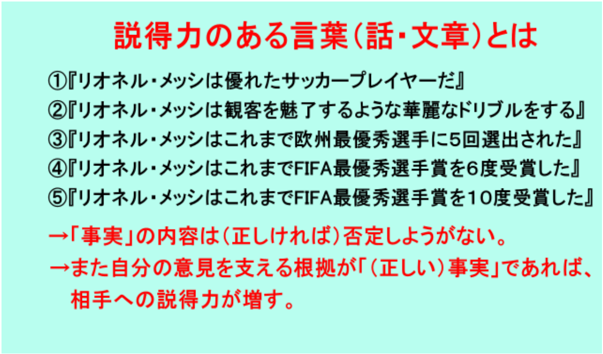


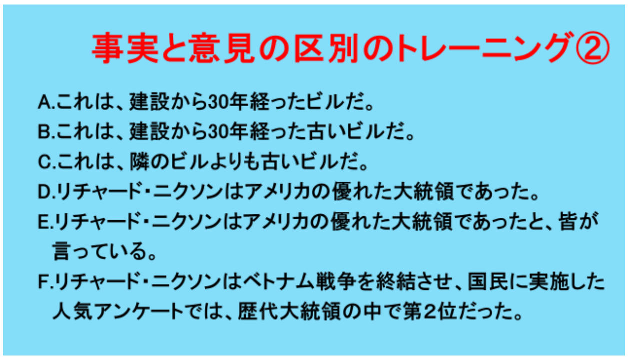


（5）「事実」と「意見」の区別

話したり聞いたりするとき、「事実」と「意見」を区別することができれば、中身に振り回されることなく情報を得ることができ、正確な情報を発信できるようになります。まず、短文を「事実」か「意見」か区別するトレーニングを行いました。その後、「事実」と「意見」が混ざった文を区別するトレーニングを行いました。







Fact and Opinion in English

1. Blue is the prettiest color.	F / O
2. Sarah went to the store on Monday.	F / O
3. A camel is a mammal.	F / O
4. Spinach tastes great.	F / O
5. Everyone should go to the movies on Friday.	F / O
6. Theresa's dog is a poodle.	F / O
7. Bears are very interesting.	F / O
8. Jake is the best baseball player.	F / O
9. George Washington was the first president of the United States.	F / O
10. Picnics are better in the summer.	F / O
11. Soccer is a dumb game.	F / O
12. The earth has a north and south pole.	F / O
13. Cheetahs can run faster than horses.	F / O
14. George Washington was the greatest president of the United States.	F / O
15. Red shoes are better than white shoes.	F / O
16. Tuesday comes after Monday.	F / O
17. Spiders are creepy.	F / O
18. January is the worst month of the year.	F / O
19. Dogs have a better sense of smell than humans.	F / O
20. Halloween is in October.	F / O

②「作文」のトレーニング

「作文」のトレーニングでは、（1）パラグラフの構成と作り方、（2）説得力のあるサポーティング・センテンスの作り方、（3）トピック・センテンスの作り方　の3項目を行いました。

（1）パラグラフの構成と作り方

パラグラフと、日本でいうところの「段落」との違いに着目させ、パラグラフの構成要素を学びます。社会に出て求められる意見文や報告文の文章は、パラグラフ形式で書かれた文章であ

ることを教えます。また、英語をはじめ欧米の言語は、基本的に文章をパラグラフで書くことが決まっており、外国語の文章を読み書きする時にとても重要になることを伝えます。

パラグラフの構成要素と作り方

・トピック・センテンス（TS） →主張・話題を述べる。基本的に第1文目に置かれます。

・サポーティング・センテンス（SS） →TSに対し根拠・例示などを付け加える複数の文です。

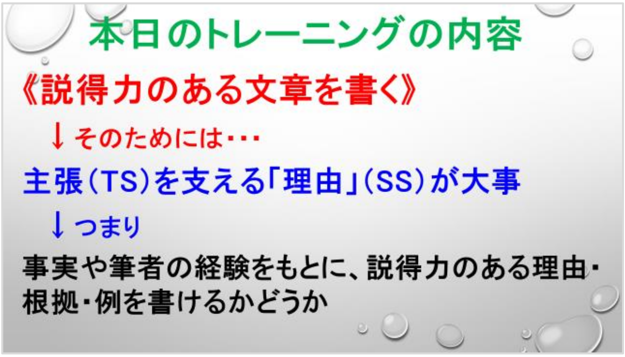
・コンクルーディング・センテンス（CS） →再主張して締めくくる文。基本はTSを繰り返します。

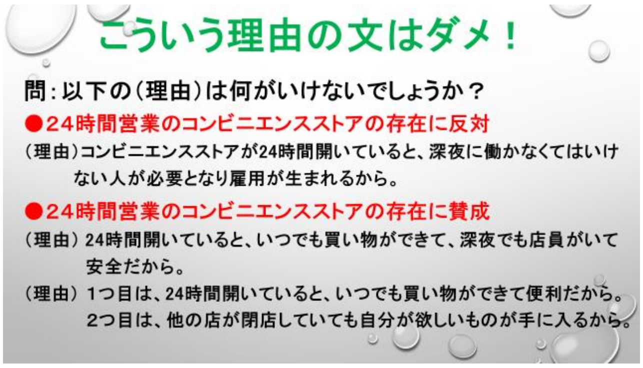
・TS、SS、CSを改行せずにひとつなぎで書く（＝パラグラフ）

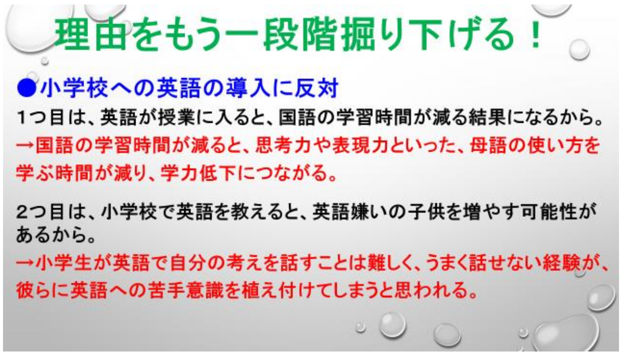
→「対話」の技術における、発言の際のルールに従った「応答の型」をひとつなぎで書けばパラグラフになります。

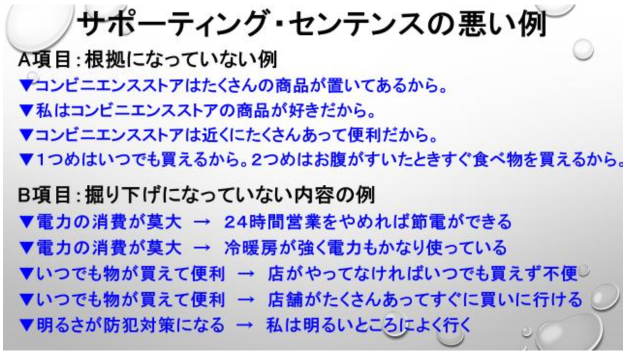
（2）説得力のあるサポーティング・センテンスの作り方

トピック・センテンスの内容が説得力を持つよう、サポーティング・センテンスでは定義・説明・事例・根拠などを記述してトピック・センテンスを支えます。まず大前提として、サポーティング・センテンスがトピック・センテンスの内容から絶対に逸脱しないようにしなければなりません。また、サポーティング・センテンスを事実や自身の経験をもとに書くと説得力が増すことを学びます。さらに、自分の主張を支える理由・根拠が、相手からしてみると不十分で納得できない場合がありますので、挙げた理由・根拠を5W1H で掘り下げるトレーニングをします。理由・根拠を5W1Hで掘り下げるトレーニングでは、以前に自分が書いた意見文を掘り下げさせ、書き直しをさせることで、説得力のつけ方を実感してもらいます。



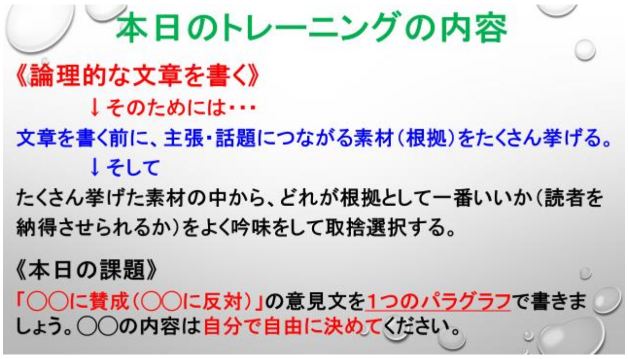


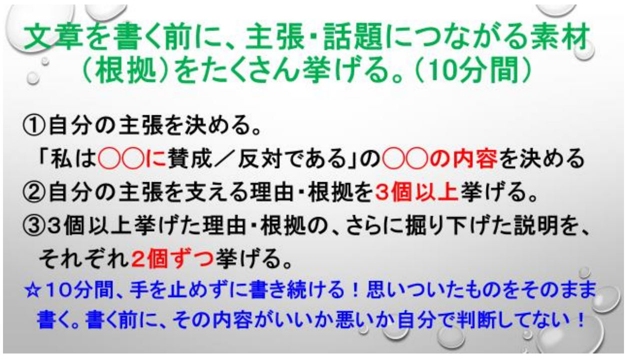


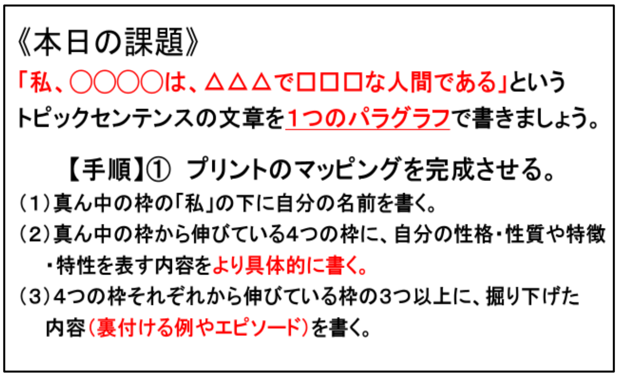


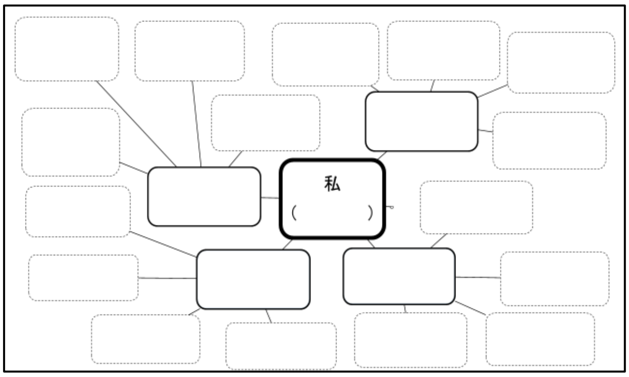
文章を書く前に、サポーティング・センテンスの素材となりうるものをできるかぎり挙げてから、どの素材が最も読み手を納得させるかを考え、選択し、アウトラインを作成することは、一貫した

文章を書くうえで大切なことです。いきなり文章を書き始めることは禁止とし、発想を広げ、文字に起こし、テーマに応じた素材の良し悪しを比較検討する練習もしました。その1つの思考ツールとして、「マッピング」を用いました。





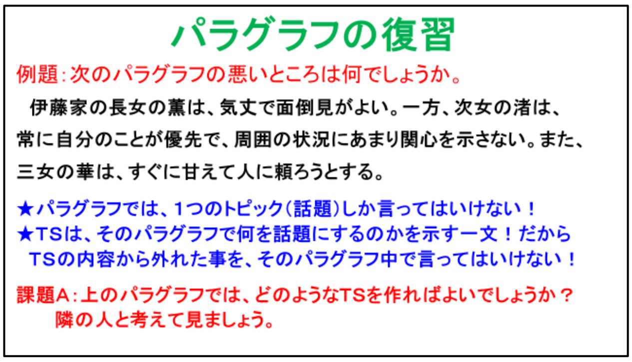


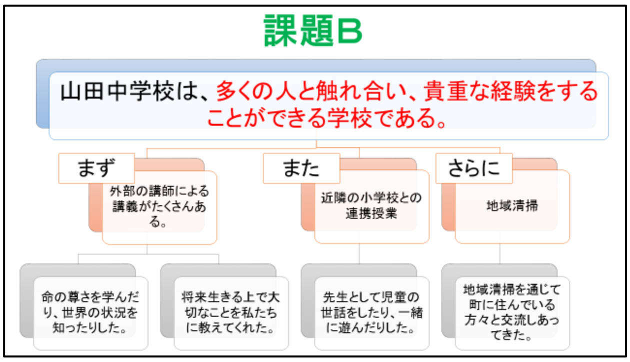


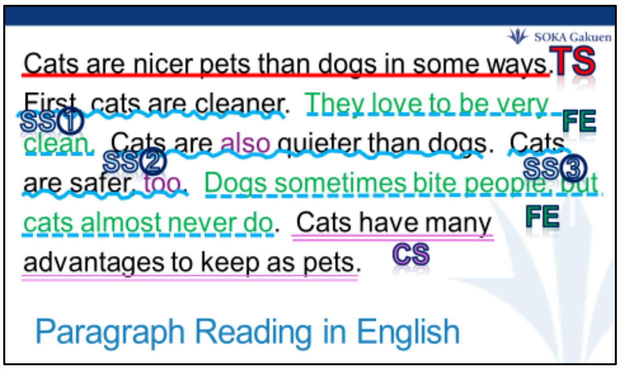
(3)トピック・センテンスの作り方

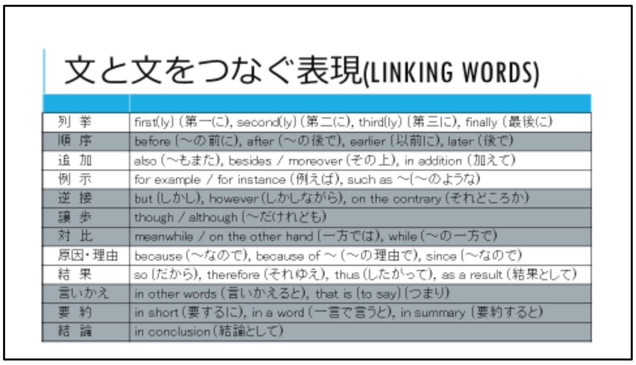
トピック・センテンスの2つの構成要素を知り、より良いトピック・センテンスを作る練習をします。トピック・センテンスを読んだときに、読み手が、その続きのサポーティング・センテンスに興味を持ち、「おおよそこんな内容なのだろうか？」「このトピック・センテンスを支えるのはどのような内容なのだろうか？」「この続きを読みたい！」と考えるような文を作ります。逆に、単なる事実を示す文や、具体的に詳細を語りすぎる文は良いトピック・センテンスとは言えません。

トピック・センテンスで言及されていない内容は、サポーティング・センテンスで述べてはいけません。逆の言い方をすれば、サポーティング・センテンスで述べた内容を包含したトピック・センテンスにしなければなりません。いくつの例題について考えながら、トピック・センテンスの作り方を身につけていきます。








文と文をつなぐ表現(LINKING WORDS)

列　挙	first(ly)（第一に）, second(ly)（第二に）, third(ly)（第三に）, finally（最後に）
順　序	before（～の前に）, after（～の後で）, earlier（以前に）, later（後で）
追　加	also（～もまた）, besides / moreover（その上）, in addition（加えて）
例　示	for example / for instance（例えば）, such as ～（～のような）
逆　接	but（しかし）, however（しかしながら）, on the contrary（それどころか）
譲　歩	though / although（～だけれども）
対　比	meanwhile / on the other hand（一方では）, while（～の一方で）
原因・理由	because（～なので）, because of ～（～の理由で）, since（～なので）
結　果	so（だから）, therefore（それゆえ）, thus（したがって）, as a result（結果として）
言いかえ	in other words（言いかえると）, that is (to say)（つまり）
要　約	in short（要するに）, in a word（一言で言うと）, in summary（要約すると）
結　論	in conclusion（結論として）

以上、学んだ3項目をもとに、日本語と英語でパラグラフ・ライティングの実践をします。

（1）～（3）のトレーニングをするにあたって、生徒たちには以下のテーマで作文を書かせました。

【作文課題】

1、あなたは、授業の始めと終わりにチャイムを鳴らすことに賛成か、反対か？
2、あなたは24時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成か、反対か？
3、私が、学校で教わる教科の中で1つだけ残すとしたら○○である。
4、私は、○○（という意見）に賛成か、反対か？
5、私は、高校の部活動を廃止すべきだという意見に賛成か、反対か？
6、私は、集団より個人を優先すべきだという意見に賛成か、反対か？
7、「私は○○で△△な人間である」というTSの文章を書く。（マッピングを活用）

③「情報伝達」のトレーニング

「情報伝達」のトレーニングでは、（1）情報の整理分類、（2）ラベリング、（3）空間的秩序の原則、（4）時間的秩序の原則　の4項目を行いました。

（1）情報の整理分類

同じ性質を持つ情報は共通項でくくり、整理分類をして提示するようにします。そうすることで説明は格段に分かりやすくなります。

（2）ラベリング

整理分類し、共通項でくくった情報に、ラベル（見出し）を貼って先に示します。「この部分は何についての情報なのか」を先に明らかにしてから説明すると、聞き手は分かりやすくなります。

上記の(1)(2)までを学び、トレーニングする例題として、「キャンプの持ち物の説明」を取り上げます。キャンプに持って行く持ち物を、ただ羅列して挙げるだけでは、聞き手は理解するのに手こずります。そこで、共通の性質を持つもの同士でカテゴリー化し、そのカテゴリーにラベルを付けます。また、同じ枚数どうしでくくると、説明はより分かりやすくなります。今回の例題では、以下に示すように、「衣服」と「洗面道具」というカテゴリーに分け、ラベルを貼ることができます。

情報伝達の技術①
～より分かりやすい説明のために～

★情報を整理分類して提示する

→同じ性質を持つ情報を、共通項でくくって提示する。

★　情報伝達の技術②

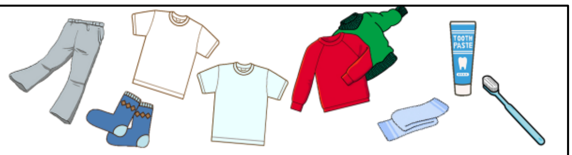
★ラベリング

共通項でくくった情報にラベル【見出し】を貼り、共通する性質（　＝どういう共通項でくくられているのか）を先に明らかにする。
→相手に話す内容の見通しを与えることで、話を理解してもらいやすくなる。

問題

三郎君がキャンプの持ち物について、以下のようにクラスのみんなへ説明をしました。この説明の良くないところは何でしょうか？

「半袖Tシャツ１枚、タオル１枚、歯磨き粉、長ズボン１つ、靴下１足、半袖Tシャツをもう１枚、長袖トレーナー２枚、歯ブラシ１本です」



これから私はキャンプの持ち物を説明します。
キャンプの持ち物は、長ズボンを１つ、靴下１足、長袖のトレーナーと半袖のTシャツを２枚ずつ、タオル１枚、歯磨きセットです。以上でキャンプの持ち物の説明を終わります。

共通項でくくった情報に「ラベル」を貼る

ラベリングの実践
これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、まず衣類として、長ズボン１本、長袖トレーナーと半袖Tシャツを２枚ずつ、靴下１足です。また洗面道具として、タオル１枚と歯磨きセットです。以上がキャンプの持ち物ですので、忘れずに持ってきてください。

(3)空間的秩序
空間的秩序とは、大原則として「概要から詳細へ」説明するというものです。相手に情報の全体像(見通し)を与えてから、部分の詳しい説明をします。道案内をするときや、探している物を相手に伝える時など、最初に概要を伝えてから、詳細な部分を伝えます。最初に全体像や見通しが与えられると、情報の受け手は情報の内容をイメージ(理解)しやすくなります。また、小原則として「一方向」で説明をするということがあります。例えば、「上から下、あるいは下から

上」「右から左、あるいは左から右」「手前から奥、あるいは奥から手前」「外から内、あるいは内から外」というように説明するということです。聞き手（読み手）の視点が行ったり来たりしないようにします。一方向の説明の方が、聞き手（読み手）は覚えやすく、理解しやすくなります。

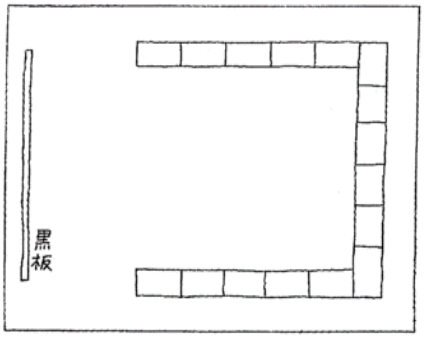
情報伝達の技術③
～より分かりやすい説明のために～

☆空間的秩序（空間配列）の原則

大原則：全体から部分へ・大情報から小情報へ
小原則：一方向で説明する

①上から下（下から上）　②右から左（左から右）
③手前から奥（奥から手前）　④外から中（中から外）

課題① 会議室にはどのように机が並べられていますか。机の並び方を説明しなさい。



【今日の説明の技術】
★概要から詳細へ、全体から部分へ、大きい情報から小さい情報へ

課題② プリントにある地図をもとに、今日学んだ「説明の技術」を必ず使って、A駅から青空第一中学校まで相手がよく分かるように道案内をしてください。

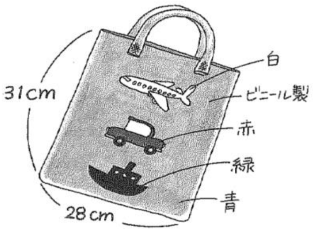
※相手は大人で、A駅周辺に詳しくないこととします。

【考えてみよう】

「道案内」における「全体の情報」
「大きい情報」とは何でしょうか。

「道案内」における「部分の情報」
「小さい情報」とは何でしょうか。

問：下にイラストで示した物を自分が落としたとして、それを友達にそっくりそのままイメージしてもらえるよう、説明してみましょう。（落とし物の説明）



※メモ用紙に書き出しましょう。
※この後、ペアで発表し合います。

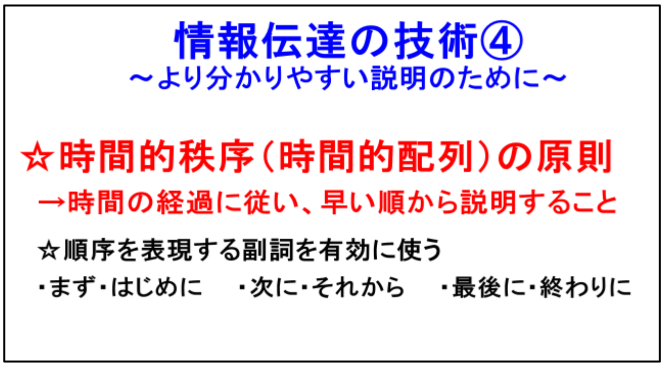
【今日の課題】
下の物を、それを見ていない人がそっくりそのままイメージできるよう、説明してください。

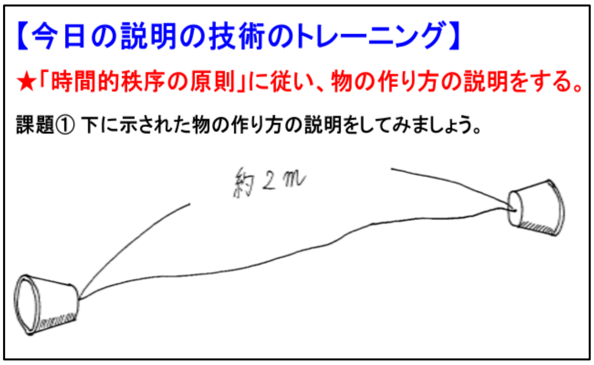
〈今日学んだ技術〉
「空間的秩序の原則」
大原則：全体から部分へ
小原則：一方向で説明する

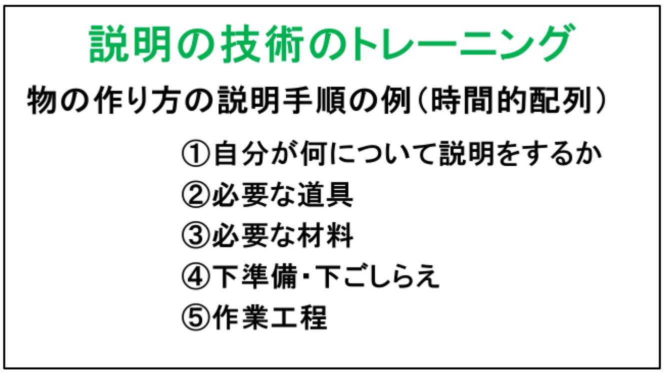
提出フォーム：https://forms.gle/ssJyM8PymhNkkjv4A

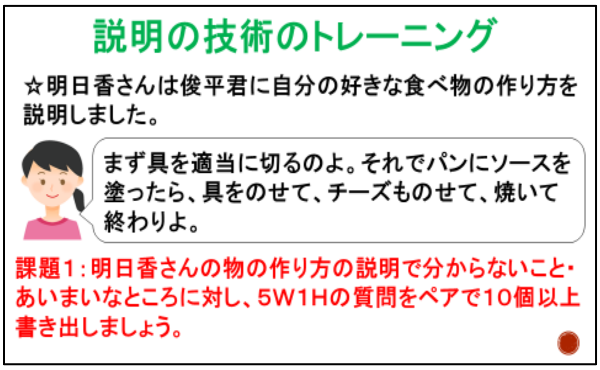
（4）時間的秩序の原則

時間的配列の秩序とは、時間の経過に従い、時間の早いことから順を追って説明していきます。物の作り方や実験の手順などを説明・報告する時には、時間が逆行しないように、この時間的配列の秩序を守ります。また、聞き手（読み手）が分かりやすいように、順序を表現する副詞（まず、最初に、はじめに、次に、それから、その後、最後に、終わりに等）を有効に使うようにします。









【2年生】

2年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

①「情報分析」のトレーニング
②「認知」「報告」のトレーニング
③「議論」のトレーニング

以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

①「情報分析」のトレーニング

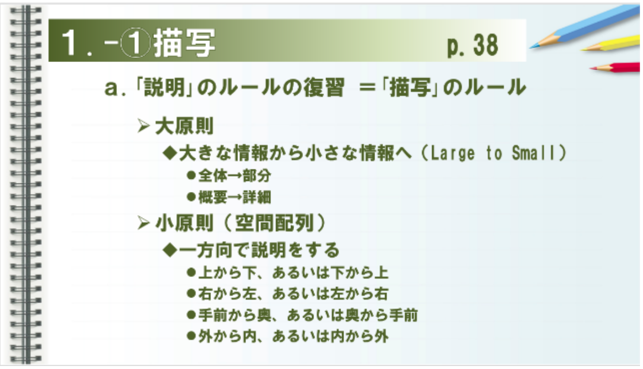
「情報分析」のトレーニングでは、（1）描写、（2）絵の分析、（3）テクストの分析　の3項目を行います。

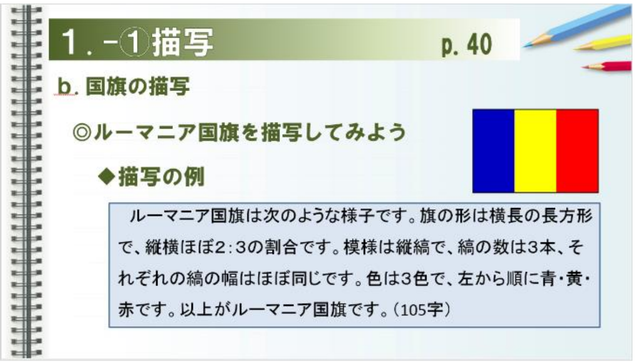
（1）描写

最初の描写では、ごく簡単な国旗やイラストを言葉のみで伝えることを例題として、下記の3項目の必要性を確認し、グループワークで協力して行います。

・描写に必要な情報を列挙する
・挙げられた情報を分類整理する

・どの順序で描写すると効果的かを考える



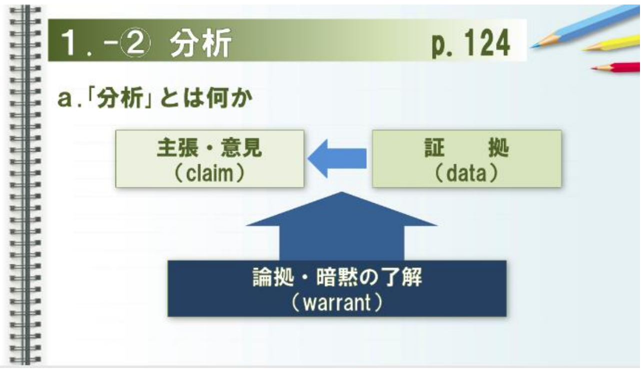


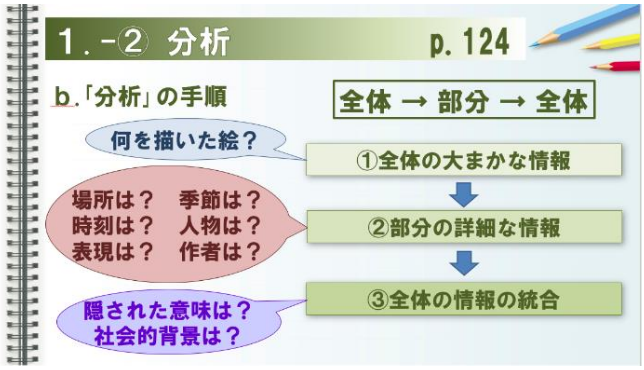
次に個人の作業として、1年次に学習したパラグラフライティングの形式で、描写文を書くことに取り組みます。このように2年生の言語技術、特に日本語では、作文を書く機会が多いので、生徒が書いた描写文は、担当教員の1人がルーブリックに基づいて採点、添削して返却するようにしています。具体的なルーブリックと添削については、後述します。

最後に、「大きな情報から小さな情報へ一方向で説明する」という空間的秩序の原則を確認して描写の授業を終わります。

（2）絵の分析

私たちはある絵を見たときに、絵から得られた視覚情報を元にほとんど無意識のうちに「この絵には〇〇が描かれている」などと判断します。この授業では、そのような判断が、どのようにして成り立っているのかを意識することから始めます。





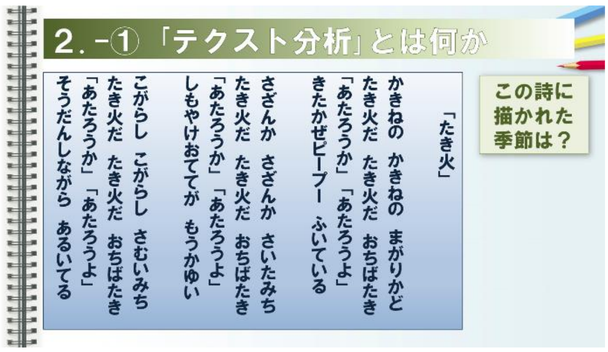
まず、絵という情報をよく観察し、そこから判断の根拠となる証拠を発見します。次にそれらの証拠を総合して解釈することで、ある判断が成り立っていることに気づかせます。

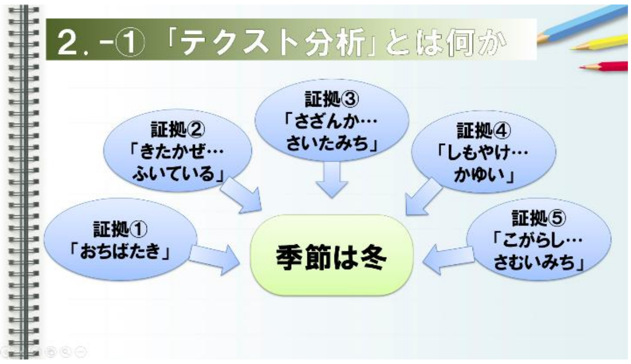
さらに、絵の中にある1つの情報が何を意味するかは、常識や慣習などの暗黙の了解を論拠としていることがある、ということも学びます。このような「暗黙の了解」は、文化を共有している者同士では何の説明もなく通用しますが、異文化とのコミュニケーションを図ろうとすると、意識して説明する必要が出てきます。この暗黙の了解は、認知のトレーニングや、議論のトレーニングでも振り返る必要のある重要な項目です。

以上のように、絵の分析を行う目的を理解した後は、具体的な「分析」の手順を学びます。分析の手順は、基本的に前項の空間的秩序の原則と同じく「全体から部分へ」ですが、少し違うのは、最後にもう一度全体に戻るという点です。細部の観察を行った後に、これまでの情報を統合して、この絵が何を描こうとした絵なのか、どんな意味が隠されているのかなど自分の意見を持つことになります。絵の分析ではそれほど情報量の多くないイラストの分析から始め、次のステップで、情報量の多い絵画を分析し、そこに隠されたテーマや物語を読み取ることへと進みます。

（3）テクストの分析

テクストの分析も、絵と同じように、テクストの中から証拠を見つけ、それらを解釈することで成り立ちます。たとえば、「たき火」という童謡の歌詞を分析すると、



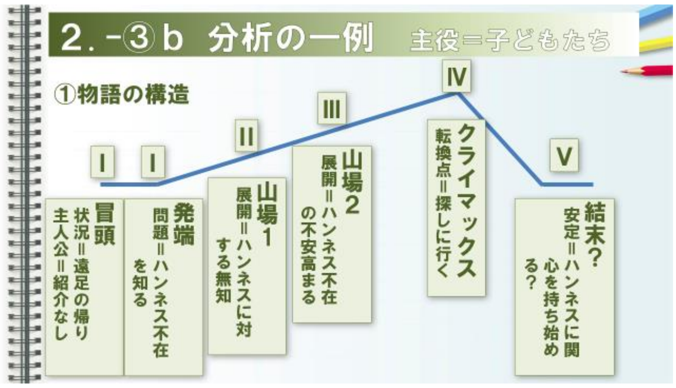


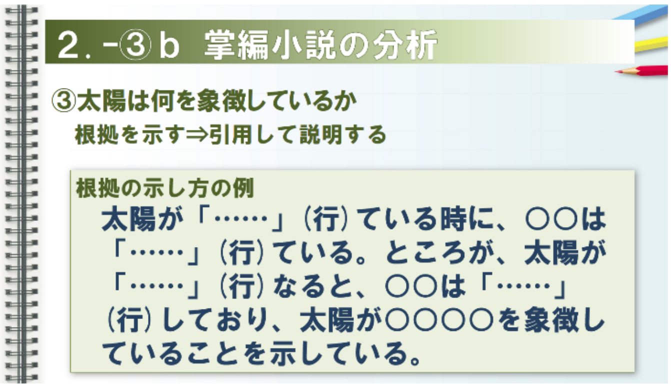
季節を示す様々な証拠が見つかります。一つの証拠だけでは季節を確定できないものもありますが、全ての証拠を総合すると、季節は「冬」であると解釈することができます。このように、テクスト分析とは「テクストに書かれた言葉を証拠として、そこから推論して解釈や意見を示すこと」をいいます。

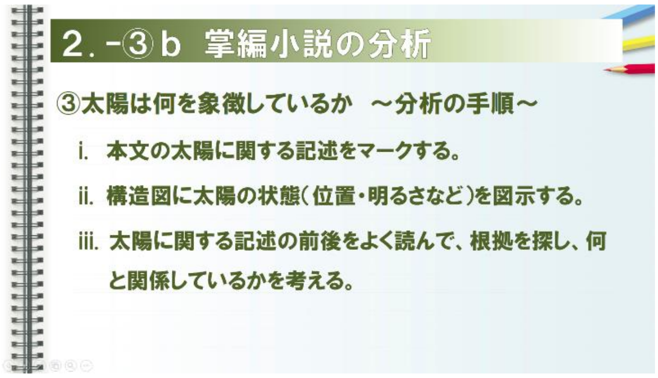
テクスト分析の実践では、まず詩の分析から始めます。詩は、1時間の授業で取り扱える程度の分量であり、具体的なイメージが掴みやすいからです。まず始めに日本語の詩から登場人物の境遇や、中心的に描かれている対象との関係等を読み解くことから始めます。大切なことは、絵の場合と同じように、必ず本文の中から証拠を挙げて解釈を示すことです。

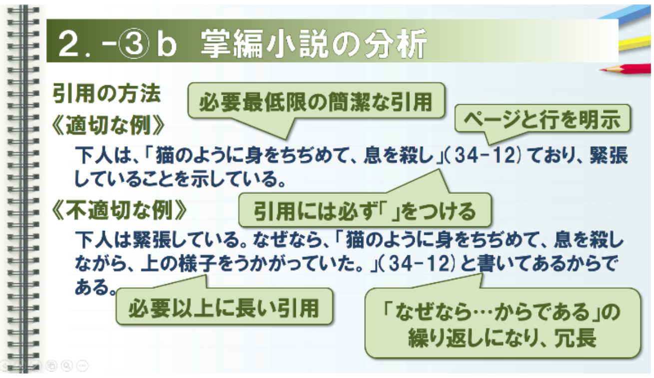
このようにテクスト分析を行うことで、1年次から徹底してきた「話すとき、書くときには必ず主語をつけよう」という原則を改めて確認できる、という効果もあります。

テクスト分析は、詩に続いて短編小説の分析を行いました。短編小説では、物語の構造と、文中に描かれた太陽の象徴性を合わせながら、グループで協力して分析しました。



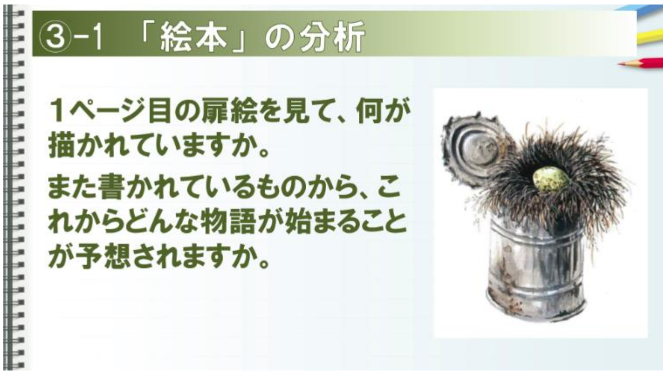






さらに、分析結果を全員の前で発表する際には、パラグラフの形式に従って話すことと共に、必ず証拠を示しながら話すことを徹底しました。このように、分析結果を発表するという行為をとおして、分析のみならず、1年次で学習した説明の能力や、パラグラフ・ライティングの能力も繰り返しトレーニングすることになります。

さらに昨年に引き続き、絵本の分析として『手のなかのすずめ』の分析に取り組みました。



グループでのディスカッションを中心に、題名や扉絵から想像できることを話し合ったり、2人一組で絵本を音読したりして授業を進めました。既習の「物語の構造」に照らし合わせて「事件の発端」を確認した後、主人公のティムにとって小さな成長のきっかけとなった「すずめとの出会い」が絵と文章にどのように描かれているかを話し合いました。母親と買い物に出かけ、すずめと

出会う前後で、ティムがどのような成長を遂げたかを分析し、その結果を作文の課題として書き上げました。ルーブリックに基づいてお互いの原稿を添削採点し、さらにその原稿を教員が採点する、という手順をとりました。

12ページにはすずめとの出会いによって大人へと一歩成長しているティムが暗示的に描かれている。ページ上部の窓にはじょうろと植木鉢が描かれており２ページの窓と比べるとたくさんの物がある。この事はすずめとの出会いによってティムが様々な事を得たことを意味している。また、ここにおいてティムは階段の真ん中で手にすずめを持ちながらお母さんに包まれている。この事は彼がお母さんに守られる立場から何かを守る立場になり、大人への階段を登り始めた事に加え、それでもまだお母さんに守られる立場であり成長の途中であることも表している。さらに、このページに描かれている手すり、かご、植木鉢、じょうろなど全ての物は何かを支えたり与えたり、逆に何かに包まれていたりする物でありお母さん、ティム、すずめの間にある保護被保護の関係を強調している。以上の事からこのページではすずめとの出会いで大人への階段を登り始めたティムが描かれている。

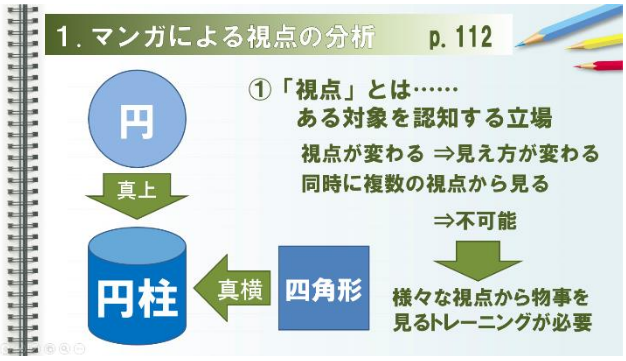
②認知のトレーニング

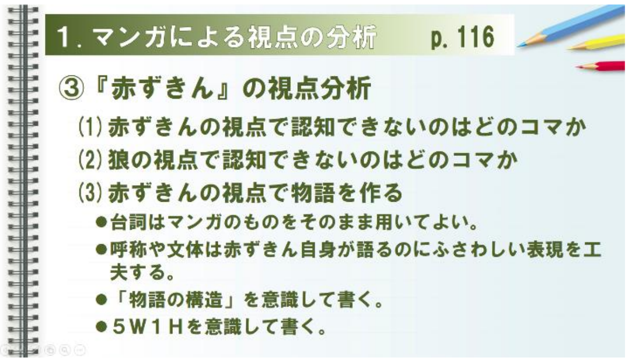
認知のトレーニングでは、(1)漫画による視点の分析、(2)テクストの視点変更　の2項目を行います。

(1)漫画による視点の分析

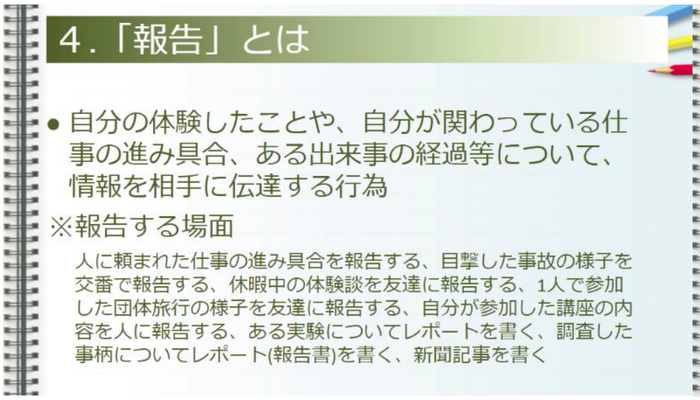
授業の初めに、私たちは、物事を認知する際にはどうしても特定の視点から認知せざるを得ず、視点が変わることで事実の認識が変わることに気づかせます。そこで、童話「赤ずきんちゃん」のコマ漫画を使って、赤ずきんの視点で認知できないコマがあることを確認し、まず、日本語で、赤ずきんの視点で物語を書きました。

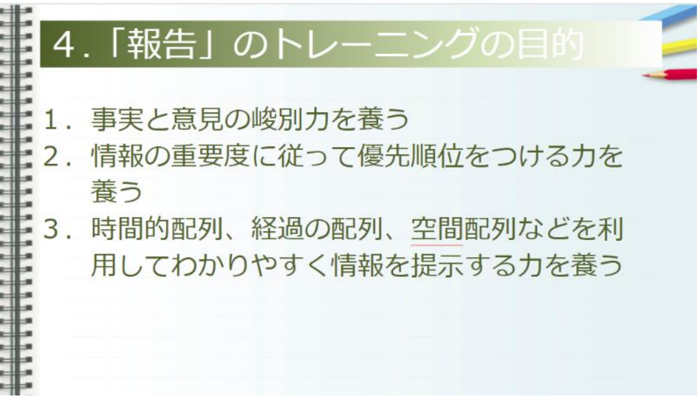
(2)報告のトレーニング

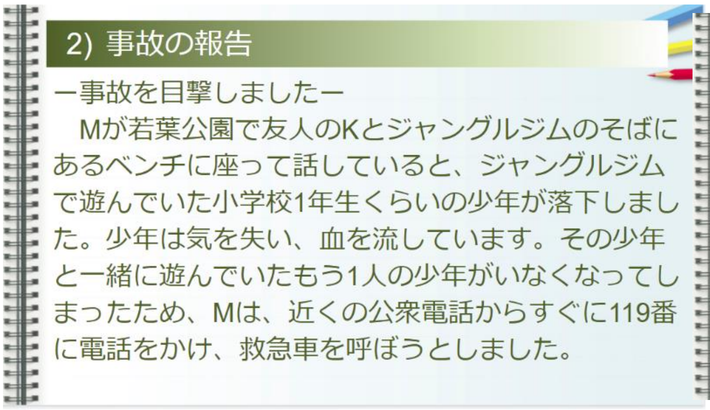


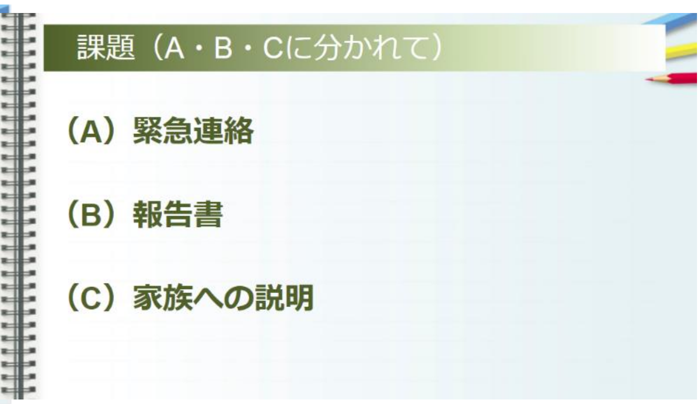


「報告」とは何か、そして報告は、その目的、報告する相手に応じて内容、情報の並べ方、まとめ方が変わることを学習しました。









③議論のトレーニング

議論のトレーニングは、(1)論理の学習、(2)反論の技術、(3)ディベートの 3項目を実施します。

(1)論理の学習

論理の学習では、日常的にもよく耳にする、「『論理』とは何か」「『「論理が正しい』とはどういうことか」「『論理的』とはどのような状態か」などのことばを定義するところから始めます。更に、論理を組み立てる際の「前提」や「推論」といった用語を説明してから、具体的な練習問題に取り組みます。

練習問題としては、まず、論理の基本となる三段論法を紹介し、例示された三段論法のどこに問題点があるのか、を話し合うところから始めます。続いて20問ほどの練習問題を出題し、生徒が協力して、それぞれの論理的問題点を指摘します。それらの練習問題を考えることをとおして生徒たちは、正しい推論の条件として、

・理論の飛躍がないこと　　・前提が正しいこと

の2つが必要なことを確認します。

更に、同じような文化や生活を共有している者同士では、論理の前提が隠されていること、いわゆる「暗黙の了解」があることを学びます。これは、「絵の分析」で学んだことの復習にもなります。

最後に、200字程度の文章を示して、その中に含まれる様々な論理的欠陥を指摘する課

題に取り組みます。この時に問題文として示した文章は、昨年卒業した生徒たちがファイナルプロジェクトとして作成した文章を、練習用に改作したものです。これは、現2年生も、来年のファイナルプロジェクトのポスターセッションの際に質疑応答をすることを念頭に置いて、論理的に欠陥のない文章が書けるように意識させるためです。

（2）反論の技術

ここでは、反論の方法として、

・相手の主張に直接的に反論する方法
・相手の主張に理解を示した上で、論理的に矛盾している部分などについて反論する方法

の2種類があること、更に、それぞれの方法を実際に用いる際の、話し方の「型」を学びました。以下がそれぞれの「型」です。

①　私は、○○君の意見に反対です。○○君は、「…(引用)…」と述べています。しかし、この主張は成立しません。第1に、……。第2に、……。以上の理由により、○○君の意見は成り立ちません。

②　○○君の意見は一理あります。確かに「…(引用)…」という点では彼の主張は正しいと言えます。しかし、その主張は次の点が矛盾しています。第1に、……。第2に、……。以上のように彼の主張には複数の矛盾点があるため成り立ちません。

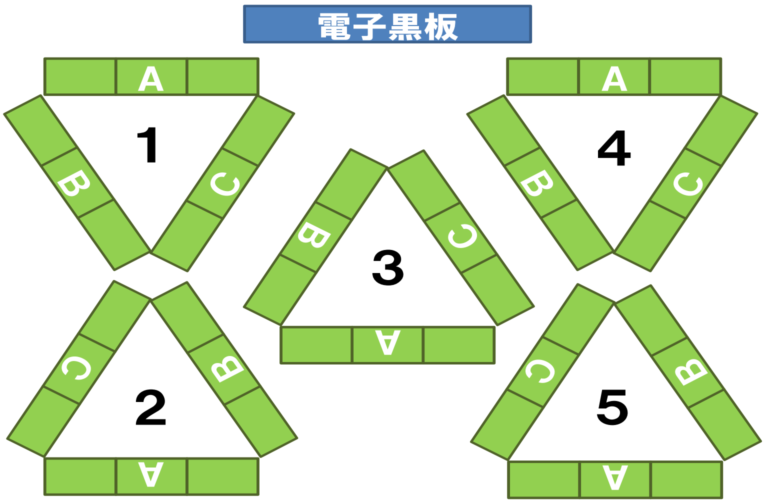
いずれも、1年次で学習した「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングの形式に基づいて、始めに自分の立場を明示し、続いてその根拠を示し、結びとして自分の立場を再度主張する、という形をとっています。生徒たちは、「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングでこの形式には慣れていますので、この後のディベートでもこの「型」を使いこなしています。

（3）ディベート

生徒の多くは、中学校の国語でディベートを経験していましたので、ディベートそのものの定義や説明は、ごく簡単に示すにとどめ、チーム作り、役割分担、論題決めなど具体的な準備を始めます。教室で一斉に実施するために、各チームが、試合ごとにどの論題を取り上げるのかは予め決定しておき、それぞれの論題について肯定・否定両方の立論や反論を作成する形で準備を進めます。

なお、ディベートのルールや方法を説明する際には、英語表現の教科書を併用します。これは、英語表現で英語によるディベートが取り上げられていますので、日本語に続いて英語でもディベートを行うことを考慮したものです。従って、試合の方法などは原則として英語表現の教科書に合わせます。

下記が試合の進行です。ディベート甲子園などの本格的ディベートとは違い、質疑応答を行わないなどかなり簡略化してありますが、これも英語表現の教科書に合わせたものです。



肯定側立論（1分）

否定側立論（1分）

作戦タイム（1分）

否定側反論（1分）

肯定側反論（1分）

作戦タイム（1分）

肯定側まとめ（1分）

否定側まとめ（1分）

判定検討（1分）

判定発表（1分）

次ページの図が教室内の配置図です。3人1チームを原則として15チームを作り、3チームを1グループとして、グループ内で対戦します。例えば、第1試合はAチームとBチームが対戦し、Cチームがジャッジと進行を担当する、という形で、全チームが2試合行い、1試合はジャッジを行うようにしてあります。なお、このディベートの試合の実施がオンライン授業期間にあたったクラスでも、同じようにディベートを実施することができました。ただし「作戦タイム」の際に「ブレイクアウトセッション」を移動するロスタイムが生じることから作戦タイムの時間を「2分」として実施したところスムーズに行うことができました。

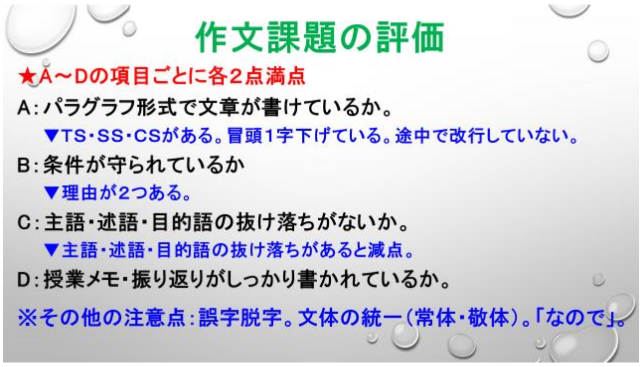
以上のように、全員が日本語でのディベートを体験してから、英語でのディベートに取り組み、ディベートのやり方に慣れることを目指します。これは、GCPで実施する人権ディベートの準備ともなっています。

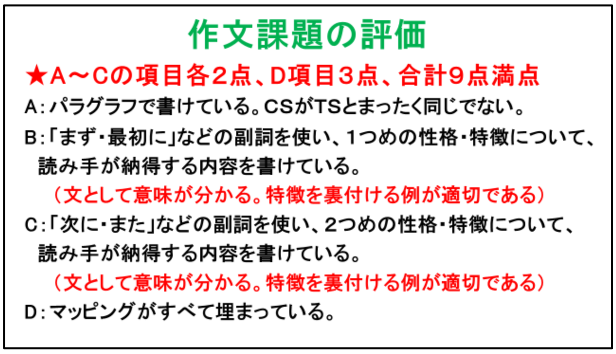
C） 評価

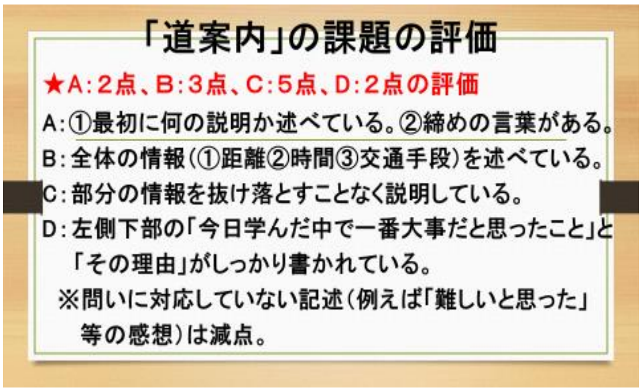
評価の対象は、毎回の授業の課題への取り組みと、振り返り記入になります。

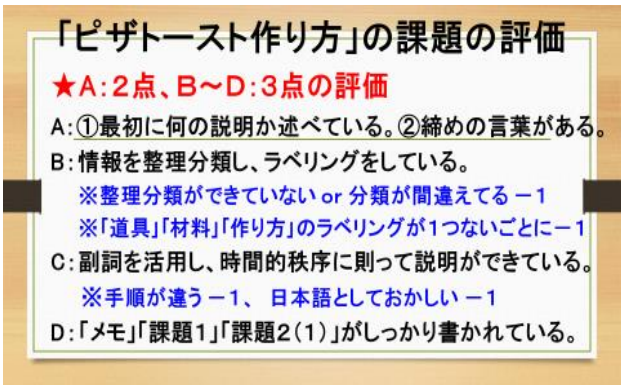
作文課題の場合は3～5つの評価項目を立て、それぞれ1～5点で採点しました。評価項目は、作文を書く目的に従って変えています。課題によっては、生徒に相互採点もさせます。相互採点は、ルーブリックに基づいて行います。互いに評価と添削を繰り返すことで、評価のポイントが強く認識され、結果として自身の文章力の向上にもつながっています。

以下に、1年生の授業で、課題作文を書かせる前に生徒に見せる「評価のポイント」のスライドと添削後の作文課題、2年生の課題作文における評価ルーブリックを示します。









No.

私は二十四時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成です。理由は二つあります。一つ目は、コンビニエンスストアは、地域の安全を守る役割も担っているからです。私達や登下校をしている小学校の児童が、不審な人物に追われた際にコンビニエンスストアに逃げ込み助けを求めることができます。二つ目は、夜遅くまで運転をしている人が、休息のために立ち寄れることです。運転手がきちんと休息を取ることは、疲れや眠気による事故を防ぐことにもつながります。

よって、私は二十四時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成です。

A	5	4	3	2	1
B	5	4	3	2	1
C	5	4	3	2	1
D	5	4	3	2	1
E	5	4	3	2	1
計	10／10				

私は、高校の部活動を廃止すべきだという意見に反対だ。まず、部活動は団体での協調性が育まれると思うからだ。部活動は先輩や後輩、同期との団体行動であるため、協調性が育まれる。また、私たちは信頼のできる最高の友人を作ることができるからだ。なぜなら、私たちは、毎日のように支え合い、戦い合いながら過ごすことで、信頼できる友人が作れると思うからだ。これらの理由から、私は、高校の部活動を廃止すべきだという意見に反対だ。

◎今日の授業で学んだこと・感じたこと・気づいたこと・質問したいこと

作文はいつも何も考えず書き始めてしまうので、それが絶対にしてはいけないことなのだと今日始めて知りました。構想を練る時間をこれからはしっかり作っていきたいと思います。

A	5	4	3	2	1
B	5	4	3	2	1
C	5	4	3	2	1
D	5	4	3	2	1
E	5	4	3	2	1
計	14／14				

【描写文】「手提げバッグの描写」　(200字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記a)～c)の全てにおいて優れている。 a)TSの内容が明快である。 b)TSとSSが論理的につながっている。 c)CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～c)の全てが守られてはいるが、どれか1つに工夫が必要である。 〈例〉TSがやや分かりにくい。	a)～c)の全てが守られてはいるが、2つ以上に工夫が必要である。 〈例〉TSとCSが全く同じ。TSとSSのつながりにやや問題がある。	パラグラフの構成についての理解不足。 〈例〉TSとCSの内容が変わっている。TSとSSの順序が入れ替わっている。	パラグラフの構成が理解できていない。 〈例〉TS・SS・CSのどれかが欠落している。途中で改行している。
B	内容	下記イ)～ハ)の全てにおいて優れている。 イ)描写すべき情報が分類整理されている。 ロ)「空間配列」のルールに従って記述されている。 ハ)個々の情報の表現が適切で分かりやすい。	イ)～ハ)のどれか1つが不十分である。	イ)～ハ)のどれか2つが不十分である。	イ)～ハ)の3つとも不十分である。	課題を理解していない。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている Ⅰ文体の統一 Ⅱ主語の挿入 Ⅲ接続語が適切 Ⅳ句読点が適切 Ⅴ誤字・脱字がない Ⅵ原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1つに不備がある	ルールのうち2つに不備がある	ルールのうち3つに不備がある	ルールのうち4つ以上に不備がある

【分析型パラグラフ】「手のなかのすずめ」12ページの分析　(400字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記 a) ～ c) の全てにおいて優れている a) TS・SS・CSの形式が整っている。 b) TSとSS、SSとCSの内容が整合している。 c) CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～c)の全てがほぼできているが、更に工夫が必要である。 〈例〉 TSの内容がわかりづらい。 TSとSS、SSとCSのつながりが分かりづらい。 TSとCSの表現が同じ。　など	a)～c)のどれか1項目ができていない。	a)～c)のどれか2項目ができていない。	a)～c)が3項目ともできていない。または、下記のどれかにあてはまる。 〈例〉 途中で改行している。 TS・SS・CSのどれかが欠落している。 TSやCSが「私は～思う。」などとなっている。
B	内容	下記 イ) ～ ニ) の全てにおいて優れている イ) 解釈の根拠が明示されている。 ロ) 解釈と根拠の関係が分かりやすく書かれている。 ハ) SSの配列が「大から小へ」の原則に従っている。 ニ) SSの配列において、ナンバリングや適切な接続語を用いている。	イ)～ニ) のどれか1項目が不十分である。	イ)～ニ) のどれか2項目が不十分である。	イ)～ニ) のどれか3項目が不十分である。	イ)～ニ) の4項目全てが不十分である。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている Ⅰ文体の統一 Ⅱ主語の挿入 Ⅲ接続語が適切 Ⅳ句読点が適切 Ⅴ誤字・脱字がない Ⅵ原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち 1項目に不備がある	ルールのうち 2項目に不備がある	ルールのうち 3項目に不備がある	ルールのうち 4項目以上に不備がある

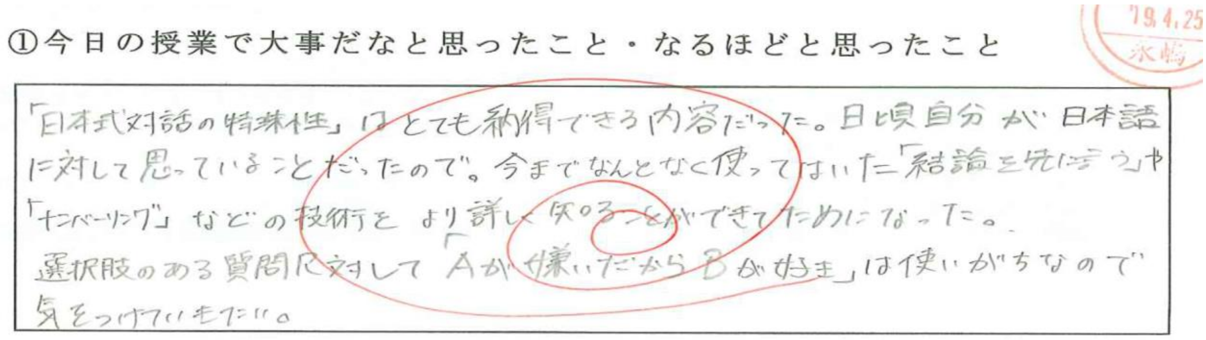
【意見型パラグラフ】ディベートのまとめ　（400字程度）

		５点	４点	３点	２点	１点
A	パラグラフ構成	下記 a) ～ b) の両方において優れている a) TS・SS・CSの形式が整っている。 b) CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～b)の両方がほぼできているが、更に工夫が必要である。 〈例〉 TSの内容がわかりづらい。 TSとSS、SSとCSのつながりが分かりづらい。 TSとSSの表現がほとんど同じ。 など	a)～b)のどちらか1つができていない。	a)～b)の両方ができていない。	途中で改行している。
B	内容	下記 イ) ～ ニ) の全てにおいて優れている イ) TSの意見の理由として、SSの内容が適切である。 ロ) 各理由に対する反論が適切である。 ハ) 反論に対する反駁が適切である。 ニ) SSの配列において、ナンバリングや適切な接続語を用いている。	イ)～ニ) のどれか1つが不十分である。	イ)～ニ) のどれか2つが不十分である。	イ)～ニ) のどれか3つが不十分である。	イ)～ニ) が4つとも不十分である。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている Ⅰ 文体(常体)の統一 Ⅱ 主語の挿入 Ⅲ 句読点が適切 Ⅳ 用語が適切 Ⅴ 誤字・脱字がない Ⅵ 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち 1つに不備がある	ルールのうち 2つに不備がある	ルールのうち 3つに不備がある	ルールのうち 4つ以上に不備がある

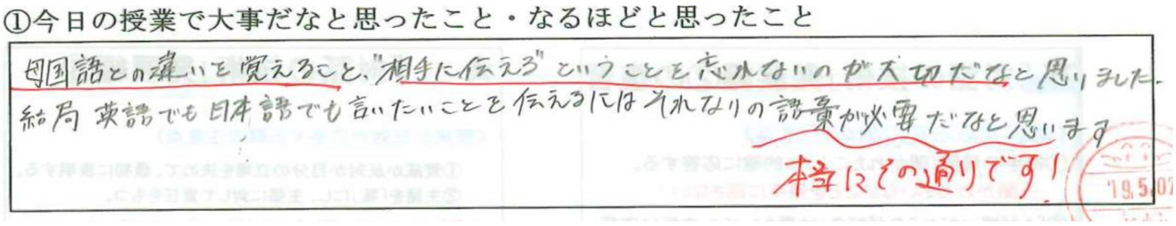
毎回の授業において、ペアやグループで話し合った内容をメモし、授業の最後の5分で、「今日の授業で自分が学んだこと」や、自分が考えたり気づいたりした内容を記録させます。学んだことを自分で意識化できているか・学んだことを活かそうと意識できているかどうかチェックします。

授業プリントはファイリングさせ、いつでも学びの履歴を見返せるようにします。他の授業や行事の時に、このファイルを見返しながら文章を書いたり、説明の準備をしたりする生徒の姿も見られました。まさに実生活に活かせるポートフォリオの作成ができたと思います。

以下に生徒の振り返りの例を示します。

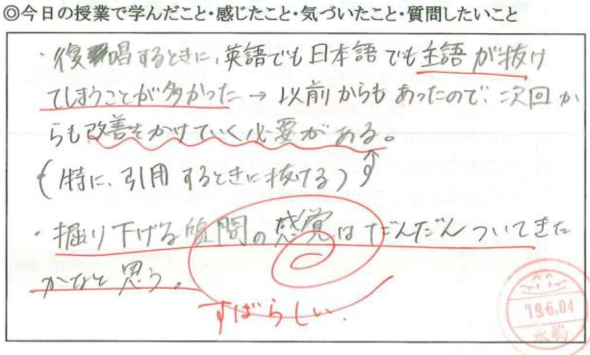

①今日の授業で大事だなと思ったこと・なるほどと思ったこと

「日本式対話の特殊性」はとても納得できる内容だった。日頃自分が日本語に対して思っていることだったので。今までなんとなく使ってはいた「結論を先に言う」や「ナンバーリング」などの技術をより詳しく知ることができてためになった。選択肢のある質問に対して「Aが嫌いだからBが好き」は使いがちなので気をつけていきたい。


①今日の授業で大事だなと思ったこと・なるほどと思ったこと

母国語との違いを覚えること、"相手に伝える"ということを忘れないのが大切だなと思いました。結局英語でも日本語でも言いたいことを伝えるにはそれなりの語彙が必要だなと思います

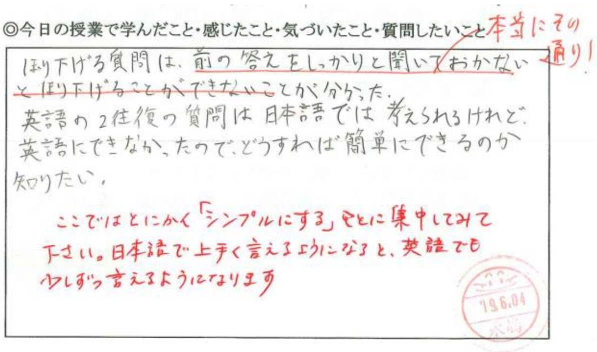
本当にその通りです！



◎今日の授業で学んだこと・感じたこと・気づいたこと・質問したいこと

・復唱するときに、英語でも日本語でも主語が抜けてしまうことが多かった→以前からもあったので、次回からも改善をかけていく必要がある。
(特に、引用するときに挽する)
・掘り下げる質問の感覚はだんだんついてきたかなと思う。

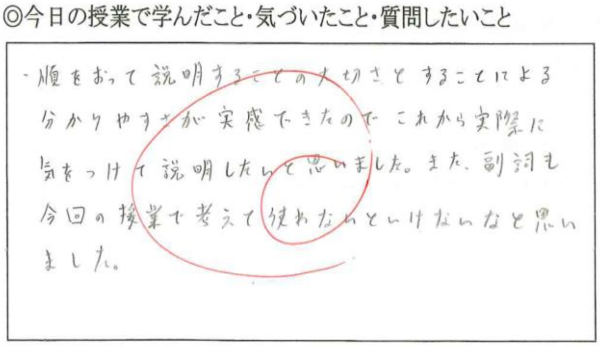
すばらしい。



◎今日の授業で学んだこと・感じたこと・気づいたこと・質問したいこと　本当にその通り！

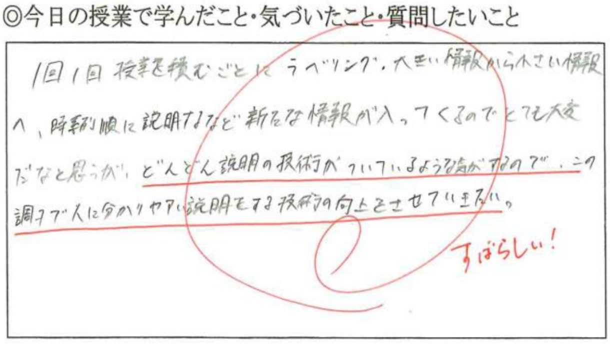
ほり下げる質問は、前の答えをしっかりと聞いておかないとほり下げることができないことが分かった。
英語の2往復の質問は日本語では考えられるけれど、英語にできなかったので、どうすれば簡単にできるのか知りたい。

ここではとにかく「シンプルにする」ことに集中してみて下さい。日本語で上手く言えるようになると、英語でも少しずつ言えるようになります



◎今日の授業で学んだこと・気づいたこと・質問したいこと

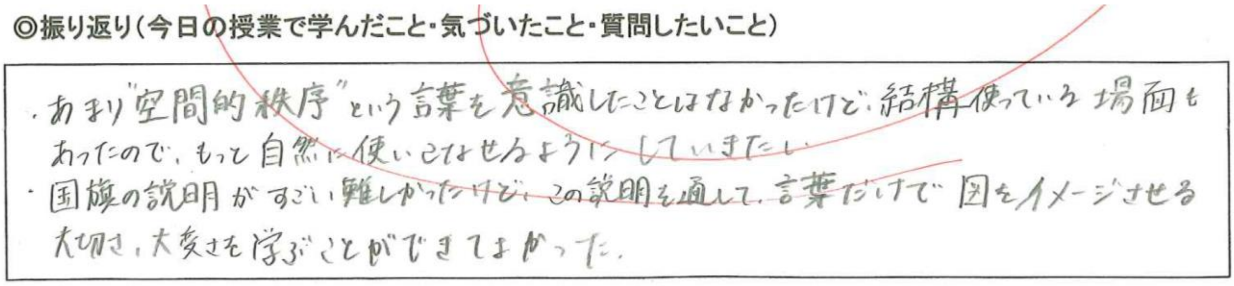
・順をおって説明することの大切さとすることによる分かりやすさが実感できたのでこれから実際に気をつけて説明したいと思いました。また、副詞も今回の授業で考えて使わないといけないなと思いました。



◎今日の授業で学んだこと・気づいたこと・質問したいこと

1回1回授業を積むごとにラベリング、大きい情報から小さい情報へ、時系列順に説明するなど新たな情報が入ってくるのでとても大変だなと思うが、どんどん説明の技術がついているような気がするので、この調子で人に分かりやすい説明をする技術の向上をさせていきたい。

すばらしい！



◎振り返り（今日の授業で学んだこと・気づいたこと・質問したいこと）

・あまり"空間的秩序"という言葉を意識したことはなかったけど、結構使っている場面もあったので、もっと自然に使いこなせるようにしていきたい
・国旗の説明がすごい難しかったけど、この説明を通して、言葉だけで図をイメージさせる大切さ、大変さを学ぶことができてよかった。

D） 成果および今後の課題

● 成果

①創価高校「言語技術」教育カリキュラムの確立

5年間、「言語技術」の授業を実施してくる中で、1年1年振り返りながら、授業内容や進め方を改善してきました。結果として、創価高校における「言語技術」教育のプログラムがほぼ確立したと思われます。1年生の最後の授業で書いてもらった1年間の振り返り作文では、学習・トレーニングした内容を活かしながら、学んだことを・得たものを、生徒たちは論理的に表現していました。理解だけにとどまらず活用できていることを強く実感しました。

②英検スコアの上昇

昨年度スコアが下がった英検ライティングスコアも、今年度は向上がみられました。本年度も第3回目の英検2級を、高校2年次の総合クラス（「言語技術」の授業を受けているクラス）のほぼ全員が受検することになっています。その中で、リーディング・リスニング・ライティングの3技能のCSEスコアの平均は、昨年度は1462.3でしたが、今年度は1492.9と微増しました。また、ライティングのスコアのみで見ると、昨年度は477.7でしたが、今年度は485.9と上昇しており、安

定したスコアを出しています。これは5年間を通じた、「言語技術」教育の往還の成果と言えます。

③ポートフォリオの作成

生徒には昨年までと同様、毎回の授業で「学んだこと」等の振り返りをさせ、記録・ファイリングさせました。このファイルを見返しながら、身につけた技術を活かそうとする生徒の姿が見られ、実際に活かせるポートフォリオの作成ができました。

④小中高一貫プログラムの作成

一昨年度から始まった、小中高の「言語技術」担当者による「言語技術」推進委員会での話し合いの内容を受け、特に中高での連携を強化できました。授業データをネットワーク内で共有し、中高の担当者がお互いの資料をいつでも見られるように環境が整備されました。

⑤ファイナル・プロジェクトにおける小論文作成指導

一昨年度から開始した、3年次での週1時間の小論文作成指導（GCPファイナル・プロジェクトの最終レポート作成と連動）を、これまでの反省をもとに授業内容を精選し、進め方を改善した結果、さらに質の高い小論文が見られるようになりました。

⑥キャリア教育と連動した作文指導

1年次では、言語技術で学んだ「作文」の技術を応用して、自分自身の進路や学校生活についての考えをパーソナル・エッセイとして書かせました。このパーソナル・エッセイは、本校が 10 年以上にわたって伝統的に取り組んでいるものです。全生徒が 1000 字～1200 字で、形式の整ったエッセイを書きあげました。

2年次では、1年次のパーソナル・エッセイを発展させて、大学入試を意識した「志望理由書」の作成に取り組みました。生徒たちは、2年間の言語技術の学習をとおして、パラグラフ・ライティングの技術がかなり定着していますので、多くの生徒が論理的にもしっかりとした文章を書きあげました。

⑦教員自身の言語技術トレーニング

「言語技術」の授業に担任教員が毎回参加しまし、教員自身が「言語技術」のトレーニングを行いました。

● **今後の課題**

①2022年度からの新カリキュラムを見据え、創価中学校・東京創価小学校での「言語技術」教育のさらなる推進を図っていかなければなりません。そのため、小中高「言語技術」推進委員会を引き続き定例で開催し、協議を重ねてまいります。

②「言語技術」がすべての学びの土台となるよう、各教科との連携も密にして、生徒が活用する機会を増やし、活用事例を蓄積させ、誰でも活用できるようなシステムを作ってまいります。

5. フィールドワーク

A） 概要

多くの学校と同じく、コロナ禍のため、SGH のフィールドワークはすべて中止となった。その中で沖縄・那覇国際高校と、広島・女学院高校との交流を実施。さらには来年度も引き続くであろう、海外フィールドワークや研修旅行の制限に対して、オンラインを活用してできることはないかを模索し、オンラインスタディーツアーを実施した。

B） オンラインスタディツアー

■ 期　間　1 月 15 日、29 日、2 月 5 日、12 日　計 4 日間　各 1 時間

■ 交流相手　カンボジアの学生

■ 参加者　GLP 生　高校2年生19名　高校3年生9名　計28名

■ 目　的

コロナ禍のため、海外フィールドワークを行うことができない代替として、オンラインを活用してのい海外との交流の可能性を模索しオンラインスタディーツアーを実施した。今回は、オンライン英会話でおせわになっているウェブリオ様にご対応いただいいた。カンボジアの高校生と「平和についての私たちの提案」をターゲットに、1 月 15 日、29 日、2 月 5 日、12 日と、1 時間ずつ、4回にわたって段階的に取り組んだ。

■ 事前学習・準備

■ 何をテーマに議論するか、全体でディスカッション

■ 自分たちの趣味や身近なものについて写真で説明するプレゼンテーション作成

■ 核問題について説明するプレゼンテーション作成

■ 行程

➢ 1日目

自己紹介　　写真や物をつかって自身の身近なものを紹介しあう

◆ 生徒感想

「最初は初対面の海外の方と初めて話すということで緊張していたが、実際はちゃんと会話をすることができて、相手の方も私達をあたたかく受け入れてくださったので、とても楽しかった。時間がなかったため、今回はカンボジアのことについてあまり知ることができなかったが、次回以降一緒に平和について考えお互いのことを知っていけるのが待ち遠しいと感じた。」

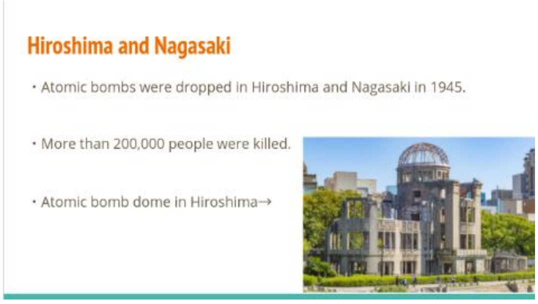
➢ 2日目

創価高校の生徒から核兵器に関するプレゼンテーション(核兵器の概要、歴史、現状、今後の展望)

コロナウイルス、家族、SNS、学校について、お互いの国の状況を共有

◆ 生徒感想

「核についてのプレゼンや COVID-19 についてのディスカッションをすることができて、各国について知る良い機会となった。また、直接あったことのない相手でも、こうして一緒に何かをつくろうと協力できることが本当に嬉しい。」



➢ 3日目

前回の 4 テーマ(コロナウイルス、家族、SNS、学校)から一つ選び、「テーマ x 平和」について議論
議論した内容をプレゼンテーションにまとめる

生徒感想

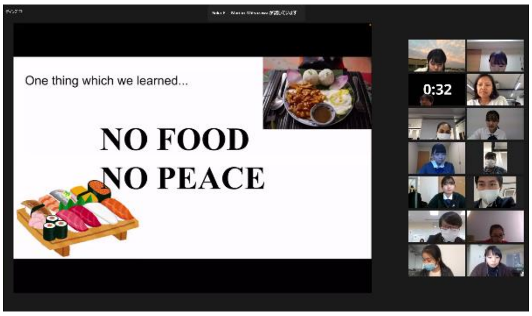
「今回は今までよりも多くの質問をし合うことができた。その中で特に心に残った質問は、「私達は学校でどのような平和教育を受けたか」というものだ。この質問でカンボジアの生徒は、「ポル・ポト」という、カンボジアで起こった虐殺事件のことを話してくれた。私はこのような事件について知らず、国際的な争いだけでなく、国内での虐殺も起こるのだとショックを受けた。それと同時に、他の国での重大な、そして深刻な事件について知ることで、平和への探求を他の国の人たちとも確認し合えるのだと実感した。」

➢ 4日目

「テーマ x 平和」についてプレゼンテーション

◆ 生徒感想

「オンラインスタディツアー全体を通して、英語力を向上させていきたいと思ったが、それだけではだめだとも思った。英語力があったとしても、いかに相手に伝えるかを工夫しなければ、良いコミュニケーションは取れないということを実感したからだ。言い換えると、たとえ英語力がなくても相手に伝えようと工夫をすれば、良いコミュニケーションを取ることができるということを学んだ。英語力を向上させることは、最終的なゴールではなく、良いコミュニケーションをとるための一つのステップに過ぎないということを実感した。また、良いコミュニケーションとは単に円滑だというだけではないと思った。今回のオンラインスタディツアーでは円滑に意思疎通ができない場面も多々あったが、それでもお互いの意見を共有しあい、思考を深める事ができた。これこそが”良いコミュニケーション”なのではないかと思った。そして、それは相手の言いたいことを理解しよう、相手に自分の言いたいことを伝えようという姿勢が双方にあったからこそできたことだと思う。これからも、相手が外国人だろうが日本人だろうが関係なく、こうした姿勢を大切にしていきたいと思う。」



C）　沖縄オンラインフィールドワーク

■概要

SGH（ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽｸｰﾙ）教育事業の最終年度にあたる本年、コロナ禍にあっても、オンラインを活用したフィールドワークを実施することにより、過去4年間で交流してきた沖縄県立那覇国際高校や、ひめゆり平和祈念資料館等の連携機関にご協力をいただきながら、本校が掲げる4つの資質・能力（人間力・対話力・知力・社会力）の育成に取り組むこととした。

■目的

①創立者池田先生の沖縄に寄せる思いを学び、平和を創造するグローバル・リーダーとしての資質を磨く。

②沖縄戦の事実を認識し、戦争体験継承とともに、沖縄の現在と未来を学ぶ。

③SGH校との交流を通して、互いに触発しあい友情を深める。

■実施日（※全てZOOMによるオンラインで実施）

第1日目：11月　7日（土）14時00分～16時00分

企画①：沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」

【講師】具志堅　隆松　氏（ガマフヤー代表）

第2日目：11月11日（水）16時10分～17時20分

企画②：グローバルセミナー

【講師】：喜屋武　裕江（きゃん　ひろえ）氏

（一般社団法人グッジョブおきなわプロジェクト代表）

第3日目：11月14日（土）14時00分～16時00分

企画③：ひめゆり平和祈念資料館

【講師】仲田　晃子　氏（ひめゆり平和祈念資料館説明員）

※沖縄県立那覇国際高校（SGH校）と合同開催

第4日目：11月15日（日）14時00分～16時00分

企画④：創立者池田先生と沖縄

【講師】安田　進　氏（創価学会沖縄総県長）、沖縄総県青年部平和委員会

■交流校・連携機関等

沖縄県立那覇国際高等学校（SGH校）、ひめゆり平和祈念資料館、
沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」、創価学会沖縄総県など

■参加生徒の取り組み等

〇10月8日（木）から募集開始、TV放送で全校生徒に告知。

〇希望者全員が参加可能　※企画①～④への参加回数は問わない。

【参加生徒への課題】

（1）事前に沖縄戦等に関わる映像鑑賞

NHKｽﾍﾟｼｬﾙ『沖縄”出口なき”戦場～最後の1か月で何が～』、
ｱﾆﾒｰｼｮﾝ『ひめゆり　HIMEYUROI』
NHK映像『“ひめゆりの声”を届けたい～戦後75年　生まれ変わる資料館～』

（2）毎回のオンラインフィールドワーク終了後にフォームによる振り返りを提出。

（3）企画③に参加した生徒には、事後学習資料として『ひめゆり平和祈念資料館・ガイドブック』配付

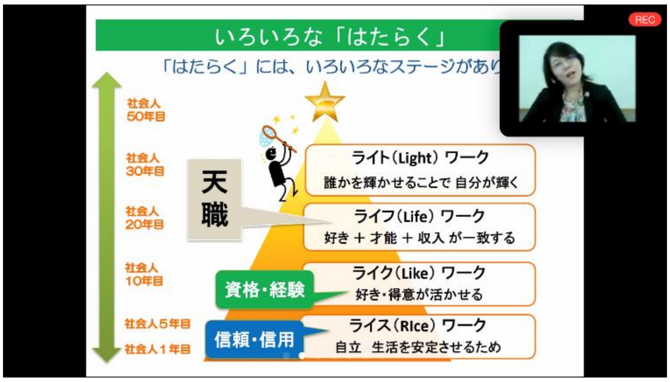
■実施報告

企画①〈沖縄戦遺骨収集ボランティア〉

第1日目は11月7日（土）に、沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の具志堅隆松代表を講師にお迎えし実施されました。講師の具志堅代表からは、「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」とのテーマで、実際の遺骨収集活動の現場の様子や収集された遺骨などの画像を画面で共有しながら、そこから想像し垣間見ることができることを教えていただきました。その後、参加した生徒がグループごとに分かれて意見交換を行い、各グループからの報告と具志堅代表への質疑応答が活発に行われました。

生徒からは「二度と戦争を起こさないために過去から事実を学び、それを未来へと活かしていきたい」などの感想が寄せられました。

企画②〈グローバルセミナー〉



第2日目は11月11日（水）に、グッジョブおきなわプロジェクトの喜屋武裕江代表を講師にお迎えし、グローバルセミナーとして開催しました。講師の喜屋武代表からは、「2030 年　輝く未来は自分で創ろう!！」と題して、沖縄県のおかれた現状や、今後の社会の変化を考察しつつ、一人ひとりのキャリア形成の上で大切なことは何かについて、ご自身の体験も通しながら教えてくださいました。

生徒からは「自分を見つめ直す貴重な機会となりました」、「リスクを疎んで安定を行くよりも、挑戦していきたいと思いました」などといった力強い感想も寄せられました。

企画③〈ひめゆり平和祈念資料館・那覇国際高等学校〉

第3日目は11月14日（土）に、ひめゆり平和祈念資料館説明員の仲田晃子さんを講師にお迎えし実施されました。この企画には、創価高校の生徒とともに、交流を続けている沖縄県立那覇国際高等学校（SGH 校）の生徒さんも参加されました。講師の仲田さんからは、「戦争体験を伝えるかたち～ひめゆり平和祈念資料館の試み」と題して、沖縄戦を体験した元ひめゆり学徒の皆さんが高齢化する中で、資料館が明年のリニューアルに向けて積み重ねてきた取り組みや課題について教えていただきました。その後、参加した生徒がグループごとに分かれて、那覇国際高校の生徒さんとも意見交換を行い、各グループからの報告と仲田さんへの質疑応答が活発に行われました。生徒には「過去の戦争について学ぶことは、”私”にとって必要か？どういう意味があるか？」との問いをなげかけ、ZOOM のブレイクアウトセッションで活発な意

見交換がなされました。

生徒からは、「ひめゆりの生徒の方々が『遠い過去の人』から『自分と同じ年頃の女の子』として、より現実味を持って歴史に触れることができました」、「しっかりと世界史や日本史を学んでいこうとまた決意しました」など今後の学びにつながる発見があったようです。

企画④〈創立者池田先生と沖縄〉

第4日目は11月15日（日）に、沖縄の創価学園顧問である安田　進氏（創価学会沖縄総県長）を講師にお迎えし実施されました。まず最初に、沖縄創価学会青年部の平和運動について、前島常仁氏（総県青年部長）からご説明いただき、沖縄戦を次世代に継承していく地道な取り組みと課題について教えていただきました。そして、安田顧問からは、「創立者池田先生と沖縄」と題して、沖縄戦の概要とともに、恒久平和をめざして池田先生が沖縄の地で小説『人間革命』の執筆を開始されたエピソードなど、ご自身の体験も交えた貴重なお話を伺いました。その後、参加した生徒がグループごとに分かれて意見交換を行い、各グループからの報告と安田顧問と前島青年部長への質疑応答が活発に行われました。

生徒からは「どこか他人事だと思っていた昔起こった戦争に対して自分から知ろうとしてそれを伝えていかなければならないんだと思うことができました」など、今回の機会を通して主体性が高まったことを感じさせる感想も多数寄せられました。

■まとめ

コロナ禍のため、実際に沖縄を訪問してのリアルな学びは実現しなかったが、オンラインを活用することで感染リスクを回避し、当初の目的は達成できたと思われる。また以下のようなことを確認することができた。

〇国内外の遠隔地をリアルタイムで結ぶことが可能になった。（※海外は時差のみ課題）
〇ネット環境と端末環境さえ整えば、どこからでも、何人でも同じ場に集うことができる。
〇行事の実施費用が非常に安価である。
〇ZOOM のブレイクアウトセッション機能やチャット機能を活用することで、さらに双方向性が高まり、教育的効果が期待される。

実物に触れるフィールドワークにまさるものはないが、オンラインを活用し遠隔地との双方向性を担保した学びを確保できることへの手応えを得ることができたと思われるので、今後、様々な場面でのオンラインを活用した交流を推進してまいりたい。

6. グローバルセミナー

■目的

国内外で活躍される有識者・学術者・本校卒業生をお迎えし、講演会・懇談会を開催することによって、生徒がグローバル人材へと成長するための触発の機会とする。一貫校である創価中学校にも広く公開する。

■実施

2020年度はコロナ禍のため、オンラインで4回行った。

※2019年度は15回(9カ国 15組)実施

◆菖蒲川由郷氏(新潟/新潟大学大学院特任教授・厚生労働省のクラスター対策班)

〈開催日・会場〉2020年 6月 30日(火)・新潟と学校の各教室をオンラインで結び実施

〈テーマ〉医学を志して走り続けた20年

〈概要〉

全員登校が再開され、本年初のグローバルセミナーを全校生徒を対象に開催。コロナ禍の中、菖蒲川教授は厚生労働省のクラスター対策班で活躍されており、公衆衛生学の専門的な話から、今回最も私たちに影響を及ぼしているコロナウイルスに関わる話を、貴重でタイムリーで講演をいただいた。生徒が三密になるため講堂に集まることが出来ないため、菖蒲川教授には新潟大学よりオンラインでの講演をいただき、生徒は各教室で話を聞き、双方向で質問もできる次世代型のグローバルセミナーとなった。

◆ 生徒感想より

「公衆衛生学という学問を初めて知りました。最前線でのお話をわかりやすく話していただき本当にありがとうございました。」(高校1年生)

「学園の先輩としてのお話もたくさんいただいて、勇気が出ました。私も先輩のような人になっていきたいです。」(高校2年生)

「コロナウイルスが今後どうなるかわかりませんが、私たちが注意しなければならない点、また医療従事者として包括的に考えられている点など学ぶ事ができました。」(高校3年生)

◆エド・フィーゼル氏(アメリカ/アメリカ創価大学学長)

〈開催日・会場〉2020年 10月 31日(土)・アメリカと学校の各教室をオンラインで結び実施

〈テーマ〉アメリカ創価大学における世界市民教育

〈概要〉

アメリカ・カリフォルニアと東京を ZOOM で結び、遠い距離を越えて同じ空間にいるような気持ちで全校生徒が参加できた。まず、アメリカ創価大学設立の経緯を簡単に紹介していただき、創立者の教育に対する強い思いに触れ、世界市民について「知恵・勇気・慈悲」の3つの視点を中心に話を進められた。他者の痛みを想像して人々と関わる重要性を訴えられ、実際にアメリカ創価大学では広い分野の横断的な教育や研究を通して、いかに世界市民を育成しているかを紹介された。特に世界の著名な方々との交流を通して、学問だけでなく一流の人格を養成するSUAの取り組みが次々と紹介された。

オンライン双方向で生徒からの質問にも答えられ、「高校生として、真の世界市民になるためには？」との質問に、エド・フィーゼル博士は「知恵・勇気・慈悲は自分の日常で、自身が体現していくことが大事です。自分の学問だけを考え、自己中心的に生きるのではなく、他者の痛みを自分の痛みとして助け合うことが大事です。創価高校の生徒の皆さんで、知恵・勇気・慈悲の3つを体現していきましょう！」と呼び掛けられた。一流の知性と人格の方に出会う喜びに、大きく心を躍らせたセミナーとなった。

◆ 生徒感想より

「私は学長が生徒と同じ目線に立って学び続けているということがすごいと感じました。講演の中では、生徒とともに学んでいるとの話はありませんでしたが、もし、学長が生徒とともに学ぶことをやめていたら今の SUA の国際性、他者を受け入れる精神はなかったと思います。学生一人ひとりを考えた、様々な取り組み等もなかったでしょう。学長を始め多くの先生方が真剣に SUA の学生一人ひとりと向き合い考え抜いているからこそ、今の SUA の形があるのだと思います。そしてまた、『私達は地球市民の一人であるということを忘れてはいけない』という言葉も強く胸に残っています。地球市民と聞くと、知識があり、仲間があり、信頼がある、そんな人だと思っていました。しかし、学長は『全員が地球市民であることを忘れてはいけない。特別な人だけがなるものではない」という話をしていたのです。この言葉を聞いた時、『地球市民になるためにはどうすればいいのか？』と考えていた自分が間違っていることに気づきました。そうではなく、『一人ひとりが地球市民としての自覚を持つことが大切だ」と気付かされました。」（高校 1 年生）

◆喜屋武裕江氏（沖縄／グッジョブおきなわプロジェクト代表）
〈開催日・会場〉2020 年 11 月 11 日（水）・沖縄と学校の各教室をオンラインで結び実施
〈テーマ〉2030 年　輝く未来は自分で創ろう!！
〈概要〉

沖縄フィールドワークの1つとして実施。沖縄県のおかれた現状や、今後の社会の変化を考察しつつ、一人ひとりのキャリア形成の上で大切なことは何かについて、ご自身の体験も通しながら教えてくだった。生徒からは「自分を見つめ直す貴重な機会となりました」、「リスクを疎んで安定を行くよりも、挑戦していきたいと思いました」などといった感想が寄せられている。

◆ 生徒感想より

「講義を聴いて、ものすごく勇気をもらえました。正直に言うと、今の自分の人生にあまり生きがいが感じられず、将来の夢や今までの行動も自分の意思で決めていなかったように思えます。しかしお話を聴いて、もっと自分の意思で行動し、少しでも心の成長をしようと思いました。この先の人生楽しいものにならないんじゃないかと思っていましたが、そんなことはないんだと気付かされました。」

「喜屋武さんは様々なプロジェクトを立ち上げられていて、資格もたくさん取られているので、育ってこられた環境を知り、少し驚きました。初めから高い志を持っていらっしゃったのではなく、保健室登校から少しずつ自分が今できることに挑戦していかれた生き方に、感銘を受けました。また『働く』とはどうい

う事なのかを学び、夢・感謝・挑戦を忘れず、人のために行動できる自分に、また自分で今何のために何をすべきかを正しく選択できる自分に成長していきたいと思います。質問にも的確に答えてくださって、特に「0 から 1 を創る」という人間性の捉え方に深く共感しました。沖縄に関する情報もたくさん知ることができ、『風のマジム』を読んでみたいと思いました。」

「21 歳で視覚障害の宣告をされてからそれでも諦めることなく希望を見出して今このようにご活躍されてる姿に感動しましたし、すごく勇気をもらいました。輝く未来とは何か？何のためにはたらくのか？今自分たちは何を始めるべきなのか？と、今まで深く考えていなかったり、自分の中で明白な答えを見つけられていないままだった疑問に向き合い、自分を見つめ直す貴重な機会でした。AI 化や社会の変化によりパラダイムシフトしていく中で私たちに求められているものも変化していて、新たな価値を創造することがより重要になると思いました。そのためには日々できることを増やし可能性を広げること、また勇気を持って何かに挑戦していくことが必要なのかなと思います。思うだけでなく、実際にどう行動に移していけるかが重要だと思うので、今自分にできることを考えながら、30cm の勇気を実践していきます。」

「『働く』」ということにフォーカスして学べたのが良かったです。自分で考える・自分のことに置き換える時間も頂いて、自分自身が何をすべきか再認識出来ました。『何のため』など、学園の指針・重要視していることと多くの点で合致していることに気が付きました。

私も離島出身なのですが、離島では、できる仕事が限られていることを感じていました。

ですが、新しい職業を作っていくということで、どこでもできることは無限にあるんだなと分かりました。

◆西沢俊広氏（筑波大学／NEC ドローンの運行管理システム開発（国家プロジェクト）リーダー）

〈開催日・会場〉2020 年 11 月 17 日（火）・筑波と学校をオンラインで結び実施

※高校3年生は講堂、1，2年生は各教室

〈テーマ〉Towards the future society of robots and drones

〈概要〉

ロボット・ドローンの研究開発を通し、ドローンが安心・安全に日本のそして世界の空を飛び交えるようにするための国家プロジェクトの責任者として、近未来の話をされた。研究開発だけでなく法制度設計や政策提言などの話もいただいた。

◆ 生徒感想より

「20 期西沢俊広さんの、自分の夢を追い求め、社会のために活躍されているお話を聞き、自分も同じく宇宙開発技術者となるため、諦めずに挑戦し続け陽を思いました。」（高校 3 年生）

「私は英知の日記念講演を通して、ロボットと宇宙開発の最先端を走ってきた方が学園の先輩であることをとても誇りに思いました。西沢さんのお話の中で、宇宙でなくても何かの分野で第一人者になっていただきたいといわれたことが心に残りました。」（高校 3 年生）

「20 期の卒業生西沢さんに『ドローン研究』や学園時代についてや、学園生へのメッセージをお聞きしました。私はその講演の中で『生涯勉強』という言葉に感動しました。」（高校 3 年生）

「西沢博士の開発したロボットがなんと漫才にまで応用の幅を広げていることに私はとても驚きました。私も、自分の興味のある哲学の分野でそのような新しい価値創造をしたいと思いました。」（高校 3 年生）

7.　世界市民探究(GCIS)

A） 概要

SGHの活動のレガシーとして、SDGsをはじめとした地球規模課題を私事化するために、「私が世界をかえていく」をメイン・ビジョンに掲げ、3年間を通じてデザインされた探究学習を本年度1年生より年次進行で開始した。名称を GCIS (ジーシス:Global Citizenship Inquiry Studies)とした。1・2年生は週1時間、「総合的な探究の時間」を利用する。

■ 総合的な探究のねらい

・アイディアや価値を創造し、課題を解決する力
- ・どんな困難な状況に対しても負けじ魂で乗り越えてく強靭な体力と精神力
- ・基本的な知識や、問う力、批判的・論理的思考力などの課題発見に必要な力
- ・適切な情報にアクセスし、取捨選択する力などのリサーチリテラシー
- ・プレゼンテーションなど、あらゆる形態の発表で相手にわかりやすく伝える発信力
- ・ポートフォリオ作成等による、自分自身を俯瞰して振り返る力

■ 各学年別の目標

- ・1学年…探究学習の手法を理解し、基本的な「課題発見力」「リサーチリテラシー」を身につける
- ・2学年…獲得した探究学習の手法を活用し、社会(専門家)と触れることでさらに深化させて、その内容に対して「アクション・プラン」を提案し、発表を行う。
- ・3学年…蓄積してきた知識や技能・思考力を客観的に認知する。大学(学士課程)で必要とされる資質・能力を身につける。最終的に、解決困難な地球規模課題であっても、自らの力で解決に導くとの誓いを仲間と共有する

■ 運営方法(2020年度　1年次の実施形態)

週 1 時間(1 単位)。授業は学級担任と探究科教員による TT で行う。活動は、4～5 人 1 グループで行う

■ GCIS のグランドルール

運営に際しては、本校の育てたい資質能力に基づき、GCIS の活動におけるグランドルールを設定し、徹底させる。

- **相手を否定しない・傷つけない(信頼と尊重)**
- **自分の持ち時間を意識する(時間管理)**
- **理由(根拠)を明確にする(論理性)**
- **あいずちを大切にする(共感)**
- **質問は新しい価値を生む(対話力)**

2020 年度は、コロナ感染症により、実質6月からのスタートとなり、計画を大きく変更することとなった。その中で、本年度実施ができた、あいまいな日本語探究と食品ロス探究が柱となる2つの探究活動となった。

B） あいまいな日本語探究

・探究入門編として設定。身近なトピックで、探究活動の楽しさを体感する。

・一般財団法人　理数教育研究所主催・「算数・数学の自由研究の歩み」で、2017 年度審査委員特別賞となった、広島県広島市立江波小学校6年　重本　慧くんの『「ちょっと」ってどれくらい？』を参照に、答えがない内容を定量化する。

・4～5人のグループで指定された「あいまいな日本語」を定量化し、再定義する。

各グループは、このいずれかのトピックをランダムに担当する。

「だいたい」ってどれくらい？
「一言」ってどれくらい？
「すぐ」ってどれくらい？
「おじさん」ってどういう人？
「まあまあ」ってどういうこと？
「適当」ってどの程度？
どこから「あっち」でどこから「こっち」？
「たぶん」ってどの程度？
「たくさん」ってどれくらい？
「ずっと」ってどれくらい？
「もっと」ってどれくらい？

Google form を使用して、クラスの生徒にアンケートを実施し、一次資料として活用する。アンケート項目は自分たちで作成し、それを分析する。

アンケートの質問例：「あっち」に関して
問 1．あなたは、「あっち」という言葉をどのようなときに使いますか？
問 2.問 1 で回答したような状況を距離で表すとき、貴方はどのくらいの長さを考えますか？
問 3．あなたは、「こっち」という言葉をどのようなときに使いますか？
問 4.問 3 で回答したような状況を距離で表すとき、貴方はどのくらいの長さを考えますか？

・中間発表会を実施するここでは、Google スライドにまとめた内容を、全員が他クラス同一テーマのチーム間で行い、情報の交換を行う。また、この必要な情報とデータを相手から借りる交渉をし、「剽窃・盗用」の講義と合わせて、2次資料としてかならず引用元を表示することを指導した。

生徒には、初めての探究活動につき、自走を促せるようにロードマップを示し、これを埋めながら、各グループの活動計画をたてるように指導を行った。

■ ロードマップ

世界市民探究 GCIS「あいまいな日本語探究」

あいまいな日本語探究　ロードマップ

例）「ちょっと」ってどれくらい？

1.研究しようと思ったきっかけ

お母さんに「ちょっと休憩が長すぎる」と指摘され、みんなの「ちょっと」はどれくらいなのか疑問に思った。

▼

▼

2.研究の方法

地域の人にアンケートをとり集計する。

▼

3.研究の内容

その 1.

「あなたにとってのちょっと休憩はどれくらい？」という内容のアンケートをとる。

▼

平均は 11.25 分という結果になる

▼

ミッションとして与えられているものです。あいまいな日本語を"定量的に"定義する方法を考えていきましょう。

どのようなアンケートを実施するか？

アンケート以外に調査を実施するか？

例）インタビュー・文献調査・観察・実験・データ分析

アンケートの結果はどうだったか？

▼

しかし、「何分に対してちょっと休憩なのかわからない」という指摘をうける。

▼

その2.
「40 分勉強した時のちょっと休憩はどれくらい？」という内容のアンケートをとる。

▼

平均は 14.625 分。40 分に対して37%という結果になる。

▼

このパーセンテージはどんな場合にあてはまるのか疑問をもつ。

▼

▼

その3.
5cm の紙テープに対して「これよりちょっと長いものを作ってください」という内容のアンケートをとる。

▼

平均は 5cm に対して＋1.33cm という結果となり、27%となった。

▼

▼

▼

▼

4.研究結果のまとめ

時間は 37%、長さは 27%と差が生じることがわかった。しかし、2 倍以上になるという結果はなかった。「もととなる数」に対して、等しい場合や何倍と言った数であらわせない場合に「ちょっと」を使うのではないか。

▼

5.感想と課題

40 分に対して休憩は 5 分程度であるべきというお母さんの指摘は他の人の感覚とずれている。
他にも何種類もの「ちょっと」をデータ化してみるともっと面白い結果が得られるかもしれない。

改善すべきポイントや課題

改善したポイントとその結果

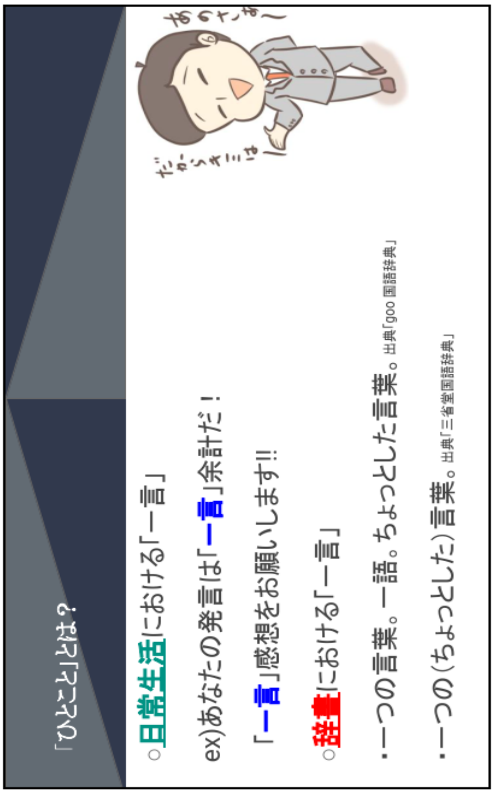
別の「観点」から多角的に分析してみよう

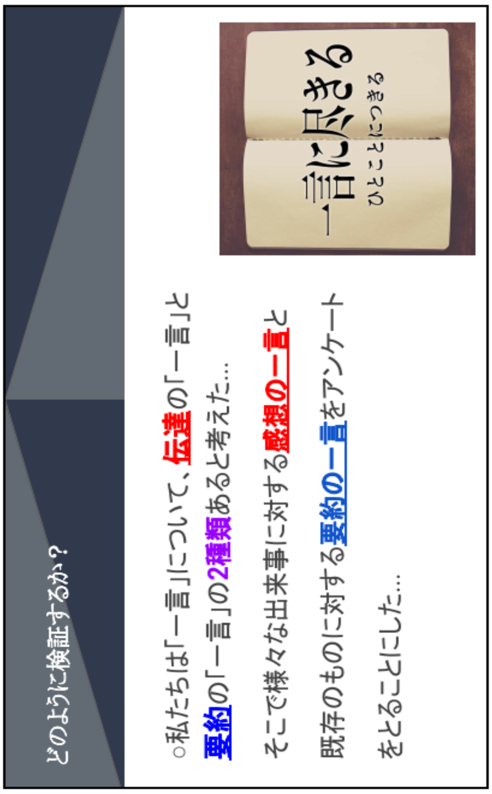
結果をまとめましょう

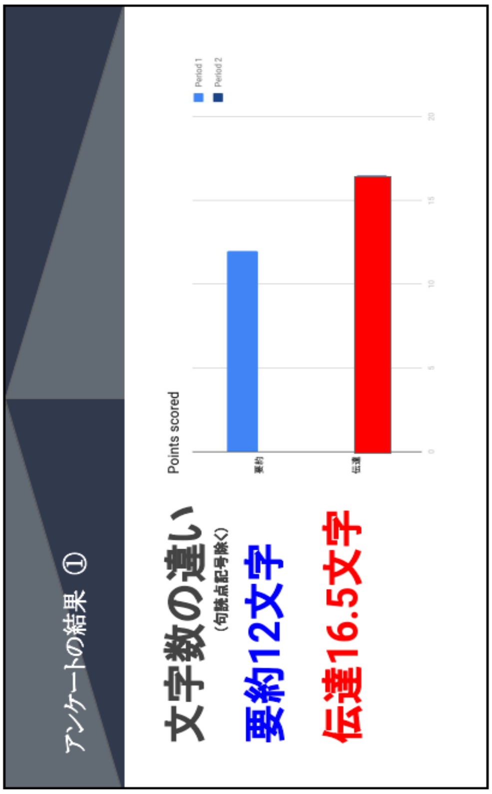
なお、生徒には活動の事前に以下の評価観点のルーブリックが提示されている。

	A	B	C
アンケート	必要な回答を得るために適切な質問がなされている。（改善点も修正され補われている）	必要な回答を得るために適切な質問がなされているが改善の余地が残されている。	必要な回答を得るためになされた質問があまり適切ではない。
手法	アンケートだけでなく、様々なアプローチ(他の手法)で根拠を示そうとしている。	アンケートだけでなく、もう一つの別の手法で根拠を示そうとしている。	根拠がアンケートのみになっている。
根拠	数値や統計データを使用して、明確な根拠を提示することができている。	数値や統計データを使用して、根拠を提示しているが、他にも一定の解釈ができる余地がある。	数値や統計データが不十分で、根拠もあいまいである
観点	一つの観点だけでなく、様々な角度からも分析されている。	一つの観点だけでなく、もう一つの角度からも分析されている。	一つの観点のみの分析にとどまっている
結論	分析した結果から導き出した結論に納得できる。	分析した結果から導き出した結論に納得できるが、一部疑問の余地がある。	分析した結果から導き出した結論にあまり納得できない
発表	原稿をほとんど見ずに相手に向かって堂々と発表している。	原稿を見ながらも、相手にも目を向けて発表している。	原稿からあまり目を離さず、相手にもあまり目を向けられていない。

■ 生 徒 代 表 グループスライド 作 品





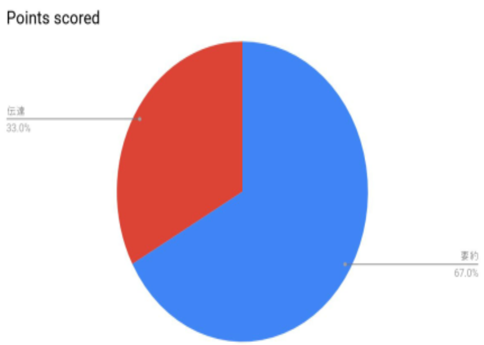


アンケートの結果 ②

句読点をつけた人の割合

要約 67%

伝達 33%



アンケートの結果を踏まえて

要約と伝達→だいたい何文字でまとまるのか分かった。

……実際に日常生活では**何文字が伝わりやすい**？

句読点の情報は何に使える？…

一言で伝える＝**無意識**に自分が伝えたいことを**簡潔に**している？

つまり**一文では伝えきれないのでは**？…

⇒実際に**情報を伝達する仕事**ではどうなのか　調べる必要がある…

別の観点から

日本最大級のニュースサイトである

Yahoo!ニュースのトピック・・・約**13**文字

テレビのテロップ・・・おおよそ**15**文字以内

→要約する時には**13文字**前後が伝わりやすいと考えられる

プレゼンに必要な**13文字の法則**

(http://kiokulabo.com/presentation)

結論

一言とは、私達が誰かに伝えたいことを「**的確かつ短的に伝える手段**」である。

一言を**言葉**にするときは一文ではまとめきれない…

一言を**文字**に起こすときは一文でまとめられる…

⇒**13文字**の**キーメッセージ**を日常に取り入れよう！

■ 授 業 計 画

創価高等学校・探究科「世界市民探究(GCIS)」　指導計画書（三密回避ver.)

教科	探究科「世界市民探究(GCIS)」	担当教員	各担任・探究科教員
実施年月	2020年7月-9月	単元名	あいまいな日本語探究
本時の目標	あいまいな日本語の探究を通して、「探究の手法」を理解し、「リサーチ力」「分析力」「論理的な思考力・判断力」を養い、効果的な発表の仕方を学ぶ。		

項目	項　　目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
1時限目	自己紹介	自己紹介 もちもの「A4フラットファイル」chromebook 評価の仕方 新しいグループの確認・席移動	7	密をベースに、現在の席を元に担任作成 ワークシート配布
	グループ分け ・アイスブレイク	グランドルールの設定 自分の意見(2分）→グループ共有(6分)	9	
		身の回りの「あいまいな言葉」をあげてみる 個人で付箋に書く(2分)→グループ共有(6分)	9	※塩野直道記念 第5回「算数・数学の自由研究」(2017年) 審査委員特別賞(広島県広島市立江波小学校６年 重本 慧 くん)
	レクチャー ミッション提示	『「ちょっと」ってどれくらい？』を紹介※ 画面で表示しながら、内容をダイジェストで担当教員が伝える	5	個人で読む（７分） →G内で共有（２分）
		各グループのミッションを提示する (封筒に入れたミッションの紙をわたす) 【ミッション】 1「だいたい」ってどれくらい？ 2「一言」ってどれくらい？ 3「すぐ」ってどれくらい？ 4「おじさん」ってどういう人？ 5「まあまあ」ってどういうこと？ 6「適当」ってどの程度？ 7 どこから「あっち」でどこから「こっち」？ 8「たぶん」ってどの程度？ 9「たくさん」ってどれくらい？ 10「ずっと」ってどれくらい？ 11「もっと」ってどれくらい？	2	封筒作成（児玉） ２セットあり。回収 数が少なければ、後ろから減らす
	探究を始める 道筋を立てる	根拠を探そう	4	
		場面の想定 個人2分→グループ　5	7	
		振り返りはフォームに載せます。	2	

2時限目	イントロ	前回の課題：A4ファイルを用意しましたか？ →ファイルにいれる。 →このあと、cinemo返却をします。 宿題が出てますね？ドキュメンタリー観た？/10	3	ロードマップのテンプレートを示す アンケート作問の基本ワークシート作成
		aiGROWの紹介 3 個人IDの配布 →宿題とする（次回までに提出してね） 学校の資料と、他の生徒の評価も加わるので、来週まで宿題で進められなかった人は、居残りをして放課後にやってもらいます。	5	
	レクチャー	前回の課題を共有しよう 仮説を立てよう	5	
		「あいまいな日本語」についてワークシートにそって探究を始め、今後の道筋を立てる	6	相互評価は７月末にお願いします。
	作業	アンケートの作り方のポイント 【ポイント】 ・アンケートは長すぎず、短すぎず ・回答者の属性はどこまで把握すべきか ・記述式？それとも選択？ ミッション：今週と来週の半分を使って、google formのアンケートを作成し、リンクを提出する。夏休み中に実施する。２学期最初までにデータを回収する →関門：アンケート報告書をチェックしてもらう→Google form作業へ ・ロードマップの説明		今回は気質調査（20 min)と自己評価（7-10 min) →残りの他者評価は次回に２５分とって実施
		ルーブリックの提示と解説 ワークシートにそって探究を行う (アンケートの素案を考える)	26	１回目フォーム提出 1:38 2:40 3:40 4:41 5:37 6:38 7:41 8:40
社会と情報	レクチャー	Googleフォームを使ったアンケートの作成	20	回答が終わらなかった場合は宿題
		実際にグループで作業 各グループのアンケートに回答者となって回答	10	
3時限目	レクチャー	Googleスライドにまとめて発表することを伝える 【発表のルール】 ・各グループ5分 ・スライドは何枚作成してもよい ・1人1ページ以上は必ず担当する ・グループ員は必ず発表できるようにする ・原稿は作成する（発表は見ないように努力する） ・アニメーションは使用せずシンプルに	10	
	作業	アンケート結果の分析をしながら、ワークシートにそって探究を行う	40	
4時限目 (ここから２学期)	レクチャー	【発表について】 ・一人ずつ端末をもってグループの代表として発表する ・発表を聞く人はルーブリック評価を行う	10	原稿のあり方（作る、発表のときには見ないように目標とする）
	発表準備	発表にむけて準備を行う	20	
	発表練習	グループごとに発表練習を行う	20	

5.6時限目 9/26(土) GCIS企画	移動・着席 クラス横断 移動 ブラッシュアップ	指定された教室に移動し、着席する 同じテーマを扱うグループ同士でクラス横断で集まり、発表を行う【発表方法要検討】 クラスに戻る 聞いてきたことを報告し合い、グループごとにブラッシュアップを行う	5 20 5 20	
7時限目 GCIS企画	クラス発表 振り返り (グループ) (個人)	グループごとに発表を行う【発表方法要検討】 オーディエンスのルーブリック評価をもとにグループごとに振り返りを行う 個人の振り返りを行う	40 15 10	
課題	当日、アクセスが集中してGoogleスライドがうまく表示されないリスクを考えて、PDFに変換したものをローカルに保存させておく			
講評	ルーブリックに発表の仕方もいれる（原稿を見ないでつくる）			

C） **食品ロス探究**

・世界的な問題でありながら自分事として捉えられる課題を設定。

・社会へのアプローチを意識した「アクション・プラン」の作成を目標とする。

・文献調査・リサーチの方法を学び、論理的に考え、根拠を明確にすることを求めた。

・講義として、参考文献の収集方法、ポスタープレゼンテーションの作り方、インタビューの手順、なぜなぜ問答（三段論法）を行う。

・生徒はクラス内で食品ロスの発生する以下の4つの分野から、自分が探究活動を行いたい分野を選び、グループを作成する。

分野　A：農家などの生産者・食品のメーカー
分野　B：コンビニやスーパーなどの小売店
分野　C：レストランなどの飲食店
分野　D：家庭

・グループが決まると、ロードマップに基づき、各グループで探究活動をおこなった。

■ ロードマップ

食品ロス探究　ロードマップ　　　　　　　　　組　　番 氏名

1.調べる/リサーチ

食品ロスの自分たちの担当する分野に対して、現状や課題などを知るために文献調査/リサーチをしていこう。**『「食品ロス」探究　文献・資料リスト』**に調べたことをまとめていきましょう。メディアの信頼性にも意識をしながら、調べていくようにしましょう。

今回のミッションは、**食品ロスを減らしていくためのアクションプランを作成**して発表をすることです。そのために、現状を詳しく知る必要があります、

どのようなことを知る必要があると思いますか。

それを知るためにはどのような調査を実施するか？
例）インタビュー・文献調査・観察・アンケート・実験・データ分析

2.課題を見つける/課題発見

調べてきたデータを共有・分析し、何が原因で食品ロスが起きているか、改善をしたら食品ロスが減るかもしれない課題をみつけよう。課題が見つかったら、さらにその周辺の調査を行って裏付けを行うとよいでしょう。

調査の結果、課題はどこにあると考えられますか？

3.提案する/アクションプラン

食品ロスを減らしていくために、その課題を解決するためのアクションプランを作成しましょう。

その際は、すでに行われていることかどうか、調べてみることも重要です。もしも行われていた場合は、＋αの発想を付け足しましょう。

アクションプランの作成

先行事例がないかも確認しよう

アクションプランを行った場合、課題が改善されるのか、論理が通っているのかは丁寧に確認をしましょう。

4.発表をする/ポスターの作成

自分たちのアクションプランを聞く人たちに伝わる形にまとめて、発表をしましょう。このときには説得力を増させるためにも必ず使ったデータなどを用いてください。そして、必ず出典を明らかにしましょう。

結果をまとめて発表をしましょう。

5.感想と振り返り

しっかり振り返り、自分の力として次の探究につなげていきましょう。

・食品ロス探究の最終発表はポスター発表の予定であったが、オンライン授業期間が続き、オンラインでのポスター発表に切り替えて実施。フォームを使って相互評価をし、分野ごとの代表発表グループを決定。

・最終発表会にて、各分野の代表発表グループが発表。公益財団法人日本フードバンク連盟理事の田中入馬氏が参加され、講評もいただいた。

■　食品ロス　授業計画（2020年度）

2学期	1	食品ロス　QFT
	2	食品ロス　4コーナー
	3	動画・文献調査
	4	インタビューの仕方・作業
3学期	5	G 情報収集・発表・ポスター・アクションプラン
	6	G 情報分析
	7	各 G で作業（土曜　LHR にて）
	2/17	テーマ別発会（学年）
	2/20	最終発表会（学年）
	8	振り返り

■代表グループのポスター

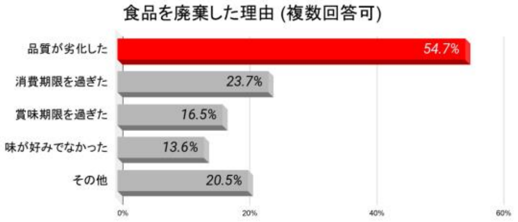
家庭からなくそう！食品ロス！
- 適切な方法で賢く保管 -

日本の家庭における食品ロスの現状

現在日本では毎年約612万トンの食品が捨てられている。そのうち**約280万トンが家庭から**廃棄されている。

これは国民1人あたり**毎日茶碗1杯分**の食料を捨てることと同じ量である。

食品を廃棄した理由を問うアンケートでは、**54．7%**の人が**品質の劣化**を原因にあげた。



どのような対策が必要か

適切な保管方法の表示の義務化

どのようにすれば食品を長い間保存できるかという情報を食品のパッケージなどに表示する。

このプランでは、適切な保管方法の普及による

・**食品の劣化の防止**

・それに伴う**廃棄量の削減**　が期待できる。

メリットは何か

消費者

食品を新鮮なまま**長期間保存**できる

生産者

自分の生産したものを
有効活用してもらえる場が増える

環境

ゴミの量が減り、
焼却時の**排気ガスの量も減る**

適切な保存方法の例

肉類

ラップで包み、ファスナー付き保存袋に入れて冷凍

根菜類

新聞紙に包み、冷暗所で保存(夏場は冷蔵庫へ)

参考文献

- 食品廃棄削減に向けた消費者意識調査結果報告書 ー 国民生活産業・消費者団体連合会 事務局
- 食品ロス量（平成29年度推計値）の公表について ー 農林水産省
- 家庭でできる食品安全-食べ物の購入から後片付けまで / 食品の安全な保存方法 ー 農林水産省 食品・安全保存局

のこしたらだめ

学食の食品ロスはアプリで解決

グループ発表者名前：髙橋　森川　永井　掛水

イントロダクション：リサーチトピックの背景と設問

最初に学校から与えられたトピック＝レストランから出る食品ロスについて
→しかし、レストランへの直接のアクションは難しいのでは？

そこで私達が普段食べている、深く関わっている学食で発生する食品ロスについて調べることにした。

[イラスト出典:かわいいい素材集いらすとや より]

データと分析：アンケート結果（協力 エームサービス）

Q.残飯が出る原因は？

1予想外のメニューが人気となった場合
2想定食数に届かない場合

Q.食品ロスを出さない工夫

1人気メニュー、当日の気温などを考慮した予測設定数の決定
2正確な、登校人数、喫食数の把握

	食品ロスの量(kg/日)
仕込みの際	7~12kg
食事を提供した際	35kg

1日で使う食品は約320kg!

結論：正確な食数を把握することができれば、食品ロスを　かなり削減できるのでは？

アクションプランとその方法

→→→学食メニュー希望調査アプリ

①毎朝のHRの時間にその日の学食の希望をアプリで選択
②リアルタイムでどのメニューがどのくらい人気かを把握できる

※お昼に間に合わせるため、10時までなら希望変更可能とする

アクションプランの効果

①エームサービス側の効果

正確な食数の把握 ⇒ **想定食数と実際の食数との差＝調理時食品ロスの削減**

②学生側の効果

リアルタイムでメニューの選択割合の把握 ⇒ **行列の解消・昼食時間の確保**／**時間が足りず残されてしまう学食の減少で提供した際に出る食品ロスの削減にもつながる**

参考文献

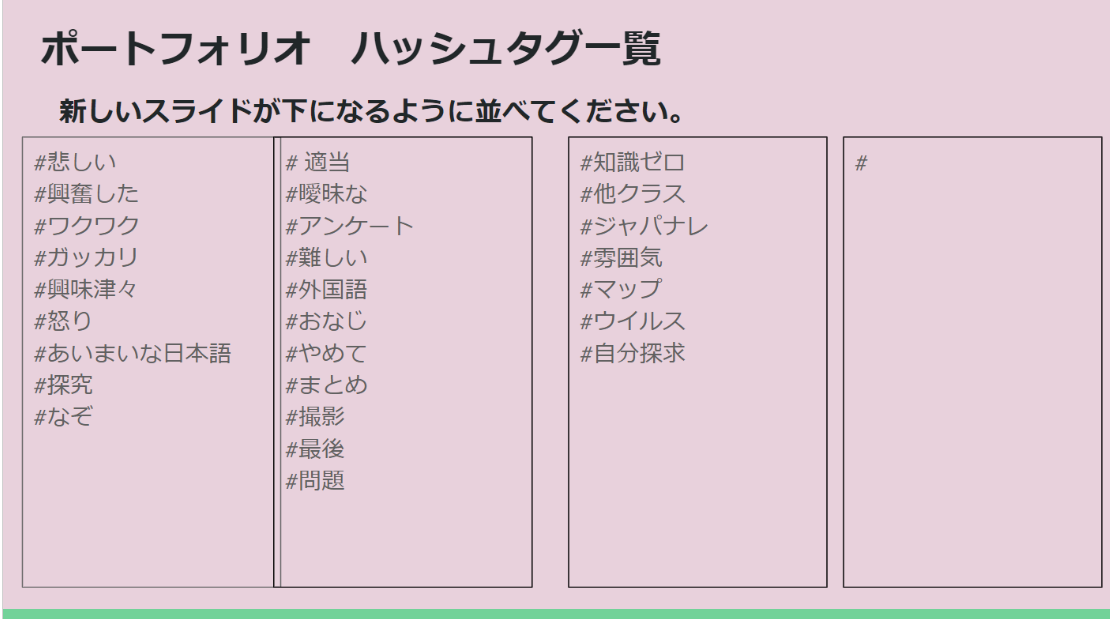
・アンケート(協力:エームサービス)

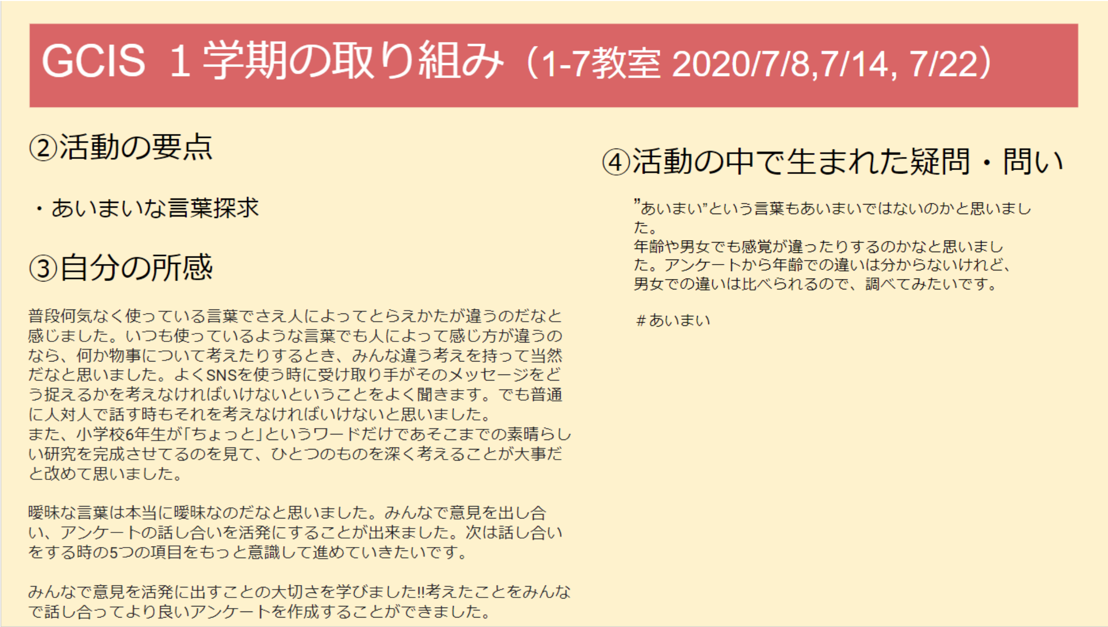
D） 評価と分析

■ 自己評価

自分自身の振り返りとして、google スライドを利用して、ポートフォリオを毎回の授業で記載することを課題として設定した。自分での振り返りのために、それぞれのポートフォリオにハッシュタグ（＃）をつけて、その時の感情やキーワードをトップページに掲載することとさせた。最後に、GCIS を終えてのまとめを記載させた。最初にテンプレートを明示し、活動の要点、自分の所感、活動の中で生まれた疑問を含めることを条件とした。なお、装飾や項目の追加、変形などは自由とした。

生徒ポートフォリオの例





■授業評価の方法

総合的な探究は、年間で A,B,C の3段階で評価されるが、各学期終了時に A,B,C の評価を通知した。その際の評価項目は、探究活動開始の前に、活動の評価基準をルーブリックにして明示した。

発表の評価項目は、作成したポスター、グループでの発表の様子の録画提出、ポートフォリオの作成、課題ファイルのチェック、となっている。

2020 年度　探究科評価　　２学期　ABC 評価　　＿＿＿＿＿　　２学期欠時数（０）

①あいまいな日本語探究	A
②ポートフォリオ	A
③プリントファイル	A
<1・2 学期総合評価>	A

＜観点別評価基準＞

①あいまいな日本語探究

A	D
提出	未提出
3	0
3 学期は探究の内容を評価対象とします	

②ポートフォリオ

S	A	B	C	D
授業回数分の記録が丁寧に残っていて、探究のスライドが貼られている	複数記録が残っていて、探究のスライドが貼られている (貼られていなくても回数分の記録が丁寧に残っている)	複数記録が残っている	ほとんど手をつけていない	授業の出席がなく未入力
4	3	2	1	0
3 学期 A	3 学期 B	3 学期 C	3 学期 D	

③プリントファイル

A	B	C
プリントの枚数がだいたい揃っている	半分程度のプリントが揃っている	未提出
3	2	0

<1・2 学期総合評価>

A	B	C
10・9・8	7・6・5	4・3・2・1・0

２学期の探究への取り組みは、皆さん素晴らしいものでした！今回はその取り組み自体に評価をつけています。また、探究学習では大その内容をきちんと振り返ることが切です。3学期は皆さんの個人の取り組みにも重点をおいて評価をします。赤字の内容になることを留意して計画的に進めてください。

■生徒の資質・能力における GCIS の効果と評価

GLPの活動の評価方法と同じく、創価高校の SGH プログラムの効果を、客観的な生徒の資質能力の変容を可視化することが課題と考えた。そこで、IGS 株式会社の実施する Ai GROW を用いて資質能力を測定し、多角的で定量的な手法に基づき、客観的な評価を行った。質問項目においては、本校の SGH でも使用されている「創価学園の育てたい資質能力」に基づき、15のコンピテンシー項目が設定され、それぞれがスコア化された。

IGS 社によれば、Ai GROW は、「3,800 万件を超える評価データを基に個人の資質・能力を分析する評価ツールで、潜在的な性格の他、相互評価と AI による補正によってコンピテンシーを正確に評価・分析することが可能となる。これにより、自己の強みと課題を客観的に把握することができ、将来のキャリアを具体的に考えるきっかけとともに『自己肯定感』の向上にもつながる」。この取り組みは、GLP28名で先行実施し、その成果を踏まえ、1年生において測定したいコンピテンシーは、GLP と同様の15項目となった。

表 1. 獲得させたいグローバル人材の資質・能力一覧

【認　知】	疑う力	【他　者】	影響力の行使
	論理的思考力		寛容力
	創造性		柔軟性
	課題設定		共感・傾聴力
【自　己】	決断力		表現力
	耐性	【コミュニティ】	組織へのコミットメント
	自己効力		地球市民
	個人的実行力		

【調査実施時期】

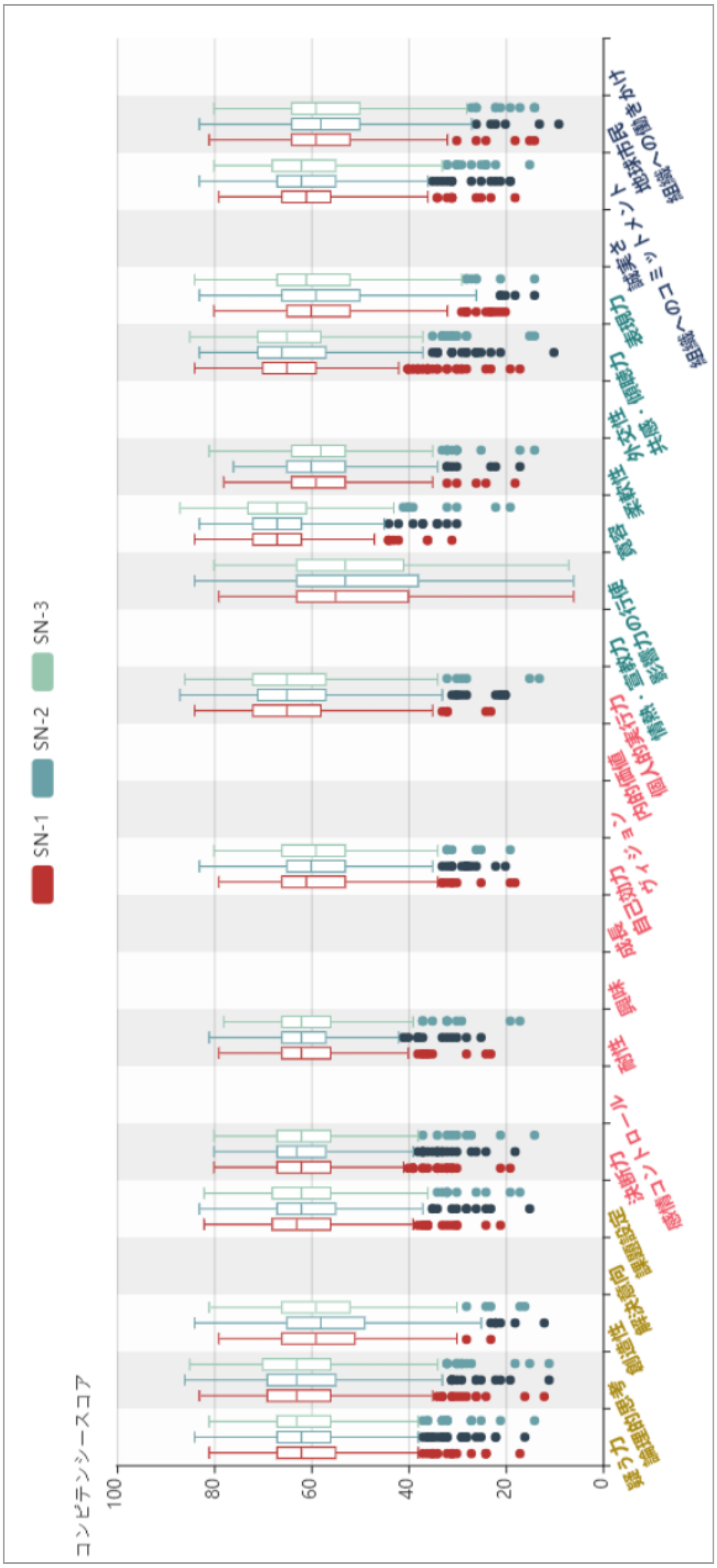
3回行われた

①2020年7月： 1学期の GCIS 活動の終了時。気質測定と自己評価およびクラス内での相互評価

②2020年12月：2学期の期末考査終了後。自己評価およびクラス内での相互評価

③2021年3月：3学期の学年末考査終了後。自己評価およびクラス内での相互評価

表 2. Ai GROW の 3 回分の変容



汎用
SN-1　2020年7月
SN-2　2020年12月
SN-3　2021年3月

【分析】
今回実施した15のコンピテンシーは GLP のような大きな差は出ていないが、1学期当初より全国的な平均スコアよりも高くなっている。12月の実施では、ほぼすべてのスコアで向上が見られる。とりわけ「寛容」と「組織へのコミっと面」のの項目での向上が堅調であった。これは入学からオンラインがメインで過ごした直後の1学期7月から、「あいまいな日本語探究」はじめ、探究活動や日々のアクティブ・ラーニングが安心のコミュニティを作ったことに起因すると思われる。
第3回は、全体として着実な向上がみられた。特に「疑う力」、「論理的思考」、「創造性」の項目が着実に上がり、変容があることが読み取れる。

8. <u>時間管理手帳</u>

■目的
時間管理能力育成(タイムマネジメントの指導法開発)

■実施
SGH の取り組みの一つとして、生徒の時間管理能力を育成し、PDCA サイクルを習得させるため、時間管理手帳(以下、〈スコラ〉)を全生徒に配付して活用しています。コロナ禍で、不定期ながらキャリア教育推進委員会をオンラインで実施したり、オンラインの職員会議なども活用し、各学年の取り組みを共有しながら生徒への指導・激励を行いました。
オンライン学園祭では、校内手帳甲子園のサイトを立ち上げ公開しました。その中で優れた取り組みを、第 9 回手帳甲子園(主催:NOLTY プランナーズ)にエントリーし、大前明日香さん(2 年)が「表紙デザイン部門」において佳作賞を受賞しました。

■本校の取り組みについての報道
新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言下の休校期間では、本校の時間管理手帳への取り組みが多くの報道機関で取り上げられました。
「休校期間も生徒がセルフマネジメント」(NOLTY プランナーズによるプレスリリース)とのタイトルの記事が、50 を超えるネット配信ニュースで紹介されました。
また、2020 年 4 月 3 日付け『読売中高生新聞』と、2020 年 6 月 14 日(日)付け朝日新聞朝刊とともに発行された【朝日新聞 EduA】の紙面で、第 8 回手帳甲子園「手帳活用部門」で最優秀賞(全国第 1 位)を受賞した深瀬真歩さん(2 年)のインタビュー記事が掲載されました。

■〈スコラ〉効果測定
NOLTY プランナーズが〈スコラ〉を活用している全国の生徒に実施した効果測定(2020 年 9 月に Web アンケートで実施／95,935 名が回答)では、「手帳の使い方で参考になったものはありますか？(複数回答可)」と「手帳をいつ使ってしますか？(複数回答可)」の質問項目について以下のようなデータが測定されました。本校においては、同級生から手帳の使い方について学ぶ割合が全国平均よりも高い数値が継続している。しかし今年度は、休校期間が長引いたため、例年行ってきた校内での活用事例紹介の機会(TV 放送や掲示物)が不足した

ため、例年より数値が低くなったと推察される。また、時間管理とともに、自分が気づいたことやアイデアをメモする割合が全国平均よりも高い数値も継続している。

ジェネリックスキルの成長を測るPROG-H（河合塾）の2年生の受験結果によると、「課題発見力」の平均値が3.26（全国平均2.7程度）、「計画立案力」の平均値が2.98（全国平均2.6程度）という高い数値で測定されました。スコラによる日常的なトレーニングが、これらのコンピテンシーの育成に貢献しているのではないかと推測しています。

	「手帳の使い方で参考になったものはありますか？」（複数回答可）						「手帳をいつ使っていますか？」（複数回答可）					
	同級生の手帳（全国平均）						気づいたことやアイデアをメモする時（全国平均）					
	1年次		2年次		3年次		1年次		2年次		3年次	
〈53期生〉	2020年度	14.23% (12.38%)	–	–	–	–	2020年度	11.24% (8.06%)	–	–	–	–
〈52期生〉	2019年度	30.97% (14.45%)	2020年度	26.76% (15%)	–	–	2019年度	38.94% (19.90%)	2020年度	11.26% (8.17%)	–	–
〈51期生〉	2018年度	30.96% (16.85%)	2019年度	34.85% (15.35%)	2020年度	23.73% (14.35%)	2018年度	40.84% (22.30%)	2019年度	38.48% (18.41%)	2020年度	11.69% (9.38%)

9. 評価と分析

A） アンケートと分析

■生徒対象のアンケート

2021年3月、SGH活動に関するアンケートを全校対象に行いました。今までは紙媒体であったものを端末のプラットフォームから入力出来るように変更しました。しかし今年度は年度当初から在宅でスタートし、授業確保が最優先であったため年度当初のアンケートを取ることはできていません。今年度、アンケートを取るにあたり、以下のことが予想されました。

①オンライン授業がメインとなり、SGHに関する授業が主要教科に比べて後回しにならざるを得なかったため、グローバル課題に関する内容については、例年よりアンケート結果は悪くなる。

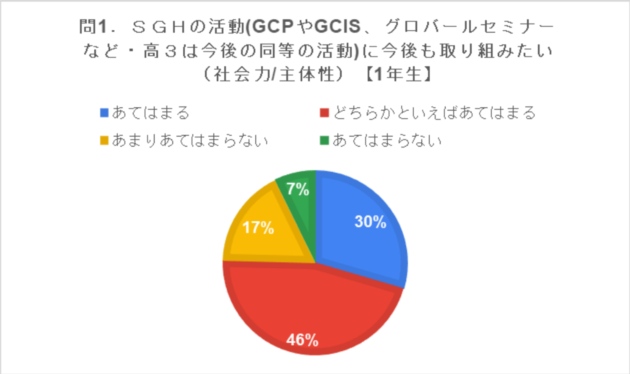
②同じアンケートをGCISプログラムを行った1年生と、SGHプログラムを行った2，3年生に実施した場合、1年生では学習の狙いがSGHのグローバル課題まで行きついていないため、2，3年生の方が高い。

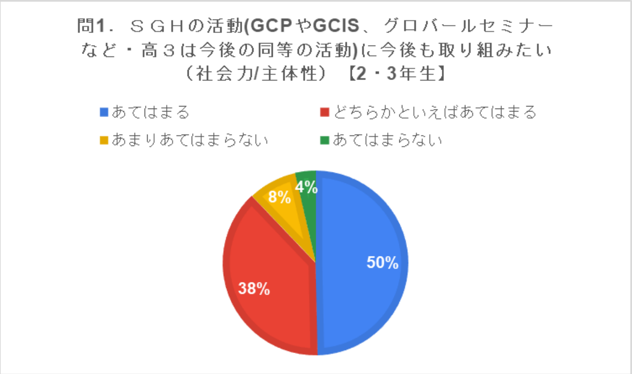
③過去4年間と比べるのは、今年は特殊すぎるため比較対象とならない。

※過去4年間の比較グラフは、昨年記載済み

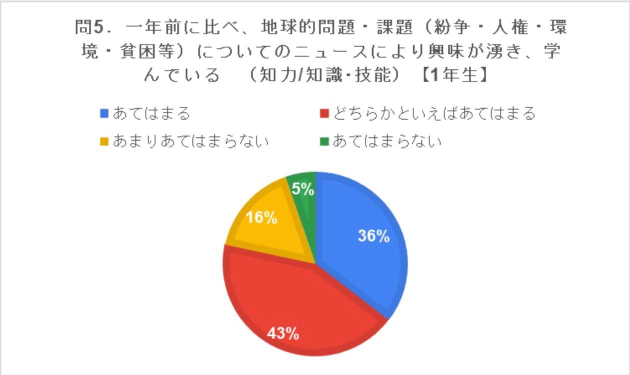
まずは、教育がいかに生徒の意識を変えるかが明確となったいくつかのグラフを提示します。以下に示すものは、端的に上記②の教育効果の重要性示したものと言えます。

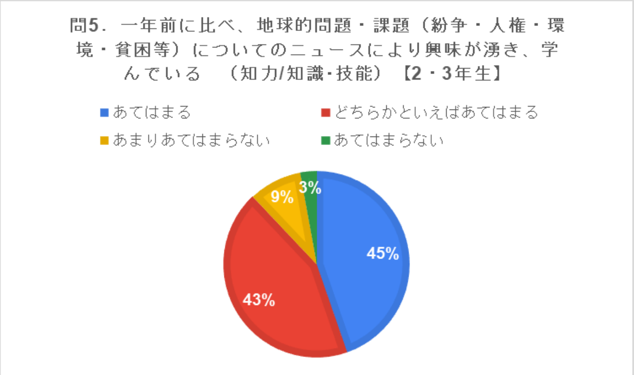
問１　SGHと同等の活動を今後も取り組みたい　高１(左)→高２，３(右)





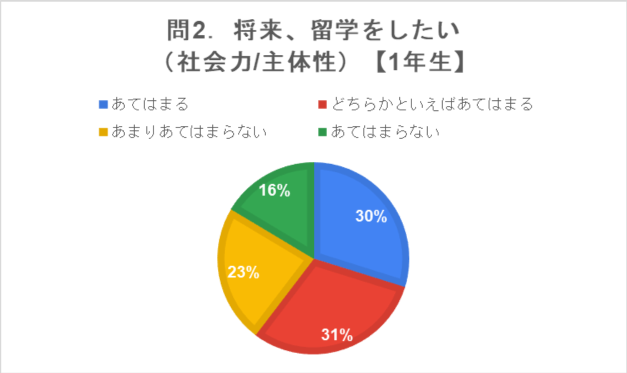
問５　地球規模課題に興味を持ち学んでいる　高１(左)→高２，３(右)

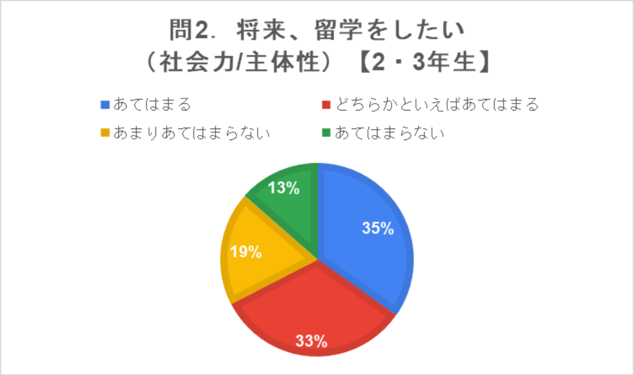




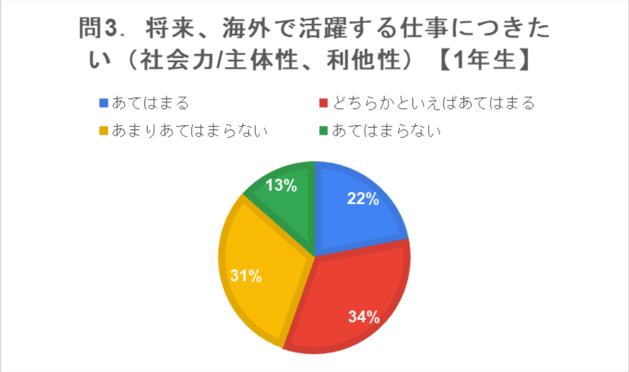
次に、上昇が微少のものを示します。これらは、潜在的にグローバルに働きたいという気持ちがあることを示しているものと思われます。

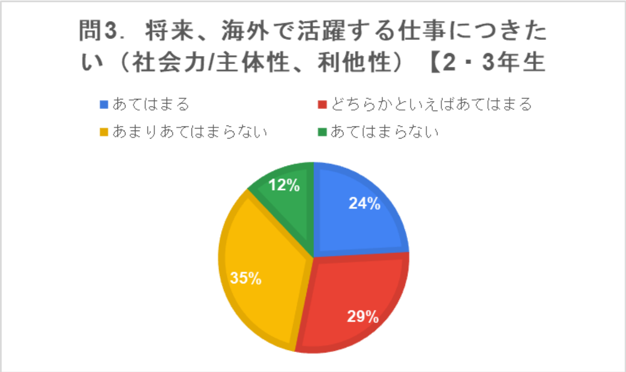
問２　将来、留学したい　高１(左)→高２，３(右)





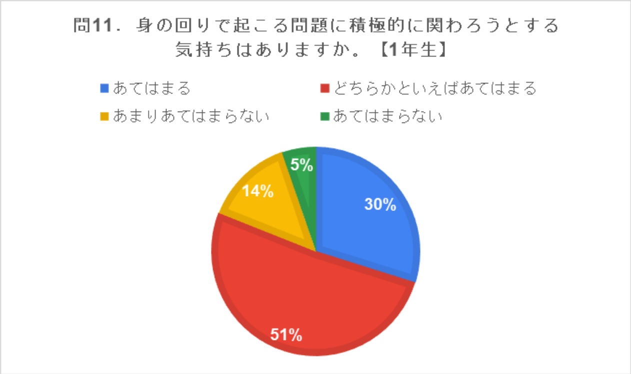
問３　将来、海外で活躍する仕事につきた　高１(左)→高２，３(右)

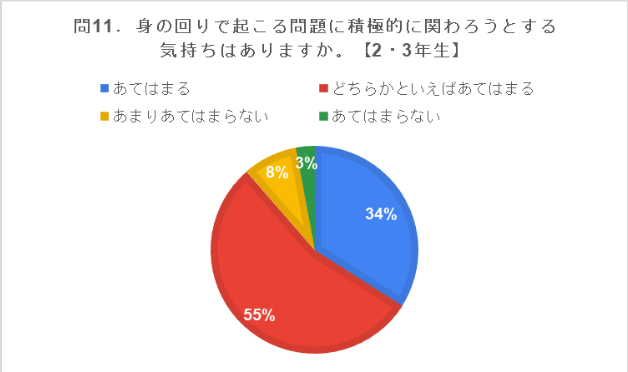




これは課題の残る結果のグラフです。高１で身近な問題（食品ロス）を探究のテーマにしたので、高１で上がっていると思われたものですが、上級生の方がやはり意識が高い結果となったものです。ただ、高１も今年の特殊性から取り組んだ時間が少なく、きちんとGCISプログラムを行なえば、変化がみられると期待されます。

問１１　身の回りで起こる問題に積極的に関わる気持ち　高１(左)→高２，３(右)

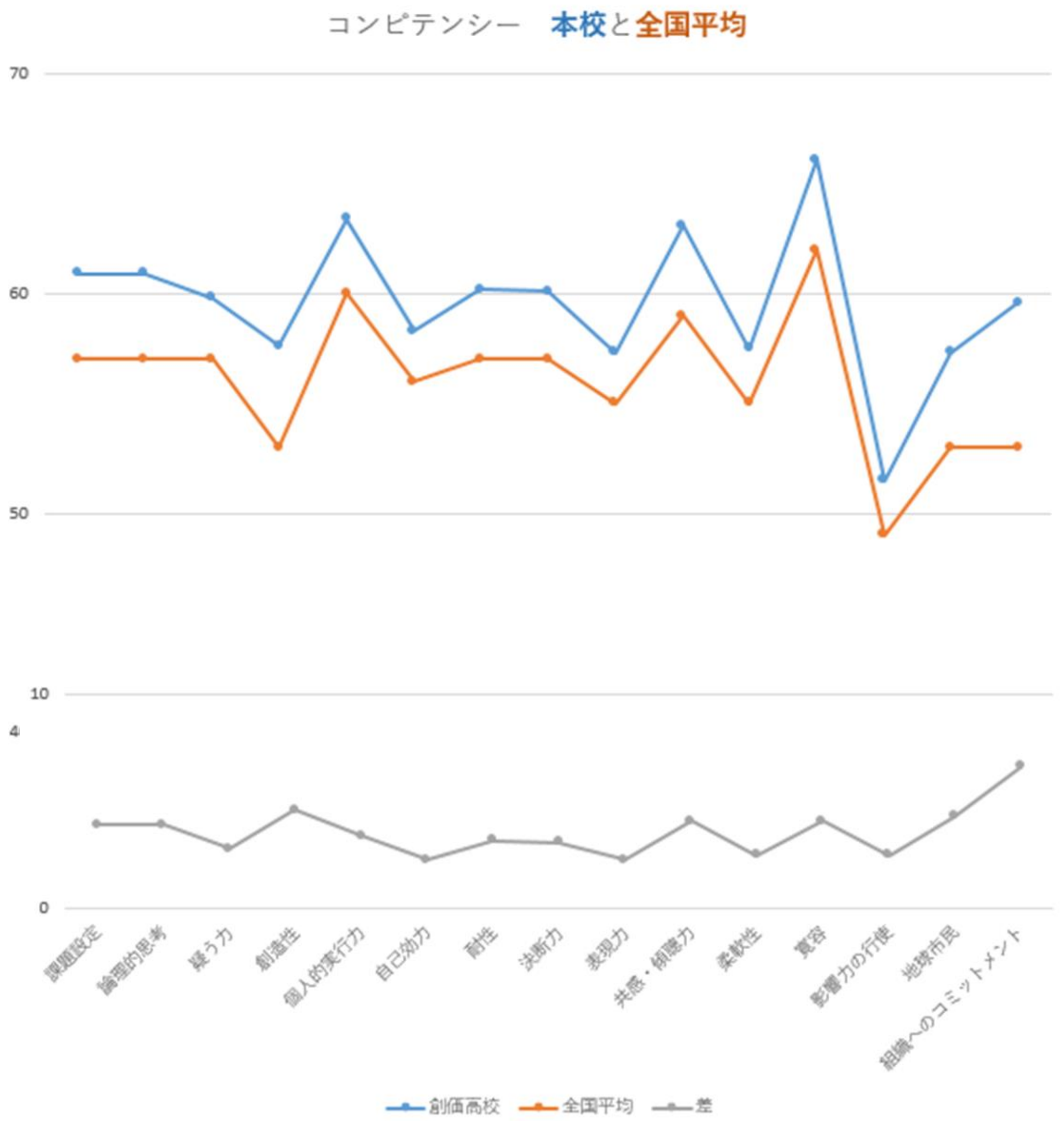




B）　外部業者による資質の分析

■生徒対象の測定

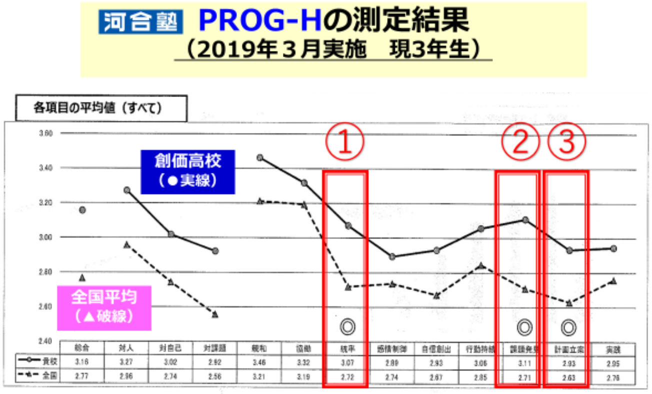
中間評価の折、アンケートでは資質能力の向上測定は不確かであることの指摘を受けている。意識の調査は可能であるが、資質能力の向上をいかに測定するかは課題であった。一昨年度より、河合塾の「学び未来PASS」を利用して測定してきた。教育効果として大変に良い結果（全国で3本の指に入るコンピテンシー）をいただき、引き続き利用を考えていたが、紙ベースでしか実施できなかった。オンライン授業下でもオンラインで測定できるAi GROWに切り替えた。これは前年度より、先駆的に取り組みを行うGLPでも一度試しており、SGHとして流れの良い取り組みとなった。



Ai GROWの結果も、非常に良いものとなりました。本校は全国平均より1つの項目を除いて圧倒的に上であることが判明した。特に全国平均を大きく上回っているのが、・創造性　・共感、傾聴力　・寛容　・地球市民　・組織へのコミットメント　などでした。

逆に、別の測定値から全国平均を下回ったものは、・自己効力　でした。このグラフではあまりはっきりしませんが、全国との差が少なくなっています。もともとこの項目は、日本人は海外に比べて圧倒的に低いものとして話題になっていますが、その日本の中でもさらに低いものとして示されたとこになりました。高い理想を掲げ、地球規模課題に挑戦することによる無力感は以前も指摘されてきましたが、これから展開していくGCISのビジョンとして「私が世界を変えていくThe world is ours to change」を掲げている。SGH後の今後の課題の一つが見えたと言えます。

参考までに、昨年まで行っていたPROG-Hの結果を載せます。



①統率 ②課題発見 ③計画立案力

■教員対象の測定

本年度は企画していたが、緊急対応の連続の中、その時間をとることができなかった。今後は利用していきたい。

C）　英検受験者数と合格者数の分析

SGHになった当初、スーパーグローバルハイスクール指定校を対象とした特別価格で英検が受けられて、英検の受験率がまず大幅に上昇しました。その後、その割引はなくなったものの上げ止まりとなりました。準1級は非常に高いレベルという印象でしたが、SGH後は敷居が下がりました。次の表は、2014年のSGHに採択される前、2015年のSGHアソシエイトの時、2016年からSGHとなった5年間の推移です。

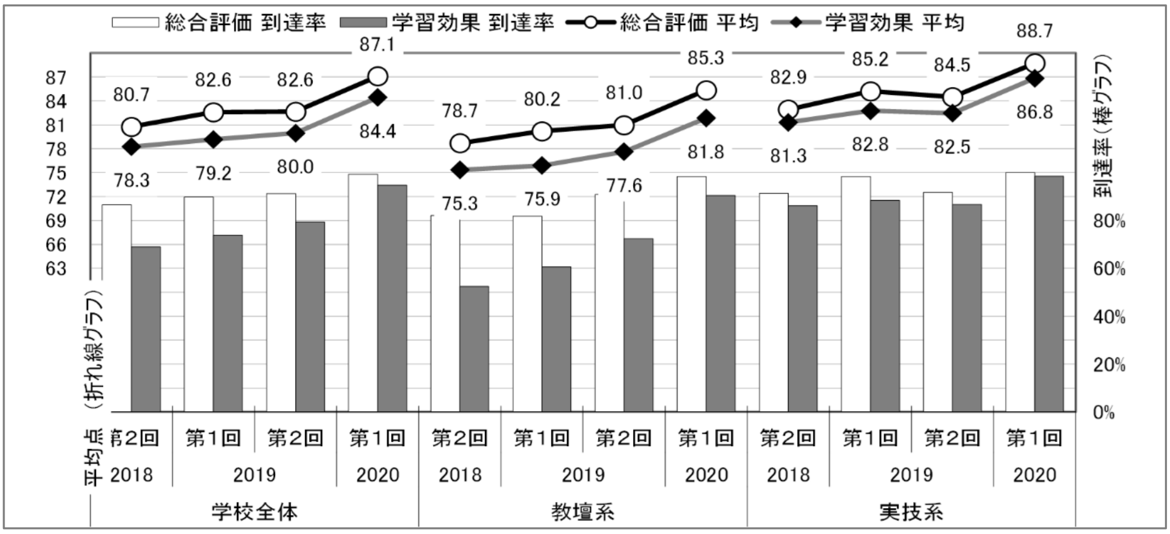
本校は特別な英語教育を行っているわけではありません。英検合格を売りにした私立ではありませんが、意識の向上の反映ととらえています。本年の受験者数減少は、英検の受検機会の減少がそのまま反映されていて、合格者数は高い数値を出しています。

英検の受験者数（合格者数）の推移

		SGHA	SGH 1年目	SGH 2年目	SGH 3年目	SGH 4年目	SGH 5年目
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
準１級	67（6）	127（13）	204（23）	272（32）	258（25）	251（15）	106（32）
１級	1（0）	6（1）	18(4)	16（1）	15（0）	3（1）	7（3）

D）　教員の意識の変革と教育力向上の分析

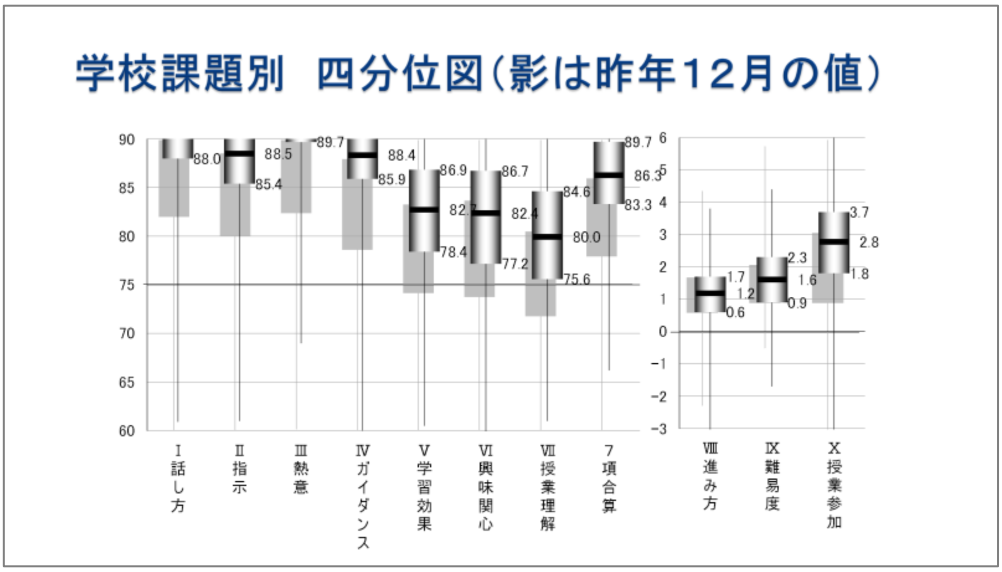
教員はなかなかメタ認知をすることが難しいため、代ゼミによる授業評価アンケートを毎年行ってきています。こちらは今回、非常に高い値を示しています。



折れ線黒が総合評価、灰色が学習効果です。共に3年間上がらせることができました。七つの全項目で大幅に上昇しております。左側の縦軸がポイントを表しておりますが、この評価では、75 以上、茶色の線以上が目標となっておりますので、遥かに高い評価をしてくれていることになります。※75が目標点として与えられています。

また、下側の棒グラフは、その目標である 75 ポイントに達成している授業が学校でどれくらいの割合を占めているかを表しています。棒グラフの目盛りは右の縦軸です。

学校全体としては、総合評価（白い柱）はほぼ 100%、学習効果を上げている授業（黒い柱）も 95%に達しています。代ゼミの分析者からは、「すでに 80 ポイントを超えている学校が、さらに4ポイント上乗せしたのは極めてまれなことです」と驚きを伝えてくれました。

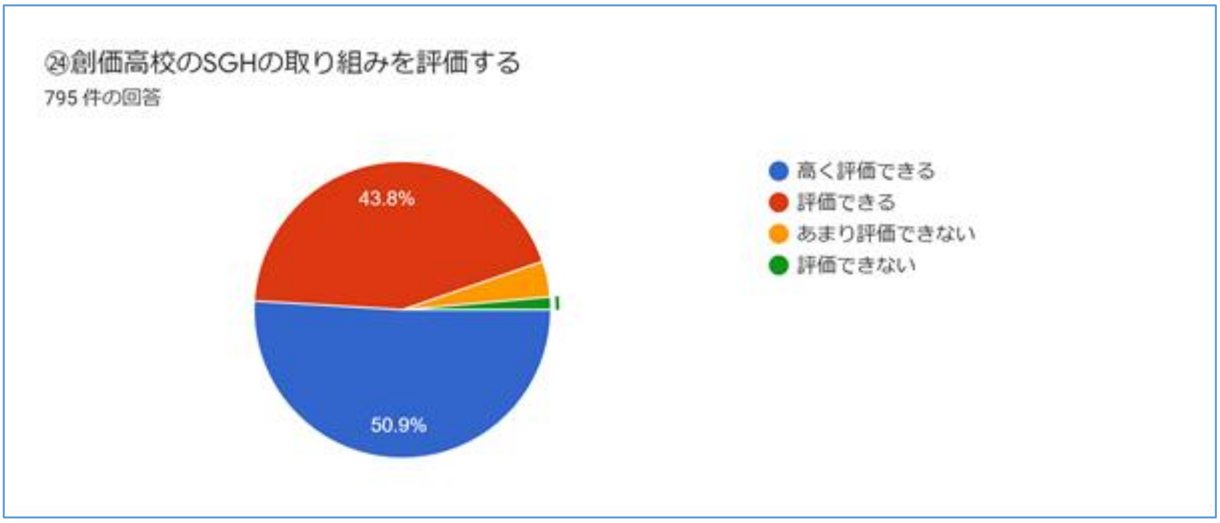


上記のグラフは、学校課題別　四分位図というものです。

円筒が、生徒の人数の 50 パーセントの塊を表しています。円筒の中の黒い太線が中央値です。影がついていますが、これは、一昨年の12月の値です。全項目で大きく上昇してことがわかります。高いものは、表から飛び出しています。前回より上昇することを目標としたものです。

グラフからは特に、先生方の熱意・意欲を強く感じてくれていることがみられます。
ガイダンスの上昇も目立ちます。ガイダンスとは「授業の目標や勉強のやり方について、先生は説明をしてくれる」であり、この上昇から、先生方がきめ細かに取り組んでくれていることがわかります。これが授業参加や授業理解の上昇に結び付いていると考えています。
また、分析では、休校期間の学習、すなわち本校においてはオンライン学習ですが、これについても肯定的に評価されています。このオンライン学習が成功したことも今回の上昇に結び付いていると、分析には書かれていました。
また、生徒の授業参加の項目は、一般的にはなかなか上がらないものだそうです。しかし、本校では大きく上昇しております。これは、先生方が「アクティブ・ラーニングを中心にすえた授業を展開していることが推察される」と分析されていました。これらは、SGHで始めた「言語技術」の授業が教員間に一般化し、対話による授業、一方通行ではない授業、いわゆる本当のアクティブ・ラーニングを教員が目指したことによると分析しています。

E） 保護者アンケートより分析



２０１８年度の保護者アンケート回収率は６３９件で６１％、２０１９年は９４４件で９１％、本年度は７９５件で７１％でしたが、この減少はオンラインによって様々な連絡やアンケートが頻繁になったため、保護者に煩雑感を与えたこともあると分析しています。
上記の保護者のアンケートのうち、「ＳＧＨの取組みを評価する」は、よくあてはまる、あてはまるが、一昨年度９３％、昨年度は９２％、本年度は９５％と、ほぼ上げ止まりの中アップして高い評価を得ています。

F） 運営指導委員会

■ 第一回運営指導委員会

日時：2020 年 11 月 21 日
参加者：村上 清 岩手大学学長特別補佐／遠藤誠治 成蹊大学法学部教授
小林 亮 玉川大学教育学部教授
狩野、中川、塩田、久保、谷、佐々木、江添、井上 （記録：今野）

久保：SGH 最終年度、ユネスコスクールへと考えて、今年はかなり「探究」を意識した。根幹としては、やはり SDGs をメインにしていきたいと思っている。方向として合っているか。

村上：ユネスコスクールに向かうのは、今後の方向性から考えると必要条件だろう。基本的には、技術のところから、コンテンツをどうするか、に入ってきている。コンテンツといっても、高校生のレベルだと、国際社会で使える技術を身に着けることが大事だろう。コンテンツはあとから深めるでもいいだろう。そうはいっても、生徒にとってみれば、コンテンツありきで、これが必要だとならないといけないのでそこはジレンマの部分。コンテンツを作りこむことも大事だし、地球規模課題や国連の問題といった課題はとりあがられるだろう。SDGs は個人の問題でもあり、地球の問題でもあり、地域の問題でもあると、様々な側面で把握し、理解し、それを多角的に展開できる力が大事だろうと思う。創価高校の場合は、世界視野で考えることと、創立者の基本的な思想である「人を思いやる」ことがあるので、そこを両輪で推し進めていくことが大事なのではないか。UNESCO の感覚としてもそういったところはあるのではないか。

小林：まず、すばらしい中間報告会に招待いただき感謝している。SGH の教育実践成果を聞いて、お世辞ではなく、ユネスコスクールとして必要な要素、教育内容は満たしていると確信した。あとは、それをどう見せていくか。つまり、ユネスコは国連の専門機関なので、国連と同じ志をもっている。ユネスコスクールでは、特に、SDGs を最前面に打ち出している。模擬国連も、ユネスコスクールの活動の一環として実践すべきと思う。特に世界平和のための人材育成も、ユネスコスクールの目的そのものである。内容的にはすばらしい。UNESCO から見れば、こういう学校こそ早くユネスコスクールになってほしいと思うだろう。そういったところは、強調していかれるといいのでは。特にグローバルシティズンシップエデュケーションについて、貴校は非常に先進的な取り組みをしている。貴校は、ビジョン、ノウハウ、見通しを持っている。ユネスコスクールの枠組みにうまく落とし込んでいければ、ユネスコスクールに入っていけるだろうし、SGH としてのこれまでの活動とうまくシナジー効果が生まれるのではないかと非常に期待している。

遠藤：大変興味深く、発表を聞いていた。これまで積み重ねてきたことが蓄積されていることがよくわかった。いずれのプログラムも、生徒が受け身ではなく、生徒自身が自分たちで関わるという姿勢をどんどん身に着けてきていると感じた。一般的には、日本の若者は有力感がないことが大きな問題。能力は持っているが、自分が何かをなす、社会に関わる、変えることができる有力な主体だという感覚がかけていることが大きな問題。このプログラムの中で関わってきた生徒たちは、「自分は有力な主体である」という感覚をもって、大学生活に入っていくのではないかと思った。その後の社会生活でも、「自分が社会を主体的に構成する主体である」と受け止め行動できる基盤づくりをされたのではないかと思う。グローバルでなくても、教育においてそれは大事。そこに言語能力と対人スキルがあわさることで、良い結果が出てくるのではないかと思う。なかなか大変だと思うが、理想的には、卒業生がどうしているのか、フォローアップできると、創価高校の教育のユニークさを打ち出すデータにもなり、宣伝にもなるのでは。

石野：現在、SGH のレガシーとして、探究科を昨年度から教科として立ち上げた。村上先生にもアドバイスいただきながら、コロナ禍のハンデはあったが始めた。QFT を使い、問いを立てながら探究を進めている。今後は、フードロスの問題を取り上げ、足元からすぐできるアクションプランを作ることにしている。ゲストも来てもらって講評をいただく予定。来年度 2 年生では、行政、国際機関、ビ

ジネス、大学から、興味のある分野を選ばせて4人一組で探究活動を1年間行う。身の回りのことから、地域、世界にすこしずつ視野を広げていくイメージ。これまでのGCPの反省点は、急に3年生で遠い話をしていたので、わたくしごとにするのがすごく難しかった。GLPでも核廃絶問題を学ぶことで、「気づいても何もできない」という無力感に気づいてしまいあきらめてしまうことが多かった。最終的には、「世の中を変える」という誓いをたてるところまでを、高校3年までにもってもらって、実際に世界を変える力を大学でつけていってもらうことをゴールと考えている。

村上:先生たちも一緒になってやっていて、生徒もその中にいるというのは非常に重要。

小林:ユネスコスクールの観点から見ても、今の話は重要なポイントになる。ユネスコで現在進めている教育プログラムのひとつは、生涯学習の定着化。教える先生から学べる先生への転換。生徒からどれだけ学べるか、地域から学べる教員であるかが非常に重要。

石野:探究の授業には、担任も入っている。教員は問うことから一番遠い職業。問うことは恥ずかしいと考えるところを打ち破るのが一番大きなところかもしれない。私自身、問うことに向き合って、ともに勉強している。核についての科学的知識は、生徒に教えてもらった。そういったことが生徒間、教員間でできるようなきっかけに探究がなればと思う。

村上:その経験は、生徒を一個の人格として認めている証。人権という感覚から考えても、生徒を一人の人間として認め、そこから学ぶということは、生徒にとって大きなインパクトがある。

小林:探究活動の発表で強く感じたのは、解のない問題にたいしてどう関わるか。まさにグローバル課題に取り組むことは、どれも解はない。そういう問題に対しては、教員も生徒も一緒の探究者である。「一緒に探究しよう」という「共修」がユネスコスクールの学びのあり方として推奨されている。それをすでに実践しているなら、そこを確信して深めていってほしい。貴校は、平和学習を伝統的に進めてきている。国連の理念でもあり、ユネスコの理念でもある。今、ユネスコスクールに求められるもう一つの資質として、平和概念をどれだけ深く、多角的にとらえられるか。日本は幸いにして、75年間戦火はないが、貧困、虐待など「平和な社会」とはいえない現状がある。平和をどうとらえるか、多角的にとらえられるような課題の出し方が重要だろう。平和概念の深化、多角化に、ぜひ先導的な役割を果たしていただきたい。

久保:平和について、高校として多角性をもっていくにはどのようにしたらよいか。

遠藤:平和というと、日本の場合、核兵器の問題とか、遠いところにある貧困問題のようになってしまう。自分がかかわる問題としての「平和」を感じられにくい仕組みに世の中がなっている。日本は一見平和だが、こんなに格差があって平和なのだろうか。OECD諸国の中でも、不平等の率が高い国になっている。上の世代の人々が思ってきた「日本が平等で環境先進国である」という認識と、今のデータはずれている。そういった認識のずれと、平和を遠くに感じてしまうことをどう教えるかは大きな課題。その中で、私自身は、SDGsが17にも分かれてどっさりあるので、いっぺんにやるのは大変だと思う。基本は、温暖化を中心にすえていくと、自身が環境破壊者になっていて、温暖化に貢献していることが必ずある。自身が主体的に関わることで変えられるとともに、自分が壊している側でもあることにまずは気づくこと。ここにはタフさが必要。「これをしちゃいけない」ばかりになると、なんと

なくいやだな、考えたくないとってしまう。そうではなく、よくも悪くも、何かすれば世界は変わる主体者であるという自覚を持ってもらうことが大事。そのためには、遠い問題から自分へ近づけることもなるだろうし、身近な問題を徹底的に掘り下げればグローバルな課題につながるというやり方もある。どちらのアプローチもあるだろう。「世の中ここがおかしいよね」と思うことにはたらきかけ、やりながら学ぶというふうにハードルを下げることが大事。動きながら考えるんだ、正解がないんだ、全員が考えながらやらないといけないんだ、という認識に変えられたらいいと思う。わずかな知識でも、主体的にやりたいという気持ちがあれば、やりながら学べるというやり方がとてもいいのではないかと思う。

小林:身近な問題とグローバルの問題のつながりについて共感。ユネスコスクールでも重視されている。OECD でも社会情動的コンピテンシーを重視している。その中で特に、国際会議でも取り上げられている考え方が 2 つあり、一つはソリダリティ、二つ目はレジリエンス。この 2 つは、ユネスコスクールで育成されるべき生徒の重要な人間力だろう。自分と全く違う民族、宗教、人種の人たちとの共感力や、世界中が連帯していかないと解決していけない課題があるという視点、自分と世界のつながりを発見していく視点がユネスコスクールとしても大事になるだろうと思う。文科省が ESD の推進拠点と定義しているので、地域連携や環境問題に力を入れている学校が多い一方、国際連携の取り組みが弱い。文科省でも、そういったことを積極的にやる学校に入ってほしいという話題がある。貴校ではそういった交流の事例がすでにあるので、国際交流の活動をぜひやっていってほしい。ユネスコスクールには海外とのネットワークがある。特に歴史的なトラウマを抱えている隣国との対話、相互理解を進める取り組みをやってほしい。韓国、中国、北朝鮮にもユネスコスクールがある。日本のどのユネスコスクールも交流していない。中長期的な視点で、ぜひ貴校が先導的役割をしてほしい。

久保:発表形態について。今年で SGH は終わる。ユネスコスクールとして、年 1 回発表会をやりたいと考えているが、その方向性は正しいか。

小林:ぜひ発表をしていただきたい。そこで大事なのはテーマ性。平和学習やグローバル学習など大きなテーマのもとに、毎年何回かやってみては。異学校と共同の発表会や、交流をいれながらやってみてはどうだろうか。

村上:せっかく今、創価高校が SGH で作ってきたフレームワーク、核となるものがある。ユネスコスクールとしての条件は十分すぎるほどそろっているとの話なので、それをうまく使うことが大事。もうちょっと枠を取り払って、一つのフレームワークとして、場を提供するリード校として、発表を重ねていくという形が作っていけば良いのでは。それが高校のネットワークを作り、国をまたいで高校生同士が入っていろんな話し合いをすれば、大きなムーブメントになるのでは。

塩田:漠然としたイメージが、かなり焦点を結んできたと感じる。何かしら発信、発表していきたいという気持ちはあったが、どうしたらいいかと思っていた。いろんな階層で、すでに国内外の学校とはつながっている。中国語の授業では、武漢大学とつながっている。沖縄、広島の高校ともつながっている。それらをうまくコーディネートできればすごくいいものになると感じた。

遠藤:サステナブルにするためには、現場でやっている先生方に無理がたまりすぎないようにという視点も大事では。確かに上に立たれる先生方が、現場の先生方をエンカレッジすることだと思うが、

教科を教えながら+αでやることが多くなると思う。それを「いいね、頑張りなさい」だけでやるのはかわいそうだと思う。経営資源の投入の観点で考えると、その辺も工夫して、持続性が達成されるといいなと思う。

中川:特別なプログラムではなく、日常性をもたせるところが大事だろうと思う。

小林:ユネスコスクールでは、価値教育、変容的教育といって、世界の不正常な現状をより正常な状態にもっていくためのプロジェクトを様々展開している。これらの多くは、創価高校、あるいは創価学会の理念と共有されるものが多いと感じた。一つは「文化の和解」というプロジェクトでは、過去の戦争、奴隷といった歴史の軋轢をいかに乗り越えるかという教育活動を行っている。特に中央アジアで精力的に行われている。もう一つは「宗教間理解教育」。宗教間対立が平和をみだすことにつながっていることがある。貴校は仏法の精神を根幹にされている。創価大学には、インドネシアやマレーシアなどイスラム圏の学生もいる。学生の間で、イスラム教と仏法との宗教間対話が行われていて、良い成果を出していると聞いた。。ユニークな取り組みとして、成果が見込めるのではないか。

中川:SGHになって大きな変化を感じるのは、まず久保副校長が英語の勉強をずっとしていること。毎朝英語のリスニングをしていて、最近は、外国人講師との教員面談も一人でやっている。

小林:海外との交流を始めると、生徒の「知りたい」「友達になりたい」という内発的動機づけになり、英語学習への意欲があがる。そういう意味で、ユネスコスクールの国際連携を積極的に使うと、そういった副次効果が生まれる。

■第二回運営指導委員会

日時:2021年2月20日

参加者:村上 清 岩手大学学長特別補佐/遠藤誠治 成蹊大学法学部教授
佐藤 悟 元ブラジル大使/飯田 順三 創価大学法学部教授
鈴木 将史 創価大学教育学部教授
狩野、中川、塩田、久保、谷、佐々木、石野、永嶋、江添、井上 (記録:今野)

久保:運営指導委員会のたびに貴重なご意見をいただきながら、毎年少しずつ進化してきた。今年はSGH最終年度として「GCISへの移行」を主眼としやってきた。SGHは終わるが、GCISに引き継がれて続いていく。特に来年度 2 年生の取り組みは未知数なので、やり方をご教示いただければありがたい。

村上:GCISはあくまでも、文科省の総合的な探究をやるためなのか?

石野:きっかけはそう。だが、文科省が求めている以上のことをやろうといろいろなことを巻き込もうしている。

村上:文科省からの補助はない?

狩野：法人全体でバックアップしていきたい。主にお金がかかっていたのはFWだった。文科省からの補助はないが、法人で肩代わりし、自由に使える環境を用意している。

久保：FW をどう続けるかが浮いている状況。観光ではなく、探究としての深みを持たせるには事前準備の時間が必要である。時間の確保と、どこが請け負うかを今後考えていかないといけない。

塩田：これまではあまり連続性のない学びの FW だったが、代表選手型ではなく、全員でやる形になってきている。GLP でやったことをもとにしながら、全員で総合的な探究の時間に落とし込む。

村上：今おっしゃっているような、探究型で代表選手型ではない形も大事だと思う。SDGs をやっている都市は内閣府認定のもので多くある。その具体的取り組みのなかで、学んでいる内容とSDGs を勧めている地域と連携していくのはありかもしれない。

石野：1 年生は基礎的なものをやる。2 年生では総合クラス対象に、4 つのコースから 1 つ選び、アクションプランを提案する。これを水曜 5 限目に実施予定。必要あれば、6 限目の LHR も活用したいと思っている。

飯田：文科省から提示されている新しい学びの形は、大学生ですらこれを達成するのは厳しいものをやらせようとしていると感じる。文科省としては、大学のボトムアップをこの先に想定していて、その前に高校のボトムアップが真意なのだろう。SGH よりも念入りに組み立てていく必要があると感じる。まず問いをたてさせることが難しい。今日発表のあった食品ロスも、小平市コミュニティスクールの発表もすばらしかったが、そもそもそのテーマに到ったプロセスは？

石野：食品ロスについては、テーマそのものは教員で設定した。その中から 4 つの分野も教員で決めた。その 4 つについて、クラスでジグソー法をつかって学び、そこからさらに興味あるものを選んでもらった。グループに別れた後に課題を見つけ、問いを立てた。

飯田：その大元のテーマを探させるという手法はどうなのか？

石野：3 年のファイナルプロジェクトはその形に近い。今回の 1 年次は、まず探究学習の形を練習し、学ぶことが目標だった。3 年次には自ら地球規模課題からテーマを見つけ、ここに深めてもらう予定。そこまでに問いの立て方のトレーニングを行うために、身近な食品ロス問題で掘り下げる練習をした。今日の発表には野球部の生徒もいた。発表の場に自分の意見を出し、最終的に代表になったのは大きな刺激になったのではないか。今日の発表で、国内でトップの人に意見をもらう経験は大きなこと。野球部の生徒が発表していることも周囲にとって大きなインパクトになったのではないかと思う。

遠藤：全体として、よくやってこられた。この先のことを考えている中であえていうならば、自分自身の子供のころを振り返ると、よく遊んだなと思う。遊びというのはただ楽しいということではなく、無駄と思えることに興味をもって取り組むことで、たくさんの種やこやしが育っていくものだと思う。そういう要素を先生方が見つけていくことを考えていけるといいのではないかと思った。もう一つは、グローバルとローカルをもう分けないほうがいい。ローカルな問題をつきつめればグローバルな問題につきあたる

ことに気づければ良いのではないかと思う。自分の人生の中の楽しいことや、一生懸命取り組んでいることとグローバルな問題とのかかわりを掘り下げてみては。

久保：私学なので入試に勝たないといけない。探究もやらないといけない。高校生に要求されている要素が多いと感じる。英語も数学も、どれもできないといけないうえに探究が加わる。中高一貫の良さを生かして、中学校にいろんなものを落としていきたいと考えている。

永嶋：言語技術ではコミュニケーション能力を中心にすえながら、試行錯誤でやってきた。探究に向かっていくにあたって、石野も言っていたが、分析や思考の部分が重要になってくる。この5年間高校でやってきたのは、ある意味小学生でもできる基礎的な部分だった。それすらもやってこなかったので、高校生でやった価値はあった。ここからは小中高で連携を取りながら、小中で基礎をやり、高校では基礎を生かした内容を勧めていければと考えている。

石野：小平市のほうのテーマ設定は、火曜日5，6限の時間をつかって、学校設定科目GLPの生徒で先行実施した。小平市が用意している出前講座のサービス「デリバリーこだいら」を活用した。設定されているテーマの中で、コミュニティスクールを選んだのは生徒自身。

飯田：生徒がやりたいという問題意識をもったのが素晴らしい。大事なのは何に興味があるのか、興味の芽を見つけてあげること。教員の声かけや技法が大事。身近なものにリンクさせれば勝手に動き出す。最初に気づかせるのは、大学教員としても難しい。大学の授業でも、「なぜ」を繰り返すと自覚が生まれる。その問いかけのやりとりが一番時間かかるが、今年はZOOMだから一対一のやりとりで深堀りができた。最初の深堀がとても大事。

塩田：市民講座はどこの自治体ももっている。が、稼働率は低い。これをうまくつかえばウィンウィンな関係になる。市としては講座の稼働率があがって実績としてアピールになるし、学校も学びが深まる。なんとか引きずりこむ方法を考えないといけない。

石野：今回は教育長まで来ていただいて、生徒が作成した3本の動画に対して、長文のフィードバックをいただいた。生徒はとても感動していた。

村上：行政としては、生徒の側から来てくれるのはとても大事。行政マンにとっての教育にもなる。もっとやられたらいい。遠藤先生の遊びの話は大事。興味があればやる。最初の興味の持たせ方が大事だろうと思う。全員が全員ではないだろうが、しっかりと探究したいものを出させるということをやれると良い。

遠藤：自身のゼミの経験でお話しすると、国際政治を教えているが、学生には「テーマは何でもいい、興味のあるものをやりなさい」と伝えている。本気で1つの論文を3か月くらいかけて読ませ、「自分が知りたいことはなんですか」を問いかけることに時間をかけるようにしている。「なぜそれが知りたいか」を聞きながら、「その問い方だとこういう問題は見えないよね」と、本当に知りたいことは何なのかをこねくり回すように問う。自身のゼミでも、自分が知らないけど知りたいことをたくさん問いとして投げた。その中から受け止め手の学生が「それは自分にとっても面白い」と思えるものを見つけてくれるのではないかと思う。そのためには少し先生方が余裕をもって、自身の趣味の世界から面白い

と思うものをためておく姿勢があると、生徒が「これ面白そう」と思うものを持ってきたときに、自身の関心の中から新しい問いをかぶせられるのでは。

飯田：大学の教員と高校の教員との環境の違いが大きい。高校教員は、教科を教えて入試をクリアさせなければいけないという問題を抱えている中で、余裕が生まれるのか。そこが求められているのは間違いないが、「そんな簡単なところまで」というところまで降りて行って落としていく、時間的余裕がどこまで作れるか。

村上：創立者のご指導に「自分がしびれていないと相手をしびれさせられない」とあるが、それを自分が実践しないといけない。どうしびれているかには様々な形があるだろう。言語技術を、先生たちが知っていることはとても大事。興味の部分、遊びの部分は、先生方それぞれの興味があることなら何でもいい。生徒たちの触れているコンテンツに触れる余裕をもたせることが大事。まず自分が調べ、傾倒する、しびれる部分は大事だろうと思う。それにどう生徒たちをしびれさせるかが大事な部分。余裕がないのはよくわかる。どの高校の先生方も余裕がない。そのゆとりをどうつくるかは、私立の学園だからこそできることがたくさんあるのでは。校長、学園長がゆとりをもたせる体制づくりが大事なのでは。

飯田：評価はとても大事。大学だとレポートを書いてもらうか、パフォーマンス評価で事前提示されたルーブリックに基づき評価する。評価方法はやる気のきっかけにもなる。どう評価されているかわからないのは生徒にとって不信感を生み出す一つの原因となる。ルーブリックを出すことはどの大学でも通例となった。高校でも、評価方法を事前に提示することが大事ではないか。評価のあり方は、文字情報で出させることと、それが苦手な子がいる場合もあるので、パフォーマンスでやらせることと、両方大事。

佐々木：今年から、絶対評価に変わって、事前に評価内容を提示するようになった。どこまでやればどんな評価になるのか、生徒自身がわかるようになった。生徒としてもがんばりやすくなったと感じる。生徒からの授業評価でも「ガイダンス」の項目がよくなった。この項目は上がりにくいと言われていた。これは評価項目の事前提示が影響していると考えられる。

佐々木：学習理解の程度を、生徒は 10 段階やテストの点数でしかはかれなかった。毎回の授業で何ができるようになってほしいかを示すことがガイダンスの重要性。その点がこの 1 年間で進歩したのではないか。

鈴木：今日の発表を聞いて感動した。教え込まれる学びから自ら探究する学びへという姿が、形になっている。いろんな面で、高校の SGH の活動が大学につながっていることがわかった。創価大学でも 2021 年度 51 期が入学する。SDGs を柱に様々な活動をやってきた。創価高校の活動を校内にとどめず、いろんな学校、海外と連携し発展させていっていただきたい。大学にくるとレベルが問われ、様々なビジネスコンテストなどにも応募して 1 位を獲得している。学園でも、今までできなかったことができたということだけに満足せず、レベルをどんどん上げていってほしい。その下地として高校ですばらしい学びができていることがよくわかった。最後に学園の男女共同参画の部分をさらに努力していってほしい。この画面の中に女性が全然いない。大学でも課題となっているが、ともに頑張っていきたい。

久保:発表は続けていくつもり。一つは SGH ネットワーク校に申請した。向こう 3 年間は SGH 校として引き続き発表をすることができる。もう一つはユネスコスクール認定予定。両方を合わせて、外に公開していきたい。形をつくった発表というよりは、ふだんの GCIS の授業をみていただいて、そのあとにこういう時間を取って意見をいただくという形を考えている。来年度もぜひご参加いただきご意見いただきたい。

太田:水曜日に GCIS のグループセッションに参加した。エビデンスの高い内容で、一つ一つの言葉に実感と本音があると感じた。先生方の見識と生徒のものの見方が育ってきていると感じた。グローバルイシューを身近な食品ロス問題に落とし込まれての内容で、刮目する内容だった。SGH のネットワークは法人としても引き続きすすめていく。運営の支えに先生方の力があると感じた。

■SGH 中間報告会

11 月 21 日(土)13 時 30 分　会場:創価高校　栄冠ホールとオンライン放映

【式次第】

一、挨拶　・ハイブリッドのことなど	塩田校長	(5 分)
一、GCP報告・オンライン SDGs 学園祭報告	石野教諭	(7 分)
一、GCIS(1年生探究学習プログラム)発表報告	江添教諭	(7 分)
一、GLP報告・生徒研究成果報告(日本語)	生徒代表 6 名	(12 分)
一、沖縄オンラインフィールドワーク実施報告	谷教頭	(12 分)
一、交流校発表　関西創価高 OG	落合咲子/上村まりね	(12 分)
一、講評	村上清運営指導員	(25 分)
一、閉会宣言	中川学園長	(5 分)

1、新たな取り組みについて

今回はリアルとオンラインの両方で中間報告会を行ったことにより多くのメリットがあった。

①保護者を含めたオーディエンスが格段に増えたこと。

②アンケートも同様にオンラインで集めたことにより、格段に増えた。(後掲)

③他校との交流が場所を離れていても行うことができた。

④実際のリアルの会場を放映することにより、すべてがオンラインではないため、特に生徒には発表のよい機会となった。

⑤受付・設営などの準備がほとんど必要なく、省力化しサステナブル感があった。

2、アンケート(オンライン回収 32 件)　抜粋

・学校の取り組みも生徒の報告も素晴らしく日々感激しています。平和を志向するのに、戦争体験や人が人を虐げてきた差別の歴史を知り、無意識にも忌み嫌う感覚が醸成された背景と向き合うことはとても大切だと思います。同時に地道に活動されてきた人のご苦労や希望に触れることも欠かせません。このような機会に触れさせたく工夫してきましたが親としてできるのは限りがあり、創立者のご配慮やそれをプログラムにしてくださった先生方のご苦労、生徒の真剣さが、ご協力くださる学外の方々の信頼を得ることに繋がっているんだと感じてなりません。

・映像分析活用のオンライン学園祭、GCIS, GLP,　オンライン　FW, 模擬国連と全テーマにつき、概要/具体的事例が紹介されていた点が大変良い。特に GCIS のあいまいな日本語探

求発表では、「一言ってどれくらい」とのテーマの設定から掘下げが、論理的になされており、非常に興味深く拝聴致しました。GLP 発表でも、自分で問いそのものを見つける事の大切さ、仮説/検証の繰返サイクルを通じ批判的思考が醸成される経緯がよく分かりました。2 月の最終報告会も楽しみにしております。

・難しい用語などはありましたが、わかりやすく、かつ長すぎないように伝えようという思いが伝わってきました。SGH が実際どういうものかつかめなかったのですが、輪郭や大まかなものは理解できました。見えない苦労はあるかと思いますが、素晴らしい取り組みに参加できたことは生徒・教職員の財産だと感じました。

・このような環境に触れることに感謝致します。生徒たちの明瞭で堂々とした発表に感銘しました。SGH や GCIS で、このような国際的な教育を受けさせて頂いていることに驚きました。

・とても興味深かったです。映像技術の指導などとても貴重な学習ができていると関心して視聴しました。

・5 年目に期せずしてオンラインというツールの特性を活用して、積極的にあらたな取り組みを展開された、教員及び生徒の皆様、素晴らしいですね。

・学園祭の映像を当日見ましたが、どのクラスも映像関係に進学希望かと思うほどレベルが高いと感じました。それに至るワークショップ等の取り組みを知り、生徒達もよい経験ができたと思いました。優秀賞作品も当日は漫然と見ていましたが、今日の説明でさまざまな工夫がなされていたことがよくわかりました。

・オンライン沖縄 FW に 100 名もの生徒が参加できたとのこと、実際に行く人数より多くの生徒が経験できてよかったと思います。これをきっかけに、いつか実際に沖縄に行かれるとよいと思いました。(2 年間沖縄生活しましたが、自然・人々・戦跡・歴史等をぜひ体感してほしいと思います。

・関西校の取り組みの様子を初めて生徒の発表で知りました。オンラインならではで、今後とも活動の東西交流を活発にしていければと思いました。

・初めて参加させて頂きました。コロナ禍の中にあって、創価高校ならではの学びを知る事ができとても良い機会を頂きました。親世代の学びとは格段に高度な内容で、これからの時代を担う人材育成のモデルとなって欲しいと願っています。またどんなに世界平和を目指してもやはり地域にどう根ざし展開していけるかが大事だとのお話に、自分の出来るところから平和が築いていけるんだとあらためて感じることができました。

・SGH への取り組みが、分かりやすく報告されていたと思います。特に生徒の発表は、その団体ごとに、良く努力して、学び、活動していると感じました。内容も興味深いものでした。コロナ禍により、フィールドワークがオンラインとなって、参加希望者全員が参加できたことは新しい取り組み方で、画期的で良いと高く評価しております。

■SGH 最終活動報告会

2 月 20 日(土)13 時 30 分　会　場:創価高校　栄冠ホールとオンライン放映

【式次第】

一、挨拶・指導員紹介、探究科への移行　　　塩田校長　（8 分）

一、GCIS の展望について　（28 分）

　① 1年生 GCIS のとりくみ　　　児玉教諭　（2 分）

　　「食品ロス」探究　代表発表　生徒報告　　★オンライン　（7 分）

② 2年のとりくみについて　今野教諭　(2分)
「小平市　コミュニティスクールについて」生徒発表　GLP3年　(7分)
③ フィールドワークについて　石野教諭　(2分)
「オンラインワールドツアー」　生徒報告　★オンライン　(7分)
一、姉妹校オンライン発表　関西創価高校　★オンライン　(10分)
一、講評　村上運営指導員　(25分)
一、閉会宣言　中川学園長　(5分)

1、新たな取り組みについて

中間報告会と同様に、リアルとオンラインの両方で行った。カメラの位置を工夫し、オンラインであっても臨場感と、発表者のスライドが見やすくなった。

①引き続き省エネ運営が可能となり、午前中はGCISの新しい取り組みに挑戦できた。
②アンケートも同様にオンラインで集めたことにより、格段に増えた。(後掲)
③他校との交流は、今回は現役生とできた。
④オンライン授業期間のために、実際の生徒の登校はない報告会となった。準備段階から当日まですべてをオンラインで打ち合わせ、発表とチャレンジングであったが、スムーズな運営ができた。

2、アンケート(オンライン回収 34件)　抜粋

・2016年度から始まったSGH指定校としての取り組み、そして最終年度の報告会にオンラインという形で参加できたこと大変に光栄に思います。関わって頂いた全ての教職員の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。生徒たち一人一人が地球規模課題に真剣に考え探求する姿にもとても感動致しました。

・すばらしい報告会を拝見させていただき、大変にありがとうございました。各学年の代表生徒によるGLPを見させていただき、大変に感銘を受けました。関西校の英語によるプレゼンテーションも大変に素晴らしかったです。地球規模の課題を見つけ、社会への関心・教養を高め、情報を収集・分析し、課題解決への議論・検討を重ね、答えを導き出し、それを多くの人と共有するという取り組みは生徒が将来、社会の中で必ず役に立つ力を身に付けていると感じました。

・テーマを決め、話し合い、資料作成、わかりやすいプレゼンテーション、全てに圧倒されました。様々な意見がある事をお互い理解し、のびのび授業を受けている様子が、とても実践的な授業で、大変素晴らしいと思いました。今後に必ず生かされるので続けて頂きたいと思います。

・とてもわかりやすく興味深い内容でした。どの報告も生徒さん達の自主性が表情にあらわれていて素晴らしいと思いました。昨年までのポスターセッションに向けての取り組み映像を見て、今年の3年生はコロナ禍の中でも工夫をしながらやりきり先日の発表だったのだと改めて感動しました。

・各学年、関西校と幅広い取組を紹介して頂き、活動内容の理解が一層深まり良かった。また各活動とも内容がよく深掘りされ、且つ進め方手法そのものが社会でも十分通用する実践的なものと感じた。

・活動報告、視聴させて頂きありがとうございました。コロナにより、全てのフィールドワークがオンラインとなり、念願叶ってGLPのメンバーにさせて頂いた娘もはじめは残念がっていましたが、マイナスに捉えるのではなく、その中でプラスに転じられたことも沢山あり、新たな発見と洞察、そして探究心を培われたことに、大きな喜びと成長を感じました。生徒の皆さんの真剣な取り組み

にとても感動しました。ありがとうございました。
・貴校の素晴らしい SGH の取り組みを拝見して、大変感動するとともに勉強になりました。まさに教員と生徒がともに取り組んで成長している姿を拝見することができました。これからの教育においては、自己探求意欲が最も大切になってきます。いわゆる「答えのない問題」への挑戦です。そのあるべき姿がここにあると感じました。今後も取り組みを続けられ、多くの生徒たちが参加できるような流れを作ってくださることを期待します。
・今、地球規模で取り組まないといけない課題について、生徒さんたちが真摯に考え取り組み解決への糸口を提案してくださっていることに、とても感動しました。今年は、学校でのプレゼンテーションができないのはとても残念でしたが、3 年生の息子も試行錯誤しながら懸命に取り組んでおりました。関西校の方々の英語による発表は圧巻でした。テーマとなったさまざまな課題について、自分自身もさらに勉強していきたいと思います。
・今年は直接学校に行ける機会がなかったので、オンラインでも様子がみられて大変ありがたかったです。
・最終報告会に参加させていただき、ありがとうございました。これまでも、毎回とはいきませんでしたが、可能な限り報告会を拝見させたいただいており、その度に進化している学園の取り組みや学園生の成長に、深く感心しております。その流れに勢いも感じ、今後は、GCIS の活動に大きく期待を寄せております。

10. カリキュラム表

2020年度（53期）2021年度（54期）入学生

教科	科目	標準単位	1年	2年 総合	2年 文系	2年 理系	3年 総合	3年 文系	3年 理系
国語	国語総合	4	4						
	国語表現	3							
	現代文A	2							
	現代文B	4		2	2	2	2	2	2
	古典A	2							
	古典B	4		2	3	2	2	2	2
地理歴史	世界史A	2	2						
	世界史B	4					3		
	日本史A	2							
	日本史B	4		2	4		3	4	
	地理A	2		2					
	地理B	4				2			2
公民	現代社会	2	2						
	倫理	2							
	政治・経済	2							
数学	数学Ⅰ	3	3						
	数学Ⅱ	4		4	4	4			
	数学Ⅲ	5							7
	数学A	2	2						
	数学B	2			2	3	3		
	数学活用	2							
理科	科学と人間生活	2							
	物理基礎	2				2	2		
	物理	4				2 ▲			4 △
	化学基礎	2		2	2	2			
	化学	4				2			4
	生物基礎	2	2						
	生物	4				2 ▲			4 △
	地学基礎	2		2	2				
	地学	4							
	理科課題研究	1							
保体	体育	7～8	2	2	2	2	3	3	3
	保健	2	1	1	1	1			
芸術	音楽Ⅰ	2	2 ●						
	音楽Ⅱ	2							
	音楽Ⅲ	2							
	美術Ⅰ	2	2 ●						
	美術Ⅱ	2							
	美術Ⅲ	2							
	工芸Ⅰ	2							
	工芸Ⅱ	2							
	工芸Ⅲ	2							
	書道Ⅰ	2	2 ●						
	書道Ⅱ	2							
	書道Ⅲ	2							
外国語	コミュニケーション英語基礎	2							
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4	4	4			
	コミュニケーション英語Ⅲ	4					4	4	4
	英語表現Ⅰ	2	2						
	英語表現Ⅱ	4		2	2	2	2	2	2
	英語会話	2							
家庭	家庭基礎	2		2	1	1		1	1
	家庭総合	4							
	生活デザイン	4							
情報	社会と情報	2	2						
	情報の科学	2							
総合	総合的な探究	3-6	1	1	1	1	1	1	1
学校設定	学校設定科目		1～5	1～5	2～6	0～4	4～8	13～15	0～4
計	計		29～33	29～33	32～36	32～36	29～33	32～34	32～36
LHR	LHR	3	1	1	1	1	1	1	1

（注）※●、▲、△は各々から1科目を選択することを示す。▲で選択したものは3年でも継続する。
※2年次理系選択者は化学基礎が終了してから化学を履修する。
※2年次理系物理選択者は物理基礎が終了してから物理を履修する。

学校設定科目
（1～3年次履修）世界市民探究Ⅰ、世界市民探究Ⅱ、世界市民探究Ⅲ　※3年次文系の世界市民探究Ⅲは2単位までとする。
（1年次履修）言語技術
（2年次履修）総合音楽、総合書道、総合美術、公民演習、地歴演習
（3年次履修）国語基礎演習、国語表現、国語演習、日本文学、外国文学、中国文学、環境と開発、平和学入門
総合数学、文系数学、総合解析、総合代数、総合幾何、現代物理、現代生物、現代地学
理科実習、上級音楽、上級書道、上級美術、情報基礎、総合体育、生活と文化、国際理解
総合英語、リーディング応用、英語演習、中級英語、上級英語
世界史演習、公民演習、地歴演習、理科基礎演習

2020年度

創価高校

教科	科目	標準単位	1年（53期）	2年（52期）総合	2年（52期）文系	2年（52期）理系	3年（51期）総合	3年（51期）文系	3年（51期）理系
国語	国語総合	4	4						
	国語表現	3							
	現代文A	2							
	現代文B	4		3	2	2	3	2	2
	古典A	2							
	古典B	4		2	3	3	2	3	2
地理歴史	世界史A	2	2			2			
	世界史B	4		5	4				
	日本史A	2							
	日本史B	4			3		4	3 ■	
	地理A	2							
	地理B	4						3 ■	
公民	現代社会	2	2				2		
	倫理	2						2	2
	政治・経済	2						2	2
数学	数学Ⅰ	3	3						
	数学Ⅱ	4		4	4	4		2	
	数学Ⅲ	5							7
	数学A	2	2						
	数学B	2			3	3	3		
	数学活用	2							
理科	科学と人間生活	2							
	物理基礎	2				2	2		
	物理	4				3 ▲			3 △
	化学基礎	2							
	化学	4				2			4
	生物基礎	2	2						
	生物	4				3 ▲			3 △
	地学基礎	2		2	2				
	地学	4							
	理科課題研究	1							
保体	体育	7〜8	2	2	2	2	3	3	3
	保健	2	1	1	1	1			
芸術	音楽Ⅰ	2	2 ●						
	音楽Ⅱ	2							
	音楽Ⅲ	2							
	美術Ⅰ	2	2 ●						
	美術Ⅱ	2							
	美術Ⅲ	2							
	工芸Ⅰ	2							
	工芸Ⅱ	2							
	工芸Ⅲ	2							
	書道Ⅰ	2	2 ●						
	書道Ⅱ	2							
	書道Ⅲ	2							
外国語	コミュニケーション英語基礎	2							
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4	4	4			
	コミュニケーション英語Ⅲ	4					4	4	4
	英語表現Ⅰ	2	2						
	英語表現Ⅱ	4		2	2	2	2	2	2
	英語会話	2							
家庭	家庭基礎	2		2	2	2			
	家庭総合	4							
	生活デザイン	4							
情報	社会と情報	2	2						
	情報の科学	2							
総合	総合的な探究	3-6	1	1	1	1	1	1	1
学校設定	学校設定科目		1〜5	2〜6	0〜4	0〜4	4〜8	8〜10	0〜4
計	計		29〜33	30〜34	33〜37	33〜37	30〜34	32〜34	32〜36
LHR	LHR	3	1	1	1	1	1	1	1

（注）※●、▲、△、■は各々から1科目を選択することを示す。
※2年次理系物理選択者は物理基礎が終了してから物理を履修する。

学校設定科目
（1～3年次履修）言語技術Ⅰ、言語技術Ⅱ、言語技術Ⅲ
世界市民探究Ⅰ、世界市民探究Ⅱ、世界市民探究Ⅲ　※3年次文系の世界市民探究Ⅲは2単位までとする。
（2年次履修）総合音楽、総合書道、総合美術
（3年次履修）国語基礎演習、国語表現、国語演習、日本文学、外国文学、中国文学、環境と開発、平和学入門
総合数学、文系数学、総合解析、総合代数、総合幾何、現代物理、現代生物、現代地学
理科実習、上級音楽、上級書道、上級美術、情報基礎、総合体育、生活と文化、国際理解
総合英語、リーディング応用、英語演習、中級英語、上級英語
世界史演習、公民演習、地歴演習、理科基礎演習

平成 28 年度指定　スーパーグローバルハイスクール　第 5 年次

研究報告書

令和 3 年 3 月 30 日

発行　学校法人　創価学園　創価高等学校

〒187-0024 東京都小平市たかの台 2-1

電話：042-342-2611(代表)

印刷　株式会社　コモダ印刷

〒185-0002 東京都国分寺市東戸倉 2-36-12

電話：042-321-0721